と。其處で玖賀姫は速待に下し置かれた。磐之姫の嫉妬を憚つて一人の美人を宮中に召しかねたといふのであるから此皇后の御勢ひを察すべきである。

八田皇女

二十二年の正月には御異母妹八田皇女の事でまた一騒動持ち上つた。八田皇女は、天皇に御位を讓つて自殺し給ひし菟道稚郎子の妹で、正に異母同胞の御仲である。絶世の美人であつたものと見えて天皇が八田皇女を戀ふる御心は實に切なるものであつた。處か這回も皇后磐之姫が頑として聽き入れ給はず。

磐之姫の嫉妬

嫉妬の炎に身うちを焦し給ふ有樣に、天皇も困じ果て給ひ、

帝の御執心

貴人の、建つる事立、うさゆづる、斷間つがむに、竝べてもがも。

と。歌に事よせて、ひたすらに哀訴し給ふ。歌の心は、天子の嗣を廣くせむが爲に妃嬪を立つるのは、物部が副弦を用意すると同じく、皇統の斷絶を恐るゝが故といふのである。皇后之れに答へたまはく、

衣こそ二重もよき、眞夜床そ、竝べむ君は、かしこき心かも。

と。かしこきは空恐ろしいの意味である。天皇更に歌ひたまはく、

朝妻の、比介の小坂を、片泣きに、道行く者も、たぐひてぞよき。

比介の小坂

比介の小坂は、皇后の本郷、葛城の長江に行き通ふ城路である。嶮しい山路を一人片泣きに泣きつゝ越えんよりは、道連れのあつた方がよいではないかとの御意である。

皇后熊野に避幸

磐之姫は之れをも聽き入れ給はず、天皇も強ゐてとは云ひかねてそのまゝに止むだ。紀元千二年（即位三十年）九月、皇后磐之姫は紀伊の熊野岬に遊幸あり御綱葉を摘給ふ。皇后の嫉妬に阻められ切なる心を忍び給ひし天皇は、折こそよけれと八田皇女を宮中に納れて滿腔の愛をそゝぎ給ふ。

皇后大和に向ひ給ふ

皇后は還御の途次、難波に至つて此由を聞き憤怒に堪へず、齎し給ひし御綱葉を悉く海に投入れて口惜し涙にくれ給ふ。葉濟といふ名稱がこれから起つた。

天皇は磐之姫の御恨みはげしき由を知らず、素知らぬ御顏にて大津に出で迎へ給へば皇后は宮に還り給はず、御船を山背に廻して大和に向ひ給ふ。却々に酷しい御仕打である。

寛仁大度の天皇は之をしも憤り給はず。翌日舍人鳥山を遣はして皇后を召し還さし

山背の筒城宮

め給ひしかども、皇后は耳にも入れ給はず、更に山背にかへり、宮を筒城岡の南に造つて御座あり、ひたすらに天皇の多情を恨み奉つた。

仁德天皇が異母妹に深き思ひを寄せ給ふといふのも神代其まゝの戀である。磐之姫が飽くまでも自己を持して夫の告諭に從はなかつたといふのも神代其ままである。

此事件は更に續いて情味深き局面を開く。

（三四）鷦鷯と隼

口持臣山背に至る

其年の十月である。仁德天皇は的臣の祖、口持臣を山背の宮に遣して、皇后を召しかへさうとせられたが、皇后の御忿りは尙ほ解けなかつたものと見えて默したまゝ一言の御答へもない。

折からの雪空に、口持臣は一夜を階の前に立ち盡した。臣の妹、國依姫といふのがちやうど皇后に奉仕して、筒城の宮に居たが、現在自分の兄が雪の降る夜を、階の前に立ちあかしたみじめさを見て、

國依姫の悲歎

山城の筒城宮にもの申す
わがせこ見れば涙ぐましも

と。一首の歌をよむでよゝとばかりに泣き伏した。

國依姫の泣く聲が皇后の御耳に達したので、流石の磐之姫も少しく心を和げた。皇后は國依姫を召して帝が八田皇女を納れ給ふ上は何うあつても、難波の宮へは歸られぬといふことを傳へ奉れとある。

口持臣の復命

口持臣は兎にも角にも皇后の御答を承つたので難波にかへる事が出來た。

皇后の御權勢

夫なる帝が、一人の美女を宮中に納れむとするを諾ひ給はず、侍女と共に難波の高津宮を去つて山背の宮に退隱し給ひし皇后、更に帝の畏き御使を受けて一言の御答にも及ばず、雪の降る夜を階の前に立ち明さしめ給ひし皇后、古代の日本婦人は其夫に對して斯くの如く個人の權利を主張して憚らなかつたのである。

而も寬仁弘裕なる仁德天皇は之をしも憤り給はず、十一月には御身みづから船に召

して山城に御幸あり、筒城宮に入つて皇后を諭し給ひしが、皇后は未だ頑として帝の召に應じない。

天皇山背に御幸

『陛下既に八田皇女を妃として迎へ給へり。皇女に副ひて后たるは妾の忍びざる所なり』

と、劔もほろゝの御挨拶であつた。其處で天皇もせんすべなく、徒にして難波宮へ還御となつた。

八田皇女立后

紀元千七年(即位三十五年)六月といふに皇后磐之姫は、山背筒城宮に薨じ帝はかねての御意によつて、異母妹、八田皇女を納れて皇后に立て給ふ、之が紀元千十年の事である。

雌鳥皇女

然るに紀元千十二年に至つて又々此の聖帝を惱まし奉る美人の問題が現はれた。美人は名を雌鳥皇女といひ、八田皇女の同母妹である。

天皇は御弟、隼別皇子を媒に立て給ひしが、雌鳥、隼別皇子に向つて申すやう、

『天皇先に皇后磐之姫の嫉妬を憚りて八田皇女を納るゝ事能はず、故に妾また天皇に事へ奉ることを欲せず』

隼別皇子雌鳥皇女と通ず

と、固く辭して諾ひ奉らなかつたが、之には別に深い譯があつたといふのは、媒に立つた隼別皇子といふのが却々の美男であつたものと見えて雌鳥皇女、ぞつこん此皇子に參つてしまつた。そうして女の方から云ひ寄つてトウトウ媒人の皇子と深い關係までも結んでしまつた。

隼別の横暴

思はぬ戀に陷つた隼別皇子は其の後雌鳥の家に居つゞけして、更に復命をしない。天皇は待てども、暮せども雌鳥の返事がないので、いとゞ思ひは增すばかり、戀しさに堪へかねて雌鳥の室に忍び行き給へば、雌鳥の侍女は歌をよむで天皇を諷し奉つた。天皇は其歌によつてはじめて雌鳥と皇子との仲を知り給ひ、心ひそかに皇子の不義を惡み給ふに至つた。

天皇の寛厚

けれども天皇はもとより至仁至愛の御生れ、殊には皇后の御手前もあり、其儘にして釋し給ふに、隼別皇子は我意いよいよ募りて白日を憚らず。雌鳥の膝に枕して寢ながらに申すやう、

『鵠鶴と隼と孰れが捷き』

皇女、眼に笑を含み口に媚をたゝへて、答ふ。まことに見るに堪へざる嬌態である。

嬌態見るに忍びず

『隼ぞ捷き』

『よし、それぞ我の先んずる所以なり』

と。鵠鶴は大鵠鶴命、卽ち仁德天皇を意味し、隼は隼別自らを意味するのである。如何に弘量大度の仁德天皇と雖、之を聞いては默して止む譯に行かない。大に皇子の無禮を憤り給ふ矢先、隼別皇子の舍人どもが怪しからむ歌を歌ひ出した。

皇子叛逆の意あり

隼は、天に登り、とびかけり、いつきがうへの、さゝぎとらさね

隼別の一味は我意暴慢の極、遂に叛逆の氣勢を示すに至つたのである。

『朕私怨を以て親を滅すを欲せず、然れども彼反つて社稷を危くせんと欲するか』

と。寔に尤もの御憤りである。至仁至德の大鵠鶴天皇も玆に愈皇子誅戮の御志を決するに至つたのである。

天皇逆鱗

皇子出奔

（三五）虛榮の寶玉

隼別皇子は仁德天皇の御憤り絕頂に達したりと聞きて、雌鳥皇女を連れて伊勢の大神宮に出奔した。

其處で天皇は吉備品遲部雄鯽、播磨佐伯直阿俄能胡を召してのたまはく、

『彼等を追ひ、逮ばん所に卽いて殺せ』

と。皇后（八田皇女）傍より奏すらく、『雌鳥皇女寔に重罪に當れり。然れども其殺さん日皇女の身を露さんことを欲せず』

皇后の御仁心

と。之は女の同情といふものである。もとより仁慈の帝、直に諾ひ給ひて、雄鯽等にのたまはく、

『皇女の佩べる足玉、手玉を取ることなかれ』

と。雄鯽等は二人を追ふて伊勢の蔣代野に及び、皇女を捉へて之を殺した。殺すに當つて彼等は慾心が起つた。彼等はかしこき勅命を忘れて皇女の肌を探つた。爾うし

雄鯽等追擊

雄鯽皇女の肌を探る

て裳の中から、寶の玉を奪ひ素知らぬ顔して復命に及んだ。美しき皇女の屍は廬梓河のほとりに埋められた。

皇后、雄鯽等の復命をきゝて問はしめたまはく、

『皇女の玉を見たりや』

雄鯽等は即座に、『見ざるなり』と對へ奉つた。雄鯽等の罪惡は其まゝにして暗中に葬られた。

新嘗の宴會

然るに其年の新嘗の宴會に偶然事が發覺した。此日は内外の命婦等が宮中に召されて祝宴を給はつた。こゝに近江の山君稚守山の妻と、采女、磐坂媛とが手に、珍らしい玉を纏ふて居た。

不思議の手玉足玉

皇后は早くもそれと察し、心をつけて見給ふに、見れば見る程それが雌鳥皇女の玉に似て居る。

其處で皇后は有司に命じて二女の其玉を得し所由を問ひ給ふ。二女は有司の訊問に對してひたすら恥ぢ入るのみ。遂にそれが佐伯直阿俄能胡の妻の所有品であるといふ事を答へた。虚榮に憧るゝ婦人が夜會に出席するにダイヤモンドの首飾のないのを恥ぢて、友人の妻からそれを借り受けて、さも得意氣に見せびらかして居たが、何時の間にか夫を紛失させてしまつた。夫婦は青くなつて騒いだが、出て來ない。百計盡きて惡心を起し僞物を整へて返しに行くと、何ぞ知らん其首飾はいつの間にかもとの持主の手に戻つて居たといふ佛蘭西の短篇小説を讀んだことがある。

佛蘭西の短篇小説

稚守山の妻と磐坂姫

妻の虚榮心を滿足させ度い爲に、夫が心にもない罪を犯すといふ結構は今も昔も同じことであつたものと見える。近江の稚守山の妻と磐坂姫とが、爾ういふ卑しろめたい品とは知らず。新嘗の宴會に、身の榮華を衒ひたい一心から、借りものをつけて出席したといふのは如何にも面白い話である。

阿俄能胡罪に伏す

さてこそ阿俄能胡は怪しいといふので直に捕縛された。段々の推掬に包みきれずして、阿俄能胡も遂に罪に服した。『曩の日、皇女の裳を探りて得たるものに相違なし』といふので阿俄能胡はいよいよ死罪と決定した。

處が此頃は土地を納めて罪を贖ふ事が出來た。阿俄能胡は自己の私有地を獻じて纔

土地を以て罪を贖ふ

に死を免るゝことを得た。依つて其地を名づけて玉代といふたとある。

『高き屋にのぼりて見れば煙たつ、民のかまどは賑ひにけり』といふ歌によつて其仁政を千載の後に謳はれ給ふ仁德天皇の御生涯にも人情の風波は常に絶えなかつたのである。

後宮の紊亂

然り、而して此後宮の治まらなかつた事は延いて天皇崩御の後、住吉仲皇子の叛亂となつて現るゝに至つた。仁德天皇は紀元千五十九年、在位八十七年にして崩じ給ひ、皇太子去來穗別尊立つて御位に卽き給ふ。履仲天皇と申し奉るのがこの帝である。

黑姬

初め帝崩御の後、去來穗別尊は難波宮にましまし、武內宿禰の男、羽田の矢代宿禰の女、黑姬を納れて妃となさんとし、同母弟、住吉仲皇子を使として吉日を告げしめ給ふ。住吉仲皇子は隼別皇子に倣つて、皇太子の名を冒し黑姬を私してしまつた。當節でいふと結納の使に立つたものが、花嫁を横取りして仕舞ふのであるから隨分酷い話である。此花嫁の爭奪から仲皇子は兵を擧げて皇太子を石上振神宮に逐ひ難波宮を占領して天下の大亂を惹き起した。

（三六）女の爲に天下の大亂

仲皇子の叛亂

皇太子の名を冒して黑姬を私した仲皇子は、罪の其身に及ばんことを恐れて急に兵をあげた。

皇太子醉ふて知らず

此時皇太子去來穗別尊は、難波宮に在つて酒宴の最中であつたが、近臣の急を告ぐるものがあつても醉態淋漓として更に耳に入れない。其處で侍者は無理に皇太子を馬に乘せて宮をのがれ出た。

此時遲し、仲皇子の軍は急にせまつて宮に火をかけた。炎々たる焰は終夜天を焦して、さしも宏壯を極めたる殿堂も一夜にして盡く灰燼に歸した。皇太子の逃れ去つたことを知らなつた、仲皇子は、其既に遠く走つた事を聞き、切齒して口惜しがつたが遲かつた。

難波宮燒かる

危ふく宮を遁れた皇太子は、河內國埴生坂（丹南郡）に至つて漸くに醒め、遙に天を焦す難波の火光を見て大に驚いた。其處で急に馳せて大阪より大和に向ひ、飛鳥山に

飛鳥山の乙女

至つて一人の乙女に遇ひ、『此山に人ありや』と問ひ給ふ。

少女對へて、『兵を執れるもの多く山中に滿ちみちたり。宜しく轉じて當摩路より踰え給ふ可し』と申す。皇太子歌を作りて宣給はく、

おほさかに遇ふや乙女を道問へば、
たゞにはのらず、當摩路をのる

と。乃ち道を轉じて當縣の兵を驅り集め、龍田山（大和平群郡）より踰え給ふ。折しも後の方より數十人兵を執つて追かけ來るものがある、皇太子望見して味方を山中に伏せ息を凝らして待ちうける處へ追手はあはたゞしく駈けつけた。其處で尊が人をして問はしめ給ふに、阿曇連濱子なるものが、淡路の野島の海人を驅り催して仲皇子の爲に皇太子を追ふとあつた。

龍田山の戰

此時、皇太子の軍は急に起つて野島の海人を中に取り圍み、一人殘らず生捕にして仕舞つた。

吾子籠また叛く

又大和國に吾子籠なるものがあつて仲皇子に通じ、密に兵を攪食栗林にあつめ、皇太子の軍を詐つて誘き寄せようとした。皇太子は早くもそれと察し、却つて、吾子籠を殺さうとしたので、吾子籠も尊の軍容に恐れをなし、自分の妹を皇太子に納れて罪を赦されんことを乞ふに至つた。

日之姫

其處で皇太子は吾子籠の妹、日之姫を納れて石上振神宮に居を定め給ふ。贖罪の爲に美しき女を献じた當時の風習を察すべきである。

瑞齒別皇子來る

其處へ去來穗別尊の弟瑞齒別皇子といふのが跡を追ふて來たが、皇太子は其貳心あるを疑ふて更に取りあはない。皇子人をして申さしめ給はく、

『僕、貳心なし、故に來れるのみ』と。

尊『汝、果して貳心なくば難波に歸りて仲皇子を誅せよ。然る後に乃ち見えん』と。

皇子『皇太子、何ぞ憂へ給ふことの甚だしき、今、仲皇子無道にして、群臣百姓皆怨み、其門下の人亦皆叛けり、仲皇子誰と共にか謀議せん、僕の討たざりしは、いまだ皇太子の命を受けざればなり。いま既に命を受けぬ。仲皇子を誅せんこと難からず。唯恐る、仲皇子の死後、猶、僕を疑ひ給はんことを、願はくば、忠直の士を得て俱に

瑞齒別皇子難波に向ふ

行かん』

其處で天皇は、一人の近臣を副へて從はしめ給へば、瑞齒別皇子は『皇太子と仲皇子とは共にわが兄なり。誰にか從ひ誰にか乖かん、然れども有道に就きて無道を討つ、それ誰か我を疑はん』と。意を決して難波に赴き給ふ。

仲皇子誅に伏す

かくて皇子は難波に至り、ひそかに仲皇子を窮ふに、仲皇子は皇太子のよくなすなきを信じて何等の備へも設けない。瑞齒別皇子はやがて仲皇子の近習隼人刺領布を召して機密を授け、錦の衣褌を脱ぎて與へ給へば、刺領布奮起して其事に任じ、遂に仲皇子を厠の中に刺し殺して仕舞つた。

履中天皇卽位

刺領布は『我に大功ありと雖、彼に在りては逆賊なり。奈何ぞ之を活さん』といふので褒美の代りに首を刎ねられてしまつた。この日、阿曇連濱子が捕へられて、一件の首魁が盡く罪に伏した。

紀元千六十年皇太子去來穗別尊、磐余の稚櫻宮に卽位し給ふ。履中天皇と申し奉るのが此帝の事である。次はいよいよ日本の代表的美人として知らるゝ衣通姫の物語である。

雄朝嬬稚子宿彌皇子の謀議

寡人敢て當らず

（三七）清婉衣通姫

十八代の帝反正天皇が崩御し給ひし時は未だ繼嗣が定まつて居なかつた。其處で群臣が相議して雄朝嬬稚子宿彌皇子を立てる事に一決し、吉日を選むで天皇の璽を奉つた。處が反正天皇の皇子には稚朝嬬雄子宿彌皇子の外に、大草香皇子といふのがあつた。さればにや皇子は固く辭してそれを受け給はず。

『予不幸にして久しく篤疾に嬰り行歩すること能はず。且つ予初め病を除かんと欲し、請はずして膚を裂きて之を療せしに、猶ほ癒ゆる事なし。先皇責めてのたまはく「汝疾患なりと雖も、縱に身を毀つけたり。不孝之より甚しきはなし。たとへ長生するとも業を繼ぐことを得じ」と。兄の二天皇も亦予を愚なりとして輕んじ給へること、卿等が共に知れる所なり、それ天下は大器なり。帝位は鴻業なり、且民

の父母はこれ卽ち聖賢の職、豈に下愚の任ならむや。更に賢主を選びて立つ可し。寡人敢て當らず』

とのたまふた。其處で群臣は再拜して申すやう、

群臣拜請

『帝位は久しく曠しくすべからず。天命は謙拒すべからず。今時を留め衆に逆ひて位號を正し給はずば臣等恐るらくは百姓の望み絶えん。願はくば大王、天皇の位に卽き給へ』

天下萬民の意

と。皇子は猶辭してのたまはく、

『宗廟社稷を奉ずるは重事なり。篤疾の人、以て稱ふべからず』

と。群臣は押して請ひ奉る、曰く、

『是れ天下萬民の意なり』

と。而も皇子は猶聽きいれなかつた。時は紀元千七十一年の冬である。皇子の妃に忍坂の大中姫命と申すのがあつて、群臣の憂懼を察し、洗手水を執り持ちながら皇子の前に進んで請ひ給ふやう、

忍坂の大中姫

『大王辭して位に卽き給はず。既に年月を經たり。群臣百寮憂へて爲す所を知らず。願はくば大王衆望に從ひて帝位に卽き給へ』

と。皇子は猶も依然として耳を傾けなかつた、時はちやうど十二月の事であるから寒威殊の外甚だしく、水の溢れるのが腕にかゝつて姫は今にも凍え死なうとした。而も此處ぞ大切、天下の爲と決心し給ひし姫命は洗手水を持つたまゝ放さない。皇子は顧みて大に驚き、扶け起してのたまはく、

洗手水を持して放たず

『嗣位は重事なり輙く就くことを得ず、是を以て今に從はず。然るに群臣の請ふこと。事理灼然たり。何ぞ敢て辭せんや』

と。姫は夢かとばかり歡むで暫くはヂッと皇子の御顏に見入つた。氷の樣に堅くむすぼれた皇子の心も春の日のやうな女性のやさしい心にほだされて、今は名殘なく解け果てたのである。群臣も大に喜んで卽日天皇の璽符を捧げ、再拜して御位に卽け奉た。允恭天皇と申し奉るのが此帝である。

允恭天皇卽位

天皇は大和の遠飛鳥宮に居まし。忍坂の大中姫を立てゝ皇后となし、其爲に、刑部

刑部の制定

（忍坂部）を定め給ふ。伊勢國三重郡、遠江國引佐郡、備中國賀夜郡、英賀郡等に今も尙ほ刑部といふ村の名が殘つて居る、遠江の刑部は後に武田信玄が屯して濱松城を脅威した處で、歷史上、戰略上有名な土地である。これが千七十三年二月の事であつた。

衣通姫

この大中姫の妹に衣通姫といふ絕世の美人があつた。『艶色衣を徹して晃る』とあるから色のクッキリと白い、パッとした。明るい顏のお孃さんであつたに相違ない。恐ろしく人の心を嗾つたものと見えて世の人が呼んで衣通姫といふたとある。天皇も其評判を聞しめして、心に深く弟姫を覺召して居られたものらしい。

新室の宴

紀元千七十八年十二月、新室の宴に群卿を召して酒を賜はりし時、親ら琴を撫し皇后をして立ちて舞はしめ給ふ。此頃の風俗として宴會に立つて舞ふた者は、舞ひ終つた時自ら坐長に對して『娘子を奉らむ』といふのが禮となつて居た。而も皇后は天皇の御意を察して居たものと見え、默して其禮を缺いた。

其處で天皇は何故に常禮を缺くぞと責め給へば、大中姫も止むを得ず、再び立つて舞ひ給ふ。御心の苦しさ正に察し奉るべきである。

皇后天皇に娘子を薦む

天皇弟姫を召し給ふ

（三八）藤原の宮

舞ひ終つた皇后は、心ならずも天皇にむかつて、型の如く、

『娘子を奉らむ。』

と奏上した。其處で天皇は之も型の如く、

『奉らんとする娘子は何ものぞ、姓字を知らんと欲す』

と宣給ふ。皇后は已むことを得ず、

『妾の妹、名は弟姫、容姿絕妙にして竝ぶものなく、艶色衣を徹して晃る。故に時人呼んで衣通郎姫と申す』

と奏す。天皇は大に喜び人を近江の坂田に遣して弟姫を召し給ふといへども弟姫は皇后の御思はくを憚つて參內しない。七度召し給ふに、なほ固く辭して參らなかつた

烏賊津の頓智

と云のであるから皇后の權勢の如何に强大であつたかを察すべきである。

其處で天皇は、舍人中臣烏賊津に命じて姫を召さしめ給ふ。烏賊津は、豫め糒を褶の中にかくして坂田に姫を訪ひ、庭前に伏して勅命を傳へた。弟姫は案の如く依然として勅命を奉じなかつた。

弟姫辭退

『妾もとより勅命を畏れざるにあらず唯、皇后の志を傷ふことを欲せざるが故に身亡ぶと雖も、敢て參らざるなり』

烏賊津去らず

かねて期したる事とて、烏賊津は姫に向つて申すやう、

『臣天皇の嚴命を奉じて來る。若し姫を將ゐずして歸りなば、極刑を被らむこと眼のあたりなり。寧ろ庭前に伏して死なんには如かず』

と、庭前に伏して食せざること七日七夜に及んだ。が、それは表面をつくらふたまでゝ實は密に褶の中から糒を出してたべて居たのである。當節は辨當持で貸金の居催促をする高利貸はあつても食パン携帶で美人の御機嫌伺ひに出懸けようといふ男は居ない。月給百圓といふ聲がかゝれば、お孃さんの方から持參金位は御持參でやつて來る。世の中も變れば變るものだ。

辨當持の居催促

辨當持の居催促とは知らず、烏賊津が食はず、飲まずで庭前に坐り込んだのを見た弟姫はひどく當惑して仕舞つた。やがて流石の弟姫も我を折つて宮に參る事を諾ひ奉つた。

藤原宮

天皇は歡喜措く所を知らずといふ御有樣であつたが、さて皇后の不平を憚つて衣通姫を宮中に納れず、別に宮殿を藤原に構へて其處に置いた。これが紀元千七十七年のことである。

皇后御分娩の夕

此時、皇后大中姫は、既に懷胎の御身であつたが、其大泊瀨命を生み給ふ夕、天皇は適々藤原の宮に御幸あり。皇后の御怨みは正に其絶頂に達した。

『甚しいかな天皇や、妾、今死生相半するに當り何ぞ故に今夕藤原に幸し給ふか』

といふのであるから、大さうな御權幕であつたに相違ない。赫然と逆上して今にも產殿に火をかけようといふ御氣色であつたのを近侍のものが支へ、天皇が驚いて還御になつたので其場は一と先づ無事に納まつた。

皇后の嫉妬漸く甚し

すべて男の方からいへば、此場合であるからといふ口實もあらうが、女として見れば、ヤハリ其場合が此場合である。

これから皇后の嫉妬が目に立つてはげしくなつた。

衣通姫は、始めて相あふ夜のうれしい夢を破られてからといふものは、一しほ怖氣づいてしまつて、更に皇后に遠ざかり奉らんことを帝に向つて哀願する。帝も姫の志をあはれに思召し、今度は茅渟に離宮をしつらへて其處に姫をかくまひたまふ。

茅渟の離宮

當時の美人といふのであるから、肉付のよい、丈の高い、立派な體格であつたに相違ない。其上光艶を衣を徹すといふのであるから、色も透き通るやうに白かつたものと見てよろしい。姉なる大中姫は、嚴冬に凍え死なうとするまで帝を諫めたことゝいひ、產殿に火をつけて自殺されようとした事といひ、激しい氣性の女であつたのに引かへて、之はまた、優しい內氣な、羞み勝ちの女であつたに相違ない。されば帝としては、皇后の嫉妬がつのるにつけて、いよ〳〵益々弟姫がいとしかつたものと見える

藤原部の制定

紀元千八十二年には大伴室屋連に命じ、衣通姫の爲に諸國の國造に課して藤原部を定め給ふとある。其寵幸推して知るべきである。

黃昏微幸

（三九）さゝがにの絲

蜘蛛のふるまひ

これより先、衣通姫がまだ藤原宮にゐました頃の事である。帝はひそかに姫の消息をうかゝはうといふので、忍んで藤原に幸されたことがある。

それはちやうど黃昏であつた。

姫はひとり、寂しさうに宮の柱にもたれて、恍惚と小さき蜘蛛のふるまひに見入つて居る。憧憬の情に堪へぬやうな美しい眼の光は正に小さき蜘蛛の上にあつたけれども、心は遠く空をかけつて其戀しき人の上にある。

噫、美しき遺骸よ。

やがて其かたく結ばれた紅の唇はかすかに動いた。

わがせこが來べき宵なりさゝがにの

くものおこなひ今宵しるしも

外に佇むで此有樣に見とれ給ひし允恭天皇は、身うちの血しほの凝るばかりに感じ給ひ、

さくらがた錦の紐を解きさけて
あまたは寢ずと唯ひとよのみ

と御詠あり。はじめて姫の中心己れを慕ふこゝろの切なるを知り給ふたといふ。

天皇激感

さて、姫が藤原の宮を去つて、茅渟の離宮にかくれ給ひし後は、帝の日根野御幸が急にしげくなつた。勿論それは遊獵といふ御催しであつたが、遊獵はさて置いて茅渟への御幸は決して缺かし給ふ事はなかつた。

日根野の御獵

皇后大中姫奏し給はく、

『妾、敢て弟姫を妬むにあらずといへども陛下屢茅渟に幸し給ふ。これ百姓の苦しみなり。願はくば車駕の數を除き給へ』

と。三度の處は二度、五度の處は四度などいふ語は既に此頃からあつたものと見え

皇后諫止

る。それから茅渟の御幸も少しく遠のいたといふ。紀州和歌の浦の玉津島明神は此姫を祀つたものであつて、世に和歌の神として崇められて居る。

玉津島明神

紀元千九十五年、帝の卽位二十四年といふに木梨輕皇子と、其同母妹、輕大娘女とが親々相姦の罪を犯して、輕大娘女が伊豫に流されたことは、第十八項『新道德の萌芽未だし』の中に述べたからこゝには省略する。

大逆事件起る

仁德天皇、履中天皇（去來穗別尊）允恭天皇、木梨輕皇子と引續いて來た後宮の亂れは、安康天皇の御時に至つて光榮ある帝國の歷史に一大汚點を印すべき大逆事件をうみ出した。

木梨輕皇子は一旦皇太子に立てられたけれども其美貌が仇となつて物部大前宿禰の邸に自殺し給ふに至り、紀元千五百十三年といふに穴穗皇子が立てられて御位に卽かせられた。之を安康天皇と申し奉る。

安康天皇卽位

安康天皇は忍坂の大中姫の第二皇子、木梨輕皇子の御弟である。先帝がはじめて衣通姫の處へ幸された時に產れたといふ大泊瀨皇子は天皇の御弟である。

安康天皇は即位のはじめ、御弟大泊瀬皇子の爲に、仁德天皇の皇子、大草香の妹、幡梭皇女を配せんとし、根使主を使として遣はされた。大草香皇子は喜んで此縁談を諾ひ美麗なる押木珠縵を信契として答へ奉つた。處が使に立つた根使主が押木珠縵に眼をつけて、大草香皇子を讒した。曰く、

幡梭皇女

根使主の奸惡

『大草香皇子命を奉せず。傲然として「彼豈わが妹を娶ることを得んや」と申しはべりぬ』

大草香皇子罪なくして誅せらる

と。其處で安康天皇は烈火の如く憤り給ひ大泊瀬皇子と力をあはせて兵を擧げ、急に大草香皇子の邸を圍むで、罪なき皇子を殺め給ふ。皇子は御兄弟の叔父である。大草香皇子の臣、難波日香蚊父子が主の罪なくして討たれ給へるを傷み、屍を抱いて歎きかなしみ、果ては其傍に自刎して死んだ、並み居る軍衆、これを見て皆感涙に咽ばざるはなかつたといふ。

斯くて戰の後、大泊瀬皇子が、大草香皇子の弟、幡梭皇女を納れて妃とせられたのは未だよかつたとしても、天皇が大御身自ら、今、眼の前で殺めた大草香皇子の妃、

淺猿しき事ども

中蒂姫を立て丶皇后とされたのは、淺猿しと申すも、淺猿しき次第であつた。眉輪王の大逆は何といふても之が原因であつた。

（四〇）眉輪王の大逆

中蒂姫

安康天皇が現在仇敵の妻、中蒂姫を納れて皇后とされたことは、當時の社會狀態からいふて寧ろ當然の事であつた。人類社會には、曾て勝利者が、敵の妻子を奪ひ、若しくは其姉妹を納れて拏とする事が、當り前、否、寧ろ名譽の事として承認された時代もあつたのである。

警戒宜しきを失す

私は、今日の道德を以て、全然社會狀態を異にした當時の出來事を律するの愚を敢てするものではない。唯、帝が、警戒其よろしきを失ひ給ひし結果、在位三年にして空しく逆徒の毒刃に斃れ給ふに至つた不慮の御災禍をいたみ奉るものである。

さて大草香皇子と中蒂姫との間には眉輪王といふ一人の子があつたが、安康天皇は

中蒂姫を立て丶皇后とすると同時に其子もまた引とつて宮中に養はれた。これが畏れ多くも天皇を仇と付け覘つて遂に大逆を行ふに至つたのである。

山宮御幸

天皇が中蒂姫を寵し給ふことは非常なものであつた。紀元千百十六年には帝、山宮に幸して樓上に宴飲し給ひし時、醉ふて皇后の膝を枕にのたまふやう。

『朕かく汝に親昵すと雖も、唯眉輪を恐る。彼他日朕がその父を殺し丶ことを知らば必ず朕を仇とせむ』

眉輪王の復讐

と。此時眉輪王は年漸く七歳、何心なく樓下に嬉戯して居たがこれをきいて急に復讐の志を決し、密に樓に上つて天皇を窺ひ奉る。

天皇は此時十二分に醉ひしれて、皇后の膝を枕に前後も知らず熟醉し給ひしを、ッカ〳〵と進み寄り一氣に刺して弑し奉つた。

大泊瀬皇子に事の由を知らせ奉る。

大舍人は驚き馳せて大泊瀬皇子に事の由を知らせ奉る。

大泊瀬皇子もスワこそ天下の變と急に兵衆を驅り催して、先づ御兄、八釣白彦皇子に迫り、其所以を糺し給ひしが、皇子の答なきを見て宣給はく、

大泊瀬皇子起つ

『天皇の害に遭ひ給へるを聞きて驚き悲しまざるものあらんや』

大泊瀬皇子兄を殺す

と卽座に刀を拔いて皇子を斬つた。何故に兄の皇子を殺め奉たかは歷史の秘密で知る由もない大泊瀬皇子には八釣白彦皇子を斬ると其足で直に、又兄の坂合黑彦皇子の家に到り、同じく其所以を問ひ給ふ。黑彦皇子もまた之に答へなかつたので、大泊瀬皇子は愈其憤りを增し、直に眉輪王に迫つて其所由を問ひ糺し給ふ。眉輪王申すやう。

葛城圓大臣

『臣もとより天位を求めんとにあらず。唯父の仇を報じたるのみ』

と黑彦皇子と相率て葛城圓大臣の家に走つた。黑彦皇子は八釣白彦皇子と同樣に疑ひを受けんことを恐れたからである。其處で大泊瀬皇子は使を派して圓に二人の引渡しを迫つたけれども、圓は頑として諾ひ奉らなかつた。

圓命を奉ぜず

『それ事あるの日に於いて人臣の逃れて王室に入りしは臣の曾て聞き及ぶ所なり。君王が臣の舍に匿れ給ひしは未だ聞かざる所なり。今二王、臣を恃みて來り投じ給へり。何ぞ送り奉るに忍びんや』

と。其處で大泊瀬皇子は兵を發して圓の第を包圍し茲に一場の阿修羅道は現出せられた。激戰の後、圓は門を出でて大泊瀬皇子に會し、跪拜して申すやう、

『匹夫も其志を奪ふ可からずと、臣唯死あらむのみ、命を奉ずること能はず。願はくは臣が女韓媛と、葛城の宅七區とを獻じて臣が罪を贖はむ』

と。皇子許し給はず。火を圓の家に縱ちてひた攻めに攻め戰ひ給へば、黑彥皇子、眉輪王、圓ともに火中に焚死して一件盡く落著した。

韓媛

雄略天皇卽位

（四一）日本のハムレット

紀元千百十六年十一月十三日大泊瀬皇子卽位あり、之を雄略天皇と申し奉る。皇后には前に大變のもとゝなつた、幡梭皇女が立てられた。

根使主は珠縵を奪つて大草香皇子を天皇に讒し。天下大亂の基を開いた奸賊である其爲には幾多忠良の臣子が名なき戰に尊い血を流して居る。而も惡逆無道の根使主は巧に其罪跡を蔽ふて雄略天皇の十四年まで、世にときめいて居たのである。

けれども天網恢々疎にして洩らさずといふ通り此奸賊は偶然にも皇后の爲に其惡事を看破され紀元千百三十年といふに全く誅に伏したのである。紀元千百三十年は。天皇の卽位十四年である。此時吳人の來聘するものがあつて、天皇は根使主を接待役に命じ、舍人を以て具に饗宴の狀を視察せしめ給ふ。

舍人は歸つて、天皇に根使王のつけた珠縵の如何にも美しく見事なものであつたといふ事を奏上した。舍人があまりに讃め立てるので、然らば根使主を召せとのたまひ、吳人を饗應した時と同じ服飾にて參內を命じ給ふ。

根使主は大草香皇子が信契として安康天皇に奉らんとした押木珠縵を身につけて、さも得意氣に參內した。皇后、幡梭姫は、其珠縵を一目見るより且つ驚き且つ悲しみ身に犯せる罪もなきに理も非もなく、とりこめて斬り殺された兄の皇子の無念に想ひ到つては、身も世もあられず、その場に伏してよゝとばかり歔欷し給ふ。

雄略天皇はいとゞ不審の事に覺召して其故をたづね給へば、皇后は涙の下より今、

根使主に吳人の接待を命ぜらる

舍人の復命

幡梭姫の悲泣

根使主の惡事發覺

根使主のつけたる珠縵の緣由を語り給ふ。

『今根使主が著けたる珠縵こそ、曾て妾が兄の寶器たりしものなり。陛下もと妾を聘せんとし給ひし時、妾が兄悅び獻じて信契となせしものなり。今根使主之を著けたれば、疑を彼に致し覺えず涙下り侍りぬ』

根使主走る

と。天皇は玆にはじめて根使主の姦を悟り給ひ大に怒りて其罪をただし給へば根使主も今は包み得ず、逐一其罪狀を自白に及んだ。天皇詔したまはく、

『根使主、今より後、子々孫々に至るまで群臣の例に預かること莫れ』

と、之を斬罪に處せんとし給ひしに、根使主早くも逃れて日根(和泉國)に走り稻城を作つて拒ぎ戰つたけれども敵せずして官軍の手に殺されてしまつた。其處で天皇は有司に命じて根使主の子孫を二つに分ち、一部を大草香部の民として皇后に封じ、一部を茅渟縣主に賜ひて、負囊者(奴隸)とし、更に勅して大草香皇子の寃を雪ぎ、日香蚊の子孫を索めて其忠死を旌表し給ふ。

大草香皇子の寃を雪ぐ

さて此事件に關する歷史家の考證は頗る區々である、眉輪王が安康天皇を弑し奉つたのも七歲の小兒が獨力でやつた事とは思はれぬ、『古事記』には天皇の御寢を伺ひ、傍にあつた天皇の太刀を拔いて御頭を斬り奉つたとある。何うしても七歲の小兒がやつた事とは思はれない。『日本紀』には天皇が皇后の膝を枕にして醉臥し給へるを刺して弑し奉つたとある。之も皇后が同腹でなければ出來ぬことである。卽ち眉輪王の大逆は、皇后中蒂姬の使嗾に出でたものであるといふ說が起らざるを得ない。爾う考へて來ると此話は沙翁の『ハムレット』に酷似して居る。

大逆事件の眞相

皇后も同腹か

更に或る歷史家は、眉輪王を使嗾したのは皇后でなくして、寧ろ大泊瀨皇子であらうといふて居る。もと安康天皇は位を市邊押磐皇子に傳へんとの御心であつた。此時既に天下は我ものと覺されて居た大泊瀨皇子は勢ひ天皇を恨み奉らざるを得なかつた。されば、山宮の大逆が眉輪王の手によつてなされた事を知りつゝも先づ眉輪王を誅せんとせず、諸兄を殺したるが如き、後の自立を計つての御處置である。黑彥皇子が眉輪王共に圓の家に走つたことゝいひ、雄略天皇が御卽位早々押磐皇子を殺したことゝいひ、眉輪王の使嗾者は大泊瀨皇子らしいといふのが一部の歷史家の見る所であ

大泊瀨皇子の行動に就いて

る。

何づれにしても上古史の重なる出來事は十中の八九まで婦人が其原因を作つて居る上古史を讀むものは此點に十分の注意を拂ふ必要がある。

（四二）女房自慢から

経濟的貨物としての婦人

既に述べた通り、大和國の吾子籠なるものは、自分の妹を去來穗別皇子（安康）に奉つて、敵對の罪を贖ふた。又葛城の圓大臣は葛城の宅七區と其女韓姫とを大泊瀬皇子（雄略）に奉つて、同じく敵對の罪を赦されんことを希ふた。斯くの如くにして、一方には婦人が、一種の物品として取扱はれる風習が起つて來た。換言すれば、婦人が經濟的貨物として取扱はれるやうになつて來たのである。即ち『購買結婚』の形式が始まつた。

私有財産としての婦人

父權が漸くにして強大に赴くに隨つて女子を以て、一種の私有財産の如く思惟する。

美貌は女の命

といふ傾向も生じて來た。婦人の尊ぶべきは其働きに非ずして、其容貌にあるといふやうな風潮も生じて來た。女房の美貌を誇るのは、女房を以て一種の私有財産と心得るからである。衆人稠座の中で、聞かれもしない女房の話を持ち出したり、人通りの多い市の街路を自慢らしく見せびらかして歩くといふアマリよろしくない風習は此頃からボツボツ始まつて來たのである。

吉備田狹

雄略天皇の御代に吉備上道臣田狹といふものが衆人稠座の中で、女房の自慢をした爲に大騷動が起つた。

當時の獨秀

時は紀元千百二十三年、雄略天皇の卽位七年であつた。吉備上道田狹といふものが殿側に侍して居る間、無聊にまかせて喋々と女房の自慢を述べ立てた。

『天下の麗人我婦に若くものなし。茂なり、綽なり、諸々の好備はれり。曄なり、溫なり、諸々の相足れり。鉛花御せず、蘭澤加ふることなし。曠世儔罕にして當時の獨秀なり』

といふのであるから手放しの大氣焰を吐いたものと見える。抑も雄略天皇と申し奉

るは恐ろしい勝氣の帝であつたから、此女房自慢を洩れ聞召して、『惡き田狹が廣言かな』といふので直に田狹を拜して任那國司となし。其不在に乘じ田狹の妻稚姫を納れて妃となし給ふ。

稚姫

田狹は任那に在つて、此由を傳へ聞き憤怒身を措くに所なく、遂に新羅によつて日本の朝廷に叛旗を飜へした。之より先、新羅は高麗と相提携して日本に背き雄略天皇

田狹の憤怒

卽位の年から朝貢を怠つて居た。其後新羅と高麗との間に隙を生じて兵を交へた事もあつたが、新羅は任那に於ける日本府の援助によつて、纔に其滅亡を免るゝ事を得た。然るに尙ほ新羅が朝貢を怠つたのは、其年から田狹と提携した爲であらう。

新羅征伐

其處で雄略天皇は田狹の子、弟君と吉備海部直赤尾とに命じ、『卿等宜しく往きて新羅を征すべし』と詔し給ふ。弟君は田狹と稚姫との間に生れた第二子である。其處で二將は兵を率ゐて、新羅の討伐に向つたが、弟君は百濟に至つて、大島に淹留し、躊躇して兵を進め得ない。百濟から貢した今來の才伎を大島の中に集め風に託して發せざること數ヶ月の長きに及んだ。

田狹弟君を誘ふ

田狹は此情勢を見て大に喜び、密に人を百濟に派し弟君を戒めていふやう、

『汝の首何の牢鋼なることありて人を伐つか。傳へ聞く天皇わが妻を幸して遂に兒息ありと。禍其身に及ばんこと足を蹈てて待つ可し。汝百濟に跨據し、日本に通ずること勿れ、吾任那を據有して亦日本に通ずること無からむ』

と、且つ脅かし、且つ誘ふた。田狹は弟君にとつて現在の父である。恁ういはれて見れば弟君も大に考へざるを得ない。況してや、彼に戰意の無い矢先である。弟君の心は大に動いた。

樟姫其夫を殺す

弟君の妻に樟姫といふものがあつて軍旅の中に在つたが、國家を憂へ、君臣の義を思ふのあまり。夫の謀叛を悲しむで竊に弟君を刺し殺したといふ。但し之は海部直赤尾と相談の上でやつたことに相違あるまい。かくして二人は百濟王の獻じたる手末の才伎を將ゐて大島に淹留したまゝ更に兵を動かさなかつた。

田狹が反して日本府に據つてからといふものは天皇の命令がまた日本府に行はれなかつた。新羅は其後も依然として朝貢しない。高麗も頗る不遜であつた。勝氣の天皇

三韓の統治雜

は在位の間四たび外征の師を動かされたけれども、其結果は思はしくなかつた。かくて百濟が高麗に合併せらるゝに及び、三韓の統治は益々困難に陷つて仕舞つた。

田狹の女房自慢が、恁んな大事件を惹き起した。

（四三）海柘榴市の歌垣

懷姫と稚姫

雄略天皇は葛城圓大臣を誅し其女韓姫を寵して白髮皇子（清寧）を生み給ひ又田狹の妻稚姫を納れて、磐城、星川の二皇子を生み給ふ。

星川皇子の謀叛

天皇崩御の後、韓姫と、稚姫との間に勢力爭ひがあつて、遂に星川皇子の謀叛となつた。之より先、天皇は白髮皇子がよく民を愛して衆望を收め給ふを異とし、紀元千百三十八年といふに立てゝ皇太子とされたのを稚姫が嫉むで星川皇子を使嗾した。星川皇子は母のすゝめに從ひ大藏の官を取つて皇太子に叛いたけれども、直に敗られて兄磐城皇子、母稚姫と共に大藏の邸に燔殺せられてしまつた。

母の使嗾

前に述べた手研耳命の叛亂といひ、膚坂、忍熊二皇子の擧兵といひ、眉輪王の大逆といひ、今また星川皇子の謀叛といひ何れも其母の使嗾に出でたといふ形跡が顯著である。女子は漸くにして男子の私有物と化して來た當時に於いても、其子に對する母の權力は依然として强かつたものと見える。

清寧天皇

清寧天皇（白髮皇子）は在位五年にして崩御となつたが、不幸にして其繼嗣がなかつた。之より先、天皇は偶然の事から雄略天皇の爲に蚊屋野に射殺されて果て給ひし市邊押磐皇子の遺子が隱れて播磨國に在す由を聞き喜び迎へて皇子となし給ふた。卽ち億計、弘計の二王である。天皇崩御の後、弟の弘計王が先づ位に卽いた。之を顯宗天皇と申し奉る。

武烈天皇の御幼時

顯宗天皇は在位三年にして崩御あり。紀元千五百四十八年に兄の億計王が立つて御位を繼いだ。仁賢天皇と申し奉るのが此帝である。仁賢天皇は紀元千百五十五年に皇子小泊瀨稚鷦鷯尊を皇太子となし給ふ。後に武烈天皇と申すのが此皇子である。さて此皇子に就て面白い一場の戀物語りがある。

平群眞鳥の横暴

大臣平群眞鳥は雄略、清寧、顯宗、仁賢の四朝に歴仕して國政に參與し、權勢漸くにして王威を凌ぐに至つた。殊に仁賢天皇崩御の後は專横度なく皇太子の爲めに宮殿を營むと稱して、宏壯なる邸宅を構へ、自ら之に居つて、暗に日本の帝王を以て擬した。

影姫

鮪と影姫

茲に皇太子、稚鰒鴟尊は物部麁鹿火連の女、影姫の美しき姿に思ひを焦し給ひ。人を遣して影姫に其旨を傳へ給ふ。處が此影姫には之より先に鮪といふ男があつて互に、深い契りを結んで居た。鮪は平群大臣の長男であつた。父の權威を笠に若い女達の間を押し廻して歩いた貴公子に違ひない。政府筋に何の某と名のある人の若殿が新橋邊の待合で優待されるのと同じことであつたらう。

皇太子からの思はぬ使に影姫はハタと困じ果てた。いつそ打明けてとも思つたが、何がさてかしこき仰せをむげにしりぞけ參らせむも如何と思ひかへして、

『妾望むらくは、海柘榴市の巷にて待ち奉らむ』

と。海柘榴市は今の大和國城上郡に屬して居る。此色よき返事に接した皇太子は雀躍して喜んだ。

眞鳥に官馬を貸さず

歌垣の事

歌垣と自由結婚

其處で皇太子は近侍の舍人を平群大臣の家に遣はして官馬を求め給ひしも、眞鳥は輕く諾つたまゝ容易に馬を進めない。皇太子は大に眞鳥の專横を憤つたけれども、さて姫と媾曳の約束もあるので、其儘忍んで海柘榴市に道を急ぎ給ふ。

海柘榴市には其日歌垣が催されて、若い男女の笑ひさゞめく聲が、巷に滿ち溢れて居た。

歌垣といふのはちやうど近頃の盆踊りのやうなもので、當時春秋の候を選むで盛んに行はれたものである。都にありては市上に鄙に在りては野山に、若い男女が寄り集まつて、互に歌を唱ひ、舞ひ戯れて遊むだ。これには貴人の立ち交つた例もある。常陸國では筑波山、肥前國では杵島山、攝津國では歌垣山などに此歌垣が催された。

歌垣に立つた若い男は、思ふ女を呼びかけて其名を問ひ、家を問うて婚約を結んだ。又、此日は人の妻に物問ふことも人の妻と握手することも頗る自由であつた。さて話が纏まると若い男は其證據として何か身につけて居るものを女に贈つた。常陸國では

筑波山の歌垣

姦通に對する制裁なし

筑波山の歌垣に男から物を貰はぬ女は女にして女に非ずと云ひ做されて居た。

『萬葉集』九の卷に次のやうな歌が載つて居る。

『鷲の住む、筑波の山の、裳着津の、其津の上に、誘ひて、乙女男の、往きつどひ燿ふ燿歌會に、他妻に、我も交らむ、わが妻に、人も言問へ、此山を、頒く神の初めより、禁めぬ業ぞ今日のみは目ぐしもなみそ、事もとがむな』

今日一日は神も許した燿歌會(歌垣)である。他妻にわれも交らむ、わが妻に人も言問へといふのであるから、隨分奔放なものであつたといふ事が知られる。

皇太子は海柘榴市の歌垣に立つて、影姫と相會はうとされたのである。

(四四) 影姫

稚鷦鷯尊は歌垣に群れ集ふ若い男女の中に立つて、早くも戀しい姫の姿を見出された。

皇太子姫の袖をとらふ

皇太子の御手は早くも姫の袖をとらへて居た。皇太子はやがて、

琴頭に來居る影姫珠ならば
吾がほる珠の、あわみしら珠

と、影姫を眞珠に比して戀慕の情をかきくどき給ふ處へ、何處ともなく現はれた平群鮪が、尊と姫との中を距てゝ立つた。一寸畫面にでもありそうな見えである。

鮪、姫に代りて

大君の御帶のしづはた結びたれ
たれやしひとも相思はなくに

これは鮪が姫に代つて尊に奉つた歌である。皇太子はしづの帶をたれ結びて美しと見奉れども、妾の思ふ人はほかに在りとの意である。

鮪誅せらる

姫と鮪との關係は明かになつた。かねて平群一族の專横を惡しみ給へる皇太子は、今日しも官馬の事で深く眞鳥に銜み給へる折柄、またこの戀を妨げられたので、赫然として父子の無禮を憤り、直に大伴金村連をおとづれて密に謀をめぐらし給ふ。

大伴連は皇太子の命により其夜直に兵を發して平群鮪を路に邀へ、乃樂山に誅し

て尊の御怨をはらし奉つた。

影姫の悲歎

影姫は鮪の後を慕つて來たが、乃樂山に其戀人の屍を見て悲泣慟哭した。爾うして手づから甲斐〳〵しく其死骸を收めて葬つた。

十一月、大伴金村連皇太子に向つて申すやう、

『眞鳥の賊、擊つべくんば、之を討たん』と。皇太子宣給はく、

『天下將に亂れむとす、稀世の雄にあらざれば濟ふこと能はざるなり。能く之を安んせんものはそれ連にあるか』

大伴金村眞鳥を誅す

と。茲に眞鳥誅伐の義は一決した。其處で大伴金村が兵を率ゐて急に大臣の家を圍み、火を放ちて、ひた攻めに攻めかけた。眞鳥は力つきて其子弟と共に、天を恨み地を呪ふて誅に伏した。紀元千百五十九年、賊徒盡く亡びて、皇太子、泊瀬の列城に卽位の大典を擧行し給ふ。之が武烈天皇である。

さて、次にわが上古史を飾る女性の名は日本最初の女帝として知らるゝ推古天皇である。

母后の權力

推古天皇は三十代の帝、欽明天皇の皇女にして、敏達天皇の皇后である。神武天皇以來、日本の朝廷に於いて母后の權利が如何に强大であつたかは、以上の記事によつて既に讀者が十分に了解せられた事であらうと信ずる。欽明天皇以來、大臣と大連とが朝廷に派を立てゝ政權の爭奪をした事は、何人も熟知して居る事實である。卽ち大臣たる蘇我氏は崇佛を旗幟とし、大連たる物部氏は排佛を旗幟とし、互に鎬を削つたけれども、要するに政權の爭奪が其根本であつた事はいふまでもない。

排佛黨と崇佛黨

此確執は紀元千二百十二年、欽明天皇の卽位十三年に百濟の聖明王が、釋迦佛の金銅像一軀と幡蓋、經論を獻じ、別表を以て天皇に其信仰をすゝめ奉つた時に源を發して居る。廟議の結果蘇我氏は崇佛を主張し、物部氏は排佛を主張して激烈なる抗爭となつたが、紀元千二百三十年に至つて崇佛派の首領たる蘇我稻目先づ死し、次いで排佛派の首領たる物部尾輿も死し、欽明天皇も亦其翌年を以て崩御となつたので、問題は先づ一段落を告げた譯であつた。

處が敏達天皇の卽位と共に、此政爭は再び彼等の後繼者によりて繼續せられる事と

兩黨依然として對峙す

なつた。卽ち稻目の子蘇我馬子は父の遺志を繼いで依然崇佛を主張し、尾輿の子物部弓削守屋は之も父の遺志を承けて依然排佛を主張し、兩氏の反目は日一日と甚しきを加ふるに至つた。

敏達天皇の崩御

稻目と尾輿との對抗は、他くまでも崇佛排佛の旗幟を表面に立てゝ、朝權の爭奪といふやうな事はおくびにも現はさなかつたが、敏達天皇の御時に至つては、兩派の抗爭が嵩じて、それを露骨に現はすやうになつて來た。

炊屋姫

敏達天皇は紀元千二百四十五年八月を以て崩御あり。其殯宮に於いて兩派の軋轢は正に極點に達した。此時に際して皇后、炊屋姫は、崇佛黨たる蘇我氏の爲に擁せられて、大兄皇子を立つ可しと主張し給へば、物部氏は同じく欽明天皇の皇子なる穴穗部皇子を立てんとして、茲に兩派の拮抗は漸くにして戰爭狀態に移つたのである。

（四五）皇后炊屋姫

堅鹽媛

炊屋姫擁せらる

蘇我黨に擁立せられ給ひし、大兄皇子は、欽明天皇の第四子であつて、御母、堅鹽媛は、馬子の父稻目の女である。されば馬子の擁立した大兄皇子は現に自分の甥であつたのである。

けれども此大兄皇子を擁立するにつけては敏達天皇の皇后、炊屋姫を自黨に戴き奉るの必要があつたものと見えて、馬子は敏達天皇崩御の後はこの炊屋姫を戴いて、排佛黨たる物部氏に拮抗した。物部氏の方では蘇我黨が大兄皇子を立てんとするのを見て、同じく欽明天皇の皇子にわたらせ給ふ穴穗部皇子を戴いて之に對抗した。

斯くの如くにして兩黨對立の勢ひはなつたけれども、物部黨が蘇我黨の爲めに炊屋姫皇后を擁せられたのは寔に償ふ可からざる失策であつた。炊屋姫が蘇我黨に加擔せられると同時に、三輪君逆と、厩戸皇子とは蘇我黨に屬して馬子を翼贊する事となつた。

用明天皇卽位

蘇我黨の勝利は當然であつた。大兄皇子は紀元千二百卅二年を以て卽位あり。之を用明天皇と申し奉る。而して蘇我馬子の大臣、物部守屋の大連たることは依然として

穴穂部皇子殯宮に入らんとす

三輪君逆皇子の入城を拒む

變らなかつた。

三輪君逆は先帝の時から寵任せられて居たが、其後炊屋姫に仕へて内外の事務を取扱つて居た。用明天皇卽位の元年、物部黨に擁せられたる穴穂部皇子は何の覺す所があつてか、ツカ〳〵と進んで炊屋姫のゐます殯宮の中へ入らうとした。物部氏に擁せられた穴穂部皇子と申すのは日頃から覇氣滿々たる皇子であつた。それにしても此皇子がひとり殯宮に入つて炊屋姫を見ようとせられた胸中の秘密を察するに、當時兩黨の對抗に就いて、炊屋姫の勢力が如何に重きをなして居たかを知るに足るのである。

處が三輪君逆は流石に皇子の胸中を洞察したものと見え、固く遮り止めて入れない。急に衞兵を呼んで宮門を重鎖し斷然其入城を拒むだ。皇子は大に憤つて、

『何人ぞ此警護は』

と、問ひ給へば、衞兵は叫んで、

『三輪君逆なり』

と答へ奉る。皇子は『我は穴穂部なり』といふので七たび其門をあけよと迫られたけれども衞兵は逆の命令によつて斷斷乎として開門を拒むだ。

皇子逆の誅伐を主張す

皇子憤然として朝し、大臣と大連とに告げてのたまふやう、

『逆大に無禮なり。殯庭に公言して「朝廷を荒さず、淨きこと鏡面の如くに治め奉らむ」といへりしと。方今天皇の子弟多く在し、兩大臣侍るに誰か情を恣にして專ら奉仕するといふことを得んや。又、今日、余殯宮を見んとするに彼拒みて入れず。呼ぶこと七回なれども應ぜず。願はくは之を斬らんと欲す』

蘇我馬子窮す

と。大連が之に贊成したのは勿論である。けれども蘇我馬子にとつては眞に恐るべき難題であつた。逆が皇子を入れなかつたのは自黨の爲に計つた忠義立である。それを誅戮すべしとは何うしても云はれない。けれども、それは裏面のことである。表面は飽く迄も皇子と一臣子との爭ひである。皇子が殯宮に入らうとするのを、逆が門を閉ぢて入れなかつたとあつて見れば、逆に罪なしとはいはれぬ。

物部守屋の得意

蘇我馬子は熱湯を飲むやうな思ひを忍んで逆の罪を問ふことに贊成した。

物部守屋は大得意である。皇子と共に兵を率ゐて先づ磐餘の池を包圍すれば逆は早

逆三諸山に隠る

くも之を聞いて三諸山に隠れ、夜陰に乘じて更に後宮（姫の別業）に身を潜めた。處が、之れを物部の軍に密告するものがあつたので、憐むべし三輪君逆は袋の鼠も同然となつた。皇太子は守屋に命じて宣給はく、

『汝、應に往きて逆、竝に其二子を討つべし』

と。守屋は大兵を率ゐて後宮に馳せ向つた。此事を聞いた蘇我馬子は氣が氣でない。

守屋大兵を率ゐて進む

現在自黨の爲に忠義を立てた逆を見殺にするに忍びずといふので、ひとり穴穂部皇子の家に詣れば、皇子は今結束して守屋の援に赴かんとし給ふ所である。馬子、皇子を止めて申すやう、

馬子諫止

『王者は刑人に近づく可からず。自ら往き給ふ勿れ』

と。皇子は耳にも入れない。袖を拂つて出かけようとするので馬子も仕方がない。皇子の後からついて磐餘の池まで竝び押しに押しかけた。

（四六）四天王以上の力

磐餘の池にて

磐餘の池に至り馬子は再び皇子の御袖をひかへて、其輕舉を諫め奉つた。皇子も今は拒むに言なく、胡床に踞して、大連の復命を待ち給ふ。

逆伏誅の報至る

やゝ久しくしく守屋は兵を率ゐてかへつて來た。復命して申すらく、

『逆等を斬り訖へぬ』

と。傍にあつた馬子は之を聽くに忍びなかつた。惻然として歎ずらく、

『天下の亂れんこと、近き將來にあり』

と。之をきいた物部守屋はさも小氣味よげにあざ笑つた。

『汝、小臣の識らざる所なり』

と。茲に於いてか物部黨は蘇我黨に對して一矢を酬いた譯である。翌年の四月天皇病篤きに際し群臣に詔し給はく、

天皇三寶に歸せんとし給ふ

『朕三寶に歸せんと思ふ。卿等よく之を議せよ』

と。物部氏は例によつて極力反對した。蘇我氏は大に喜んで之を奉つた。激烈なる論爭の結果物部氏は袂を拂つて退出した。これは或るものが物部守屋に告げて群臣が路

守屋叛く

に要して大連を圖らんとすと告げたからであるといふが、何れにしても、守屋の叛意は此時既に決して居た。彼は阿都の別業（河内國澁川村）に走つて兵を聚め、守備を嚴にして戰意を示した。

中臣勝海連はかねて蘇我黨であつたが、大連怫然退出すときゝ、兵を率ゐて、赴援せんとしたが蘇我黨たる舍人迹見首赤檮の爲に殺されてしまつた。

用明天皇崩御

蘇我黨たる大伴毘羅夫連は直に兵を發して、大臣の爲に槻曲の家を警衛する、用明天皇は天下の大亂を眼のあたりに見て、紀元千二百四十七年四月七日といふに崩御あり。

炊屋姫兵を動かし給ふ

物部守屋は穴穗部皇子と共に淡路に狩獵すといひふらして兵衆を動かした。蓋し朝廷の動搖に乘じて事を擧げんとしたのである。

炊屋姫は逆の一件以來、深く穴穗部皇子に銜み給ふ處である。馬子の請に應じ直に佐伯連丹經手に命じて穴穗部皇子征伐の軍を起し給ふ。六月丹經手は突差の間に、兵を進めて皇子の宮を圍み、一戰にして皇子及び宅部皇子を討ち取り奉つた。茲に於いてか阿都の守屋は全然孤立の姿となつた。

大軍河内に進擊す

七月には、泊瀬部皇子、竹田皇子、厩戸皇子、難波皇子、春日皇子、紀臣男麻呂、巨勢臣比良夫、膳臣賀揭夫、葛城臣烏那羅等が皆炊屋姫の召に應じて馳せ參じ蘇我氏に黨して物部征伐の軍を進めた。

澁河の激戰

大軍は潮の如く河内の澁河に進むで、守屋の家を包圍した。守屋は一族、奴軍を率ゐて奮戰し、稻城に據り榎の大木に登つて瞰射すること雨の如く、大に官軍を惱ました。

厩戸皇子は此時御年甫めて十六歳であつたが、守屋の軍の甚だ優勢なるを見て『我軍或は敗れんとす。祈願に非ずむば成り難かる可し』と、白膠木を斬つて立處に四天王の像を作り、之を頂髮に戴いて祈り給ふやう、

四天王を祈る

『今若し我をして敵に勝たしめば、必ず當に護世四王の爲に寺塔を起立し奉る可し』と。蘇我馬子もまた誓言を發すらく、

『凡そ諸天王、太神王、我を助衞して利益を得せしめ給はゞ、願はくは當に諸天王と

大神王との爲に寺塔を起立し、三寶を流通せしむ可し』

馬子の軍大に振ふ

と。馬子の軍は之に力を得て勢大に振ひ、矢石を冒して突擊にうつた。此時、跡見首赤檮は見事に守屋を射墮したので物部氏の軍は忽ちにして潰亂し、一族皆誅に伏した。

四天王寺の建立

戰後厩戸皇子は、誓言の如く、攝津國玉造の岡に四天王寺を建て、大連の奴半を分ちて寺の奴となし、其宅の半を以て田莊に當てた。馬子も亦誓言に從ひ、飛鳥（大和國高市郡）の地に法興寺を起した。爾して迹見首赤檮は守屋を射た功によつて田、一萬頃を賜はつた。

物部黨滅ぶ

守屋の黨に捕鳥部萬といふものがあつて、天下無雙の强力と聞えたが、河內國有眞香邑に窘迫せられて誅に伏した。斯くの如くにして天下は全く崇佛黨の掌中に歸したのである。

崇佛黨が排佛黨を粉碎することを得たのは、四天王の冥加よりも炊屋姬皇后の力が大きかつた事はいふ迄もない。皇后を擁して戰づたのが、崇佛黨成功の主要なる原因であつた。

（四七）黑幕の御女性

小姉姬

天下は蘇我黨の掌中に歸した。

紀元千二百四十八年といふに欽明天皇の第十二子、泊瀨部皇子卽位あり。之を崇峻天皇と申し奉る。御母、小姉姬は蘇我稻目の女であるから、馬子にとつては甥に當つて居る。

馬子の跳梁

馬子が大臣たることは故の如くであつたけれども、物部氏滅亡の後はまた大連を立てない事となつた。斯くの如くにして蘇我馬子跳梁の時代は來た。

唯、茲に注意すべきは炊屋姬皇后と崇峻天皇との關係である。先に大連の謀叛に伍して馬子の爲めにうたれ給ひし、穴穗部皇子は崇峻天皇の御兄である。馬子が自分の地位の安全を計る上からいへば、崇峻天皇を立てるよりも、炊屋姬皇后を立てた方が遙に策の得たるものと云はなければならぬ。然るに其炊屋姬を措いて、崇峻天皇を立てた馬子の胸算は果して何んなものであつたらうか。

馬子の胸算

崇峻天皇馬子に銜み給ふ

蘇我氏が皇后の命と稱して、物部氏を河内の澁河に攻めた時には泊瀬部皇子（崇峻）も蘇我氏の軍に加はつて居たけれども、馬子は現在兄、穴穂部皇子の仇敵である。其專恣横暴をまのあたりに見ては、深く蘇我氏に銜み給ふ所があつたに相違ない。而も其事情を知りつゝ皇子を帝位に卽け奉つた馬子の胸中こそ大に研究すべき價値がある。

炊屋姫と馬子

馬子の立場になつて見れば、皇子の御怨みは、皇子を何處の地に於いても解ける譯でない。して見れば何うせ皇子は自分の覇業の邪魔ものである。けれども皇子は大連の亂に味方となつて物部氏を攻めて居る。功こそあれ、問ふべき罪はない。罪のない皇子を弑し奉れば、天下の人心が立處に己れを去る。又、皇子を措いて炊屋姫皇后を立て奉るのも、あまりに露骨である。之は寧ろ皇子を立てゝ天下に自分の二心なきことを知らしめ、皇子に其德を賣るに如かずと思案を極めたものに相違ない。さてこそ大連一件の黑幕に立つて驚く可き女性の御力を示し給ひし皇后は尙ほ其姿を潛めて、表面の舞臺に現はれなかつたのである。

馬子の耳目君側に滿つ

されば、天皇の御側はことごとく、馬子の耳目であつたに相違ない。帝朝に一言を發し給へば、馬子夕に之を知るといふ有樣で、蘇我黨は折もあらばと、鵜の目鷹の目で帝の御動靜を窺つて居た。

廐戸皇子龍顏を相す

紀元千二百四十九年の冬、天皇、廐戸皇子を召して宣給はく、

『汝、よく人を相すと聞く、今、試みに朕を相せよ』

と。皇子かしこみて熟々龍顏を相し奉るに、御眼の中に傷害の徵がアリ〳〵と現はれて居た。

傷害の御相

『まことにめでたくおはします。但逆に御命のあやぶみなん徵、見えさせおはしますと申し奉れば、帝、

『如何なる處を見てしかいふぞ』

と問ひ給ふ。皇子答へて、

『赤き筋、御眼を貫けり。これは傷害の御相なり』

と申し奉る。其處で帝が御鏡に向つて見給ふに、皇子の申す通り御眼の中に赤い筋が一面に漫つて居たので、いたく驚き怖りおはしますとある。

當節の醫者にいはすれば、眼の赤いのは結膜炎とか何とかいふのであらうが、廐戸皇子の御言を深く味うて見ると却々面白い。此一場の物語によつて、馬子の大逆が決して偶發的のものでなかつた。初めからの陰謀であつたといふ事が分る。廐戸皇子は後に聖德太子といはれる程發明な御方であつたから、早くも馬子の胸中を察し、事に托して帝をいましめ奉つたものとも思はれる。

馬子大逆の意あり

廐戸皇子の諫止

紀元千二百五十二年の二月とある。崇峻天皇は、廐戸皇子に向つて密にのたまふやう、

『蘇我の大臣、内には私を恣にし外には僞を飾り、佛法を崇むるやうなれど心正しからず。如何にすべき』

と。皇子は驚いて、

『唯この事を忍び給ふべし』

と、固く天皇の御口を封じ奉つた。斯くの如くにして天皇と蘇我氏との間は漸くに離隔して來たのである。悲しむべき第二の大逆事件は近づいた。

（四八）推古天皇

其年の十月といふに、猪を奉るものがあつた。崇峻天皇御覽じて、

『猪の首を斬るごとく我が厭ふ所の人を誅せんは何時の日ぞ』

とのたまふに、廐戸皇子大に驚いて、『天下の大事、今の御言よりぞ出て來なむ』と俄に内宴を開いて人々を饗し、祿などたまひて、

『今日、帝の宣給はせつること、ゆめ〳〵人にな語りぞ』

と固く約して其場を繕うた。處が馬子の用意はそれよりもなほ周到であつたものと見えて、皇子の苦心も其甲斐なく、帝の御言は直に彼の耳に達した。彼はかねて期したる事ながら今更のやうに驚いた。よし、其御心底ならばといふので、東漢駒といふ

猪を奉るものあり

帝の御失言

逆賊東漢駒

ものに機密をさづけて、十一月三日と云に畏れ多くも一天萬乘の君を弑し奉つた。之が日本歴史の上に見る、悲しむべき第二の大逆事件である。

駒の大逆を見た宮中の人々は、スワこそ一大事と、軍の用意をしたものもあつたが悉く馬子の爲に捕へられてしまつた。駒の大逆は馬子の使嗾に出でたものであると云ふ事が之によつて明かになつた。それと同時に一度騷ぎ立つた宮中もヒッソリと鳴を靜めてしまつた。

東漢駒河上姫を辱しむ

馬子は厚く賞して樣々の物をとらせ、家人同樣に待遇した。駒は馬子の寵になれて自由に後庭に出入し、馬子の室とも親しく口をきくやうになつた。斯くする中に彼はいつしか馬子の女、河上姫の容色に思ひを焦し、一夜忍んで遂に其操を奪つた。

馬子痛憤

馬子は駒の非道を聞いて大に憤り、髪をとつて木の枝にかけ、自ら弓矢をとつて云ふやう。

『汝、恐かなる心を以て帝を失ひたてまつる』

東漢駒殺さる

と。刹那に矢は飛んで駒を射た。駒は叫んでいふやう、

『われ、其時に大臣の事を知れりき。帝といふことを知り奉らず』

と。馬子はいよ〳〵怒りをなして劍を拔き腹をさいて其頭を刎ねた。

推古天皇卽位

此時まで黑幕の裡に潛んで、其姿を現はし給はざりし炊屋姫は、崇峻天皇の御遭難と同時に起つて正面の舞臺に現はれ、紀元千二百五十三年といふに卽位あり。日本最初の女帝として宇内に君臨し給ふ事となつた。これが推古天皇である。

聖德太子

推古天皇は前にもいうた通り、欽明天皇の皇女であつて、御母は稻目の女であるから馬子とは舅姪の關係にてわたらせ給ふ。卽位の翌年、四月、厩戸皇子を立て丶皇太子となし、萬機をあげて悉く太子の手に委ね給ふたとある。

『わが身は女人なり、心に物を覺らず。世の政は總て聖德太子に爲し給へ』

と、これが其時の詔である。されば、推古天皇三十六年の御治績は、之を要するに厩戸皇子卽ち聖德太子の御治績である。天皇が女性としての御働きは寧ろ其黑幕時代にあつた。炊屋姫皇后として蘇我黨の黑幕に立たせ給ひ、敏達、用明、崇峻の三代の

間續いて、暗に其勢力を發揮し給ひし其時代に在つた。天皇の御卽位はちやうど四十といふ御年であつた。婦人の四十といへばすべての力の漸く衰へかけた時代である。此點から考へても、推古天皇の御生涯は寧ろ前に述べた黑暮時代が其花であつたに相違ない。

推古天皇の御生涯

厩戸皇子が推古天皇の下に、皇太子として行つた政治の改革は大概左の如きものである。

聖德太子の改革

(一)憲法十七條を制定したりしこと。

これは皇子が佛敎の精神に則つて百官を訓戒した道德的の條文であつて詔勅として發布されたものではない。

(二)美術を奬勵したりしこと。

皇子は佛法布敎の爲に美術を奬勵した。卽ち有名なる畫師、佛師の爲に戶課を免じて其技の進歩を圖つた。之が爲に巨工名匠が一時に多く世に現はれた。

(三)支那との交通を開きしこと。

皇子は其佛法に熱心なるあまり、三韓との交通に滿足せず、直接使を支那に遣して隋唐との交通を開いた。天皇の十五年に小野妹子が隋に使し、翌十六年に隋使十二人と筑紫に歸つた。其年の九月に妹子は再び使として隋に赴き同十七年の九月を以て歸朝した。これから支那文明の影響が眼に見えて際立つて來た。

冠位の制定

(四)冠位を定めたりしこと。

天皇の十一年に皇子が始めて冠位を制定し、十二の階級を設けた。十二年の正月に之を諸臣に賜うて着用せしめた。これが日本に於ける官人選叙の基本であつて、やがて大化新制の前驅をなしたものであつた。

舊記曆數の制定

(五)舊記を修めたりしこと。

皇子は馬子と中臣御食子とに命じて家々の古記を集めしめ秦大連と小野妹子とに命じて神記を作らしめ、自ら文案を書し島大臣、大臣御食子、秦大連等の補助によりて天皇記、天皇國記、臣、連、伴造、國造、百八十部公民の本記を作つた。

(六)曆數を制定したりしこと。

天皇の十年に百濟の僧勸勒なるものが朝して曆本及び天文地理の書を貢した。爾來日本は專ら此曆法を採用する事として從來の紀年法を廢した。

聖德太子病む

(四九)　形名の妻

紀元千二百八十一年、聖德太子病篤し。推古天皇、失聲歔欷して之をいたみ、田村皇子を勅使として、屢々其病狀を問はしめ給ふ。勅してのたまはく、

天皇御軫念

『朕聞く太子、病に寢ねて將に他界に遷化せんとす。毎に慰問を加ふるに言と涕と竭ぶ。痛ましきかな。悲しきかな。それ再び遇ひ難からむ。若し願ふ所あらば、朕將に之に隨はんとす』

と、太子答へ奉るらく、

『臣宿因を以て幸に皇門に生る。之が德を報いんと欲すれども、昊天極まり罔し、況んや其器に非ずして久しく以て柄を執る。聖恩未だ酬いずして浮世將に盡なんとす。之を以て思ひとなす。亦願ふ所無し。たゞ熊凝を以て朝廷に奉り。大寺をなさんと欲す。これ皇胤を保護する所以なり』

大安寺建立

と、天皇之をきこしめして、且つ悲しみ且つ喜び、直に熊凝精舍を以て大伽藍となし給ふ。今の大安寺といふのが卽ちこれである。

天下悲泣

斯くて二月二十二日といふに聖德太子は、御年四十九歳にして斑鳩宮に薨御あり、大臣以下、群臣、百官、天下の衆生悉く父母を亡うた如くに悲泣號哭したとあるのは『太子傳』の誇張としても、兎に角、上下擧つて此聖太子の遷化を痛惜したことは事實であらう。

蘇我馬子專横

さて、太子薨去の後は、蘇我馬子いよいよ政を專らにして、横暴を極めた。紀元千二百八十四年、大臣蘇我馬子、其部下、阿曇連、阿倍臣麻侶の二人を以て天皇に奏せしめ、請うて葛城縣を得ようとした。曰く、

推古天皇の英斷

『葛城縣はもと臣の本居なり。故に其縣によりて姓名となす。願くは、其縣を得以て臣が封縣となさんと欲す』

と、天皇答へたまはく、

『今、朕は則ち蘇我より出で大臣はまた朕が舅たり。故に大臣の言は、夜に言はゞ夜も明さず。日に言はゞ日も晩さず。何の辭か用ひざらむ。然れども今、朕の世にあたりて頓に此縣を失はゞ後に君たるもの言はむ。愚痴なる婦人、天下に臨みて以て頓に此縣を亡へりと。豈ひとり朕の不明に歸するのみならんや。大臣も亦不忠の譏を免れざらむ。これ後葉の惡名なり』

と、且つなだめ、且つさとして專横なる馬子の奏請を斷々乎として排けられた處は、

流石に英明の君と申し奉るべきである。それにしても、『大臣の言は夜にいはば夜も明さず、日にいはゞ日も晩さず』とあるのは實に畏れ多いことである。以て馬子が如何に專恣横暴を極めたかを察すべきである。

夜も明さず日も晩さず

紀元千二百八十六年の五月二十日といふに蘇我馬子が死んで、其子の蝦夷が大臣の職を繼いだ。專横の度は父に優るとも劣る所はなかつた。日本は此時に於いて族制政治の弊が正に其極點に達したのである。

蘇我蝦夷

紀元千二百八十八年三月七日、日本最初の女帝、推古天皇は御年七十五歳を以て崩御ましました。遺詔してのたまはく、

推古天皇崩御

『比年、五穀みのらずして百姓大に飢ゑぬ。山陵を起して厚葬すること勿れ』

と、これによつて此時初めて天皇の喪禮を起したといふ。

前にもいうた通り、天皇は卽位の時が御年四十であつて、守屋の亂の時が、御年三十四、ちやうど女の盛りといふ時、炊屋姫として敏達天皇の皇后に立たれたのが二十三といふ花の時代であつた。

推古天皇に次いで立たのが舒明天皇、此時に、上毛野形名といふものゝ妻が夫の蝦夷征伐に隨つて驍名を轟かした。

上毛野形名の東征

紀元千二百九十七年に又々蝦夷が反したので舒明天皇は、上毛野形名を將軍に拜して征討の師を起した。形名は一戰に利を失つて、蝦夷の爲に其要壘を包圍された。士氣は全く阻喪した。形名は暮に乘じて遁れ去らうとした。其時、軍中に在つた彼の妻が釉をひかへて、彼を激勵した。

形名の妻

『走ればとて免れ得べしと覺し給ふか淺猿しき事の限りなり。妾、聞く君の祖先は武を海外に立てゝ帝の厚き御感にあづかれりと。今、君難に臨みて免れ給はゞ先人の功盡く廢せむ。自ら耻ぢ給はざらんや』

と、先づ酒をすゝめて形名の心を鎭めた。妻は形名の醉うて熟睡するを見親ら劍を佩び、强弩をとり、婢妾數人をして急に弦を鳴さしむれば、形名は驚き醒てスワこそ敵の夜討と矛を執つて立ち向ふ。

形名の妻の驍勇

續いて從ふ妻の一隊、暗はあやなし。蝦夷は恐ろしい弦の音に敵兵なほ多しと、

女軍の面影

闘を解いて潰走した。

物換り星移つた此頃にも、女軍の面影は未だ明かにのこつて居た。

（五〇）依然として自由戀愛

風流秀絶の貴公子

支那の文明は斯くの如くにして、潮の如く日本に押し寄せたけれども、日本の社會は未だ依然として自由戀愛、自由結婚の時代に在つた。

天智天皇の御時と覺えて居る。大伴田主といふ男があつた。『容姿佳麗、風流秀絶』とあるから大そうな美男であつたに相違ない。其頃の若い女は皆大騒ぎをして此男を競ふたものと見える。處が今も昔も人情は同じことで、大勢の女からやかましく騒ぎ立てられる男は、高くとまつて却々許さない。それを石川女郎といふ浮氣女が口説かうとかゝつた。

石川女郎

女は一計を案じた。或る晩、隣家の老婆に假裝し、手に鍋子を提げて仲郎（大伴田主の字）の家の戸を叩いた『硬音跼足』とあるから、妙に硬張つた聲を出し腰を跼めて『これは東隣に住む貧女今宵火を無心に參りたり、あはれ、此戸をあけ給へや』とうまく家へ入り込んだが、さて直に見現はされて、早々追ひかへされてしまつた。

老婆に扮して仲郎の家を驚ふ

女郎拒まる

女はひどく器量を下て、あまりの極り惡さに。一首の歌を詠んで其場を繕はうとした。

美男の權威

みやび男と我は聞けるを宿かさず
我をかへせりおぞのみやび男

大伴田主は之を聽いて、

みやび男に我はありけり宿かさず
かへせる我ぞみやび男にはある

と返した。此頃から美男といふものは乙に濟まし込んで、女の擇り好みをするのを誇りとして居たものと見える。

恁んなに振りつけられても、女の方では未だあきらめられなかつたものと見えて、大

女郎なほ懲りず

伴田主が足を病むと聞いた時、

我がきゝし耳によく似ばあしかびの
あしなへ我がせつとめたぶべし

といふ歌を送つて居る。男女の間に何等の障壁もなかつた時代の風俗が、これらの歌を通してよく想像せられる。

戀の藤原鎌足

さて美人の場合も之と同じであつた。俗説ではあらうが小野小町が深草の少將に百夜通はせたといふのも、詮じて見れば、美人の誘りであつたに相違ない。其美人の誘りといふやうな事は、既に此頃からあつたものと見える。藤原鎌足といへば、天智天皇を助けて大化の改革を行つた大政治家であるからして、女にうつゝを抜かすなどいふ事はなかつたやうにも思はれるが、却々そうでない。『萬葉集』に得意の歌が載つて居る。

得意の歌

我はしも安見子得たり皆ひとの
得がてにすといふ安見子得たり

男嫌ひの安見子

新制度と新風俗

安見子といふのは當時評判の采女であつたに相違ない。大勢の男が騒ぎ立てる處から所謂美貌の誘りといふやうなものがあつて却々人に許さなかつた。『男嫌ひ』といふ評判の安見子を乃公が口説き落としたといふて誘つた鎌足の歌によつて、私達は、當時既に、多くの男を惱まして心私かに誘りとした美人のあつた事を知る事が出來るのである。

（五一）賣淫史の一節

上古に於ける日本婦人の活躍は以上の叙述によつて略盡くされた。大化の新制以後は佛教の思想も漸くにして一般的となり、儒教の影響も漸くにして目に立つて來た。從つて開闢以來、日一日と形を成しつゝありし新しい社會制度に伴ふ、新しい風俗も生れて來た。私は更に筆を新にして奈良朝時代の婦人を説かなければならぬ。

茲に上古史を去つて、奈良朝時代に移るに當り、私は日本に於ける賣淫史の一節と

采女制度の發達

して采女制度の發達を叙述して置き度いと思ふ、之は、平安朝に至つて白拍子と關係の深い事實であるから、讀者に於いても其心して讀んで貰ひ度い。

酒と女

野蠻時代にあつて、弱者が强者を接待する方法は酒と美人とである。一層露骨にいへば、山海の珍味、卽ち刺戟性の御馳走を供して置いて、席に美人を侍らせるのである。何處の國でも最上の御馳走といふものは、大かた刺戟性のものである、御馳走で散々刺戟されて居る處へ、水の滴るやうな美人が現はれて來る。之が當節の所謂宴會の起原であるといふと、そんじよ其處らに差し障りが有るかも知れぬ。

接待的賣淫制度

今日では、藝妓とか、女中とかいふ便利なものがあつて、お客樣の幇間をさせるが、未開時代にはそんな者がなかつた。其處で、接待した强者の座側に侍らせるものは、多く自分の女か、若くは自分の妻であつた。

斯ういふと讀者は怪しからんと直ぐ憤慨せられるかも知れないが、それはいけない。人類社會は何れも、斯ういふ階段を經て進歩して來たのである。現に南洋の土人の間には、未だ此の風習を存して居るものがある。日本でも僧侶が民衆の間に絶對の權威

南洋の土人とエスキモーの奇習

を持つて臨んだ時代に在つては『お伽』というて乙女の操は必ず僧侶に捧げるものと思惟されたこともある。エスキモー人は自分の妻女を其友人に貸與して惜むの色なきものを以て最高最貴の人と見做すといふ。

日本の上古史に就いて其實例を求めるのは少しく憚る所がないでもない。唯讀者に於いて、私がこれまで述べた所の事實をよく味はつて貰ひ度い。考へ直して貰ひ度い

强者に妻女を納る

或る强者が、戰爭其他の目的で地方を巡行する際に、地方の家族が其强者を自分の家にといめて接待する。爾うして其强者が、豪族の女を納れたとあるのは、卽ち此意味である。恁ういふ事實は、私がこれまで述べた中に澤山あつた筈である。

これ卽ち賣淫の原始的狀態である。所謂接待的賣淫制度である。

美人を募る

それから又、强者は、其支配する地方に令して、美人を募るといふ場合もあつた。筑紫の熊襲、川上梟帥が新室の宴に美女を募つた。其募集に應じて日本武尊が女裝して賊寨に入り込むだなどいふのは卽ち此例である。

采女は朝鮮の官妓のやうなもので、其起原は明かでないが、朝廷が天下に美人を募

大寶令と采女の制度

つたといふ、事實に就いていへば隨分古いものである。唯、采女といふものを募集することが、一個の制度となつて現はれたのは。大寶令以後の事である。大寶令（文武天皇）によつて制定せられた職員令によつて見ると、宮内省は一職、四寮、十三司に分れて、宮中の雜務、及び皇族宮人の事を司つた所である。采女司は其十三司の中の一であつて。其長官を采女正と稱し、專ら内膳の事に與らしめたとあるのは表面で、

外國の使臣を接待す

實は至尊に奉仕し、支那、朝鮮などの使臣を接待して旅情を慰めたものに相違ない。之はもとより唐制の模倣であつて、一種の官妓である。大寶令の制定する處によれば百戸に就て一人を召すといふのであるから、王城は美人で埋まつて居たものに相違ない。

京美人の由來

京美人は、多くこの采女なるもの丶子孫ではあるまいか、百戸に一人といふ割り當で國中の美人を王城に集めたのであるから、隨分人種の精練も行はれた譯である。『鴨川の水』と一口にいふけれども水の清冽な所に必ず美人が生れるといふ例はない。采女制度が京美人を作つたものと見るのが至當であらう。

采女の墮落

國中から選拔された美人が、一箇所に集められて互に妍を競ひ美を爭つたのであるから勢の赴く所として、風紀の頽廢が生せざるを得なかつた。采女は間もなく今日の藝妓といふやうなものに化して仕舞つた。

（五二）專門的賣笑婦人

采女日姫

采女はそれが官職として發表せられる以前既に存在した。雄略天皇が吉野の御馬瀬に狩獵し給ひし時、事に激して恐ろしい御色氣であつたのを、皇后と皇太后とがすゝめ奉つた大和の采女、日姫が酒を擧げて、御機嫌を直したといふ事がある。天皇采女の面貌端麗にして形容溫雅なるを見給ひ、乃ち色を和げて宣はく

『朕豈に汝の研咲を見るを欲せざらんや』

と、相携へて後宮に入り給ふとあるのは、采女の職分をよく說明したものである。

純然たる官妓

采女は純然たる官妓であつた。

既に情を街ひ媚を賣ることを以て本分とする專門の女性が出來た以上、周圍の男子の之に對して默して止むことの出來ないのは當然である。同じく雄略天皇の十二年といふに、木工、鬪鷄御田なるものが、伊勢の采女と相通じたといふ嫌疑を以て危ふく處刑せられんとした事がある。

伊勢の采女

同じく九年の二月には、河内直香賜なるものが天皇の命を奉じて筑前胸方神（宗像神社）を祀つた。之は天皇に於いて新羅親征の御企てがあつたからである。其時隨行を命せられた采女の艶なる姿にムラムラと欲情を起した香賜は、場所柄をも憚らず、あたりに人なきを窺ひ祭壇の上で、突然采女を挑むでトウトウ其戀を遂げてしまつた。之が爲に、香賜は天皇の御怒りに觸れ攝津國に於いて誅に伏した。

香賜神前に采女を汚す

其後、采女と朝臣との關係は益々紊亂して行つたものと見えて、舒明天皇は、朝臣にして采女と通ずるものは悉く處罰すべしといふ命令を下された。されば此頃は如何に墮落したというても采女はまだ一種の官女として、全然娼妓化しては居なかつたのである。

安子娘

三十九代の帝、弘文天皇は天智天皇の長子であつて、御母は伊賀の采女、宅子娘とある。采女は此頃に至つて、漸く娼妓若しくは藝妓化して來た。藤原鎌足が當時男ぎらひといふ評判の安見子（采女）を口說き落したというて大に誇つたこと、石川女郎が、當時第一の美男と聞えた大伴田主を口說き落さうとして苦心したことは、第五十項にも述べて置いた。同じく石川女郎の作として『萬葉集』に次のやうな勝手な歌がのつて居る。

石川女郎の歌

梓弓引かばまに〳〵寄らぬども
後のこゝろを知りがてぬかも

斯くて大寶令以後は采女の數も增えたであらうが、其墮落は實に甚しいものがあつた。

葛城王

葛城王といへば、橘諸兄の事である。難波皇子の曾孫にして、治部卿美努王の子である。和銅年中從五位下に叙せられ馬寮監に補せられ、葛城王と名乘つて居たが、天平元年正四位下に進み左大辨となり、同三年參議に擢んでられ、次いで從三位に叙

せられ、同八年に、請うて橘の姓を許され名を諸兄と改めたのである。

中央政府のお役人樣

此人が、東北を巡回した時に、陸奥國司の家に泊つた、何がさて京城にあつて諸王と尊ばれた人が、荒涼たる陸奥の野を旅して、萬事に氣のきかない田舍大名の家に泊つたのであるから、フトした事からひどく癇癪を起した。中央政府の役人が地方を巡回して、田舍者をおどしつけた呼吸は、今も昔も變りがなかつたものと見える。

山の井の歌

宛然たる藝妓

其處で國司は葛城王の御機嫌をとるために、都から、物なれた采女を雇つて來て、王の側に侍らせた。采女は左の手に拐を持ち、右の手で王の膝を擊ち、

あさか山影さへ見ゆる山の井の
淺きこゝろをわが思はなくに

と歌つて王の機嫌を取つたといふのであるから、宛然、今日の藝妓のするやうな事をして、客を歡ばせたものと見える。『チョイと貴郎や』といふので、流石氣むづかしやの葛城王も忽ちムニヤムニヤといふ事になつてしまつた。

日本の社會は父主家族の生活を始めてから約千五百年にして早くも恁んな立派な專

地方の娼婦

門の賣笑婦人を生み出したのである。王城に采女と稱する一種の賣笑婦人が現はれると同時に、地方にもまた別種の賣笑婦人が現はれた。恁んな事をアマリ長く續けるのも如何がはしいから、それは奈良朝の婦人を說き盡した後に讓る事とする。

佐用姬

佐用姬

佐用姬は大伴狹手彥の妾なり。宣化天皇の二年狹手彥詔を奉じて任那に赴く。船將に肥前の松浦を發せんとするや、佐用姬別を惜み、高山に登り其船を瞻望して悲傷に堪へず、遂に領巾を脫して之を麾く。見るもの流涕せざるはなし。後世此山を稱して領巾麾嶺といふ。

第三章　唐風模倣の時代

（五三）　紫の香へる妹

君まつと吾こひ居ればわが宿の
すだれうごかし秋のかせ吹く

といふやうな、凄艶な幽麗な調子を以て、しきりに當代の有髯男子を纖手に掀飜した女詩人、額田姫は齊明、天智の朝に於ける隨一の歌人であつたと同時にまた隨一の美人であつた。既に述べた通り、歌は當時の婦人に於いて戀愛の武器であつた。彼女は妖艶人を惱殺する底の美貌に加ふるに、此鋭利なる武器の持主であつた。多情多恨の質に非ずとするも、何うして世に放縱のそしりを免れる事が出來よう。額田姫は、天智、弘文、天武の三帝を巧に擒縦して、思ふがまゝに其大御心を惱まし奉つた。而も此三帝は揃ひも揃つて古來稀に見る英明の君主であつたといふに至つて、私達は額田姫の才氣と容貌とが如何に秀麗倫を絶して居たかといふことを察するに難からぬ。

多情多恨の額田姫

三帝一女を競ふ

朝政の根本的改革

皇太子として難局に當る

戀の天智天皇

天智天皇の政治的活躍は紀元千三百二十二年から、千三百三十一年に亙る十年間の御治世よりも、寧ろ皇太子として、孝德、齊明の兩帝を輔佐し、着々として新制度の施設に盡瘁せられた十七年間に在つた。天智天皇が若し御即位を望ませ給ふならば紀元千三百五年孝德天皇御即位の時を以て立せ給ふのが當然であつた。けれども天智天皇は自ら好んで皇太子中大兄皇子として天皇を輔佐するの地位を選ばれた。之は、もとより皇太子に深い思召のある所で、千年の積弊を一掃して根本的の改革を斷行せんとするには、天位に登らないのを以て易しとする。若し天皇の位にあつて直接此難局に處し、萬一失敗した時には、それこそ大變である。災害が延いて天位に及ぶといふので例の鎌足と計つて此方針を取られたものに相違ない。

大化以來、天皇の御即位に至る間二十四年、中大兄皇子としての御功績は實に赫々として國史を蔽ふの概がある。が、それは何處までも表面から見た天智天皇である。何がさて、藤原鎌足でさへ、安見子といふ美人を口說き落したというて得意の色ある時代である。中大兄皇子ともあるべき御方に、紅恨紫愁のかくれた歴史が無からう筈

がない。皇太子は久しく額田姫のやさしい姿と、生々とした才氣とに人知れぬ思ひを焦して居られたのである。

額田姫の素性

額田姫は大和國平郡郡大島山のほとりに住み、又の名を鏡王女というて居た。之を、世間が鏡王の女と讀むのは誤りである。處が、中大兄皇子よりも先に此美人に先鞭をつけたものがあつた。皇太子の御弟、大海人皇子其人である。

大海人皇子と姫との關係

大海人皇子、額田姫を納れて十市皇女(弘文帝の妃)を生むとあるから、餘程深い仲であつたものと見える。

人妻を奈何

『萬葉集』に天智天皇の歌が載つて居る。

紫のにほへるいもゆ惡くはあれど
ひとづまゆゑにわれこひめやも

『惡くはあれど』は、可愛ゆらしくはあれどといふ意味であらう。額田姫に對する競爭から、中大兄皇子と、大海人皇子とはもとから兄弟の御仲があまり睦まじくなかつたものと見える。開闢以來の大戰爭たる壬申の亂は、此戀が餘程其進行を助けて居る。

額田姫帝の西征に隨ふ

紀元千三百二十一年(白雉七年)一月、齊明天皇は新羅御親征の御企てを以て、兵を筑紫に進め、三月娜大津に至り、磐瀬の行宮に御座あり。倭の留守を大海人皇子に委ね給ふ。皇太子竝に藤原鎌足はいふまでもなく、帝を輔佐して西征の軍に隨つた。

中大兄皇子と姫

此時、大海人皇子の妃、額田姫は齊明天皇の供奉として隨行した。齊明天皇は前の皇極天皇が重祚ましましたので、日本第二の女帝である。さてこそ額田姫其他の女王を多く供奉として從へられたのであらう。處が、中大兄皇子は此行に額田姫と親しむで、かねての戀をかきくどく機會を得られたのである。多情なる額田姫は、其夫と別れてしみ〴〵旅寢のさみしさを感じて居たものと見える。

大和と筑前

齊明天皇は西征中、五月筑前、朝倉の宮に崩御ましまし、皇太子、中大兄皇子が代つて軍旅の事を統べ、倭には依然大海人皇子があつて內國の政を執り給ふ。斯くて皇太子は軍國他事の間に年をけみし給ふこと七年、紀元千三百二十八年といふに卽位あり。之を天智天皇と申し奉る。

（五四）妖星的女詩人

天智天皇は紀元千三百二十八年を以て卽位あり、同時に御弟大海人皇子を立てゝ皇太弟となし、御子、大友皇子を太政大臣として、諸臣の上首となし給ふ。

天智天皇卽位

大友皇子は天皇と、伊賀の采女宅子娘との間に生れた皇子であつたが、父の帝に似て才學無雙の聞えが高かつた。されば天皇が此皇子を寵愛し給ふことは非常なものであつた。而も皇弟大海人皇子を皇太弟に立て、大友皇子を太政大臣としたのは如何なる御事情であつたか。

大海人皇子皇太弟となる

或る學者は大友皇子は其御母が卑しかつたから（第五十二項參照）といひ、また或る學者は、大海人皇子が天皇の西征中、倭の留守を承つて天下の人心を收攬した結果であらうといふ。私は、天皇と大海人皇子との間には、額田姫に關する複雜な事情があつて、大海人皇子を儲嗣に立てなければ納まらなかつたのではあるまいかと思ふ。何れにしても、此時には御兄弟の間柄が頗る面白くなかつた。大海人皇子を皇太弟に立てたのは決して天皇の本意ではなかつたのである。

皇太弟の人望

天皇が曾て群臣をあつめて酒宴を給ひし時、皇太弟は何故か醉に乘じていたく激し給ひ、長槍を揮つて床を刺し貫いた。天皇も之を見そなはして捨て置く可きに非ずと捕へて害せんとし給ひしを、鎌足が諫めて止め奉つたとある。之等も額田姫の事からではあるまいかと思はれる。

皇太弟の不平

紀元千三百三十一年九月といふに天皇は病に羅らせ給ひ、十月十七日危篤とあつて皇太弟を召し給ふ。御使、蘇我臣安麻呂は皇太弟の腹心の臣であつたので、密に皇子に警告する所があつた。大海人皇子も萬一の用意を整へて參內し徐に御病室に進めば天皇は枕を擡げて、皇太弟に天下の後事を托し給ふ。胸に一物ある皇太弟は、態と謙讓の色をあらはして固く辭し奉つた。

天皇病篤し

『臣不幸にして多病なり。何ぞよく社稷を保たん。願はくば陛下、天下を皇后に附屬し、大友皇子を儲君とし給ふ可し。臣は今、出家して陛下の御爲に功德を修めんとす』

皇太弟御位を辭す

大海人皇子の吉野入り

と。天皇は此意外なる皇太弟の言に且つ驚き且つ喜び、直に其辭讓を勅許あり。皇太弟は内裏の佛殿に剃髪して沙門となり、恩賜の袈裟を身につけて、深き物思ひに沈みながら、吉野の宮に入り給ふ。左大臣蘇我赤兄臣以下五人、皇子を送つて菟道に至り別れ奉る。

世間では大海人皇子が吉野宮に入り給ふと聞き、『虎に翼して野に放つに同じ』と評した。以て當時御兄弟の間が如何に不和であつたかを推察し奉る可きである。

虎に翼して野に放つ

大海人皇子が山路を辿つて吉野に入給ふ時の御歌といふのが傳へられて居る。

『みよし野の、耳我の嶽に、時なくぞ、雪は降りける、ひまなくぞ、雨は降りける、其雪の、時なきがごと、其雨のひまなきがごと、くまも落ちず、もひつつぞくる、其山道を』

天皇崩御

之れによつて見ると、壬申擧兵のことは此時既に、皇子の胸中に畫策せられたものと見える。

十一月には大友皇子が、皇太子に立つた。越えて十二月三日といふに天智天皇は天下の大亂を前にひかへて近江宮に崩御あり、次いで皇太子御位に卽き給ふ。之を弘文天皇と申奉る。

弘文天皇卽位

十市皇女

さて、かの額田姫は一方に弘文天皇の寵幸をも受けたとある。弘文天皇は、大海人皇子と額田姫との間に生れた十市皇女を妃とせられたのであるから、母子共に幸せられた譯である。女詩人、額田姫は大亂の前に現はれる妖星のやうな女であつた。

十市皇女吉野に遁ず

斯くの如くにして、吉野と近江との離隔は日に甚しきを加へて行つた。流言は紛紛として行はれ、民心は惴々として不安と恐怖の色は天下を蔽うて物凄い光景を呈した。

此時にあたつて近江の朝廷が吉野に對して戰鬪の準備を開始したといふことを告げるものが續々として現はれた、大化の新制に不平を抱いて居た地方の豪族が、皆、太海人皇子に心を寄せたのである。最後に近江の宮中に在つた十市皇女（大海人皇子の女）が書を吉野に寄せて、朝廷の動靜を密告するに至り、東西の平和は遂に破裂した。

（五五）光明皇后

激戰二十日、戰線數十里

地方の豪族大海人皇子を擁立す

壬申の亂はまことに日本開闢以來の大戰爭であつた。戰鬪は千三百三十二年七月三日に始まつて、二十三日に至り弘文天皇が敗れて、粟津の山に自殺し給ひしに終つて居る。双方、數萬の軍を動かして、戰線は廣く美濃、近江の間に跨つたのであるから其激戰の狀を想察すべきである。

戰爭の原因はもとより兩皇子の爭位に在つた。けれども一度沙門となつて吉野の宮に隱れ給ひし大海人皇子が、東國に檄して立處に數萬の師を催すことを得たのは、大化の新制によつて從來の權利を奪はれた地方の豪族の不平が、野にみちみちて居たからである。之は、建武の新制に不平滿々たりし地方の大名が、尊氏を擁立して征夷大將軍としたのと同じ事情である。而して天武天皇（大海人皇子）がよく之等豪族の不平を和げて、十四年間の治績をあげ給ふことを得たのは爵位の制を定めて、巧に彼等の要求を滿足せしめたからである。

額田姫逐に大海人皇子に歸す

婦人の能力漸くにして暗黑面に向ふ

然しながら、讀者は之と同時に、美人額田姫のことを忘れてはならぬ。卓越せる詩才と、妖艶なる容貌とをふりかざして、多くの男子を纖手に翻弄した額田姫の放縱なる素行が、如何に此大戰爭の進行を助けたかと云ふ事を忘れてはならぬ。

紀元千三百三十三年二月、大海人皇子飛鳥の淨御原宮に卽位し給ふ。これを天武天皇と申し奉る。勝利者は當然の結果として額田姫を其掌中にをさめた。千三百四十六年、帝崩御の後、姫もまた無事に床の上でみまかられた。一世を騷がした多情多恨の女詩人も、其最後は極めて平凡なものであつた。

唯、額田姫に就いて茲に注意すべきことがある。

上古史に於いて婦人は歷史的事實の表面に立つて居た。彼女は政治的舞臺の正面に立つて、男子と其權力を競ひ、男子と其地位を爭うた。卽ち婦人が光明の世界に働いた。然るに此頃から、婦人は歷史の裏面に立つやうになつた。卽ち婦人の力が暗黑の世界に働くやうになつて來た。婦人の武器は唯一つの色である。唯一つの情である。色を翳し、情を衒うて暗中に飛躍するのが婦人の働く方面となつた。私達は既に研究

三女帝の御治績

佛教偏重の弊

安宿姫立后

した神話時代上古史を通じて額田姫のやうな模型をわが婦人に見なかつた。額田姫は平安朝に輩出した蓮葉な女房共の先驅をなしたものである。

齊明天皇（女帝、皇極）の後に女帝としては持統（四十一代）元明（四十三代）元正（四十四代）の御三方がある。何れも善臣の輔弼により、百事決を宸襟に取り、政綱は肅然として振つた。然るに、聖武天皇に至つては、佛法を偏重して天下の政事を忘れ、百姓の怨嗟を外にして或は造寺の大土木を起し、或は供養、慈善を營み、莫大の財用を濫費して顧みる所がなかつた。一人の乞食、一人の行路病者は救はれたけれども、大多數の人民が塗炭の苦みに落ちた。浮屠の教へは洽く行はれたけれども、寵嬖の僧尼女官は漸くにして朝廷の綱紀を亂した。

天平元年八月聖武天皇は夫人藤原安宿姫を立て、皇后とせられた。安宿姫は藤原不比等の第二女である。不比等は鎌足の次男である。鎌足の功を以て朝貴に列し、中納言として律令を選定し、持統、文武、元明、元正の四朝に歴仕して右大臣に進み年六十二歲にして薨じた。安宿姫は聖武天皇が、未だ皇太子にてましませし時、納れて夫

生彩燦々たる美人

立后の典範

人とせられたものである。體貌姝麗にして光明あるに似たりといふから、血色の好い色の透き透るやうに白い、生彩燦々たる美人であつたものと見える。

本邦帝室の憲典として臣の女を皇后に立てる事は出來なかつた。藤原不比等自身が與つて制定した大寶令にも、妃二員四品以上とありて、妃すら尙ほ親王でなければ取り給はぬ制度であつた。臣の女は夫人以下で、品とは云はず、位といつた。それを聖武天皇が、藤原氏の女を以て皇后とせられたのは全く從來の典範を一變せられたものであつた。

此事實は一面に於いて、鎌足以來、藤原氏が漸く朝廷に其勢力を恣にしつゝあつた事を語るものである。藤原氏の專横は先づ安宿姫（光明皇后）の立后となつて現はれた。

（五六）女性と信仰

左大臣長屋王誅せらる

藤原氏の專横に就いては長屋王の事件も全くその構陷であると說く歷史家がある。光明皇后が立つ五ヶ月以前、卽ち、天平元年二月といふに左大臣長屋王が謀叛のかどを以て誅せられた。これは藤原氏が、安宿姫を皇后に立てる上に邪魔ものであつたので、其黨人が天皇に讒したといふのである。成る程、開闢以來の典範を變更しやうといふ企てゝあるからそれ位の用意はあつたかも知れない。

立后の詔勅

されば安宿姫立后の詔勅には、此事が縷々辯解せられて居る。天皇は八月を以て五位、及び諸司の長官を宮中に召し、舍人親王をして、其詔勅を宣べしめ給ふ。其略に『皇朕、高御座に坐し初めしより今年に至るまで六年になりぬ。此間に天つ位に嗣ぎいますべき次てとして、皇太子侍りつ。是によりて其母といます藤原夫人を皇后と定め賜ふ。斯く定め給ふは皇朕が御身も、年月積りぬ。天の下の君と坐して年の緒長く、皇后いまさゝる事も一つの善からぬ行にあり、又天の下の政におきて、獨知るべきものならず。必ずも後の政あるべし。

（中略）年の六年を試み使ひたまひて此皇后の位を授け給ふ。然るも皇朕が時のみには有らず。難波高津宮に御宇めし、大鷦鷯天皇、葛城曾豆比古の女子、伊波乃比賣命皇后と御相まして食國天の下の政、治め給ひ、行ひ給ひけり。今めづらかに新しき政にはあらず本より行ひ來し跡事ぞ』云云

新しき例にあらず

とある。辯解大に力め給へりと申すべきである。要するに、朕が藤原氏の女を立てて皇后とするのは決して新しいことでない。昔、仁德天皇は葛城襲津彥の女磐之姫を立てゝ皇后とされた例もあるといはれたのである。（第三十四項參照）處が更家の說によれば、磐之姫皇后も實は臣下の女といふ可きでない。襲津彥は武內宿禰の子であつて、まだ姓さへも賜はらず、臣下の列についた人ではない。之は例の藤原不比等が、天下の物議を恐れて取り繕うた者であるといふ。何れにしても、大そうな辯解をされただけ弱味のあつた事には相違ない。

磐之姫と安宿姫

上流社會の流行

處が此光明皇后と申すのが、大そうな佛敎信者であつた。最も此上つ方の熱心といふものは何の程度に熱心なのか分らない。世には流行といふ者がある。足利氏の頃には禪學が流行であつた。禪學を知らぬ者は紳士の交際が出來なかつた。それはちやう

禪學と謠曲

と當節の謠曲のやうなものであらう。謠曲を知らなくては一寸官吏の交際が出來ないといふやうなもので、魯氏が禪學をたしなむだからというて、直に彼が其幽遠玄妙な哲理を捉へて居つたと思ふのは大盲斷である。偖光明皇后の信仰も何の邊まで行つて居たかといふ事になると頗る考へ者である。

光明皇后の勸發

唯、莊嚴美麗な大伽藍を建立したり。喜捨、供養に莫大の財用を費し給ふことは、何よりも御熱心であつた、聖武天皇が東大寺を建立して、熟銅七十三萬九千五百六十斤といふ大佛を安置し、諸國に國分寺を立てゝ五穀豐熟を禱つたのも實は皆此光明皇后が內にあつて、天皇を勸發し奉つたのであるといふ。何がさて長文の御詔勅を發して立てられた程の皇后である。其氣高く美しい御姿に對しては天皇も唯うつゝのやうに諸はれたものと見える。悲田、施藥の二院を置かれたのも皆此皇后の御覺召であつた。

大佛殿成る

紀元千四百十一年、東大寺の大佛殿が出來上つた時は、光明皇后最も御得意であつた。私に宣給はく、

『大像、大殿ともに備はれり。帝、外に勗めわれ內に營む、勝功鉅德加ふ可からず』

と自慢の御意は此御言によく現はれて居る。處がある夕暮の事であつた。閣裡の空中に聲があつて、

閣裡空中に聲あり

『后、誇ること勿れ、妙燭宣明、浴室澣濯せば其功尙ほいふ可からざるのみ』

と。皇后は其聲を聞いて且つ驚き且つ喜ばれた。直に溫室を建てゝ貴賤をして浴をとらしむとあるのは、藥湯の事でもあつたらうか。さらば當節の語で施藥救療といふのである。

施藥救療

施藥救療も結構であつたが、地方の人民は此時打續く大土木に、全く疲弊し切つて居たのである。

（五七）玄昉寵せらる

千人の垢を去らむ

光明皇后は浴室を建てゝかたく佛の前に誓はれた。『親ら千人の垢を去らん』と。帝

最後に癩病患者

も朝臣も共に眉を顰めて憚つたけれども皇后の御志は竟に之を如何ともする事が出來なかつた。

皇后の御業は既に九百九十九人に至つた。最後に參つた一人は見るも穢はしい癩病患者であつた。嫡體弥癩臭氣室に滿つといふので、流石の皇后もこれには少からず躊躇せられた。

頂はくば膿を吸へ

けれども皇后はまた思ひかへされた。今、千數に滿つるの際、これを避くるも恐れありと。其美しい御手をさし伸べて恐る〳〵病人の背を撫られた。すると病人の申すやう。

『僕、この惡疾をうけて瘡を患ふること久し。適々良醫あり敎へて申すらく人をして膿を吸はしめば除癒することを得べしと。而も世上大悲の人なく、沉痼此に至る。皇后無邊の悲濟を行ひ給ふ。願はくば意あらんか』

と。光明皇后もこれには驚かれたが一度佛の前に誓つた事とて今更、已むを得ず、病人のいふがまゝに膿を吸つて頂から踵にまで及ぼされた。吸ひ終つた皇后は、病人の耳に口つけてのたまふやう、

如來出現

『われ今いましが瘡を吸へり。唯、愼みて人に語ること勿れ』

と、御言葉未だ畢らざるに不思議や、光明輝き、靈香薫じわたり、今まで癩病患者と見えたる男は忽焉として、相貌端嚴なる如來の御姿となつて現はれ、妙光馥郁たるよと見るまに、搔き消すが如く見えずなつたといふ。

これは佛徒によつて傳へられた物語である。成る程佛敎の傳導といふことには隨分盡された皇后の事であるから、僧侶の眼から見れば、皇后は菩薩の權化とも見えたであらう。が、歷史は此皇后に就て、光明の半面のみを傳へて居ない。僧正玄昉を寵せられた如きは其一例である。

玄昉の不品行

玄昉は奈良興福寺の僧である。俗姓は阿刀氏、龍門寺の義淵法師に就いて道を修め、靈龜二年勅を奉じて唐に入り、智周法師に謁して相宗の蘊奥を究め、天平七年に歸朝したものである。此坊主が朝廷の寵遇になれて、沙門にあるまじき不品行を働いたので、世間では頗る評判が惡かつた。

法を行ふといふので屢々光明皇后に近侍し、『醜聲外に聞ゆ』とあるから、怪しからん坊主であつたに相違ない。此奴が藤原廣嗣の妻の美貌に思を焦して、夫が九州に赴任の留守、無體に挑みかゝつて酷く撥ねつけられた。

玄昉廣嗣の妻を挑む

藤原廣嗣は式部卿宇合（不比等の三子）の長子である。生れて魁偉、頭上の肉角寸餘とあるから、美男ではなかつたに相違ない。天平中、從五位下に叙せられ、太宰少貳に任ぜられた。其赴任の留守中に玄昉が妻を挑むだのである。廣嗣は男振りこそあまり好くはなかつたが、武藝といひ、音樂、歌舞の技といひ何一つ達しないものはないといふ程に立派な男であつたので、廣嗣の妻は玄昉の道ならぬ戀に心を動かすべくもなかつた。

廣嗣の妻

廣嗣大に怒る

廣嗣は太宰府にあつて妻の手紙を讀み大に玄昉の不義不德を憤つた。天平十年八月といふに彼は上表して政事の得失を議し、玄昉、眞備の二奸を彈劾した。今、左に其要點を摘錄して見よう。

（上略）出家の人の城市を去るは囹圄より出づるが如く、妻子を棄つるは枷鎖を脱するが如く、奴婢を蓄養し、酒を貼り、肉を屠り、耕耘商賣するを得ず。今僧正玄昉は、奴婢を驅使し、舍宅を興作し、財貨を聚積し、酒を釀し、肉を屠ること一に商賈の如し。浮屠の敎は焉にか在る。況んや僧正の職は佛法の綱紀なり。彼乃ち敢て華靡を好み、女色に耽り、諸の僧尼をして漸く邪路に陷らしむ。又私に邪律を制して僧尼を流放し、內に糖を舐むるの心を挾みて外に鹿を指すの威を耀かす。僧正の號焉にか在らん。

廣嗣玄昉と眞備とを彈劾す

（中略）從五位上、右衞門督眞備朝臣眞備は邊鄙の儒子にして斗筲の小人なり。海外に遊學して尤も長短に習へり。眞に所謂利口にして邦を覆すものなり。彼は玄昉を扶翼して朝政を濁亂せり、臣二盜を見るに契同比目せり。陛下の之を遇し給ふこと厚からざるに非ず、而して彼は猶貪慾にして厭くこと無し（下略）

滔々數千言

滔々數千言、宗敎政治の弊害は最も痛快に此一封の書に彈劾せられて居た。

（五八）玄昉と道鏡

廣嗣の誠忠容れらるゝ

廣嗣の上奏文は痛切に時弊を指彈し誠心誠意、社稷を憂へたるものであつたが不幸にして朝廷の容るゝ所とならなかつた。之は思ふに光明皇后が、玄昉を庇護されたものであらうと思ふ。聖武天皇の光明皇后を寵幸し給ふことは非常なものであつたものと見えて、皇后の言は一として聽かれざるなしといふ有樣であつた。

廣嗣の擧兵

廣嗣はもとより死を賭して玄昉、眞備の二奸を彈劾したのである。處が朝廷に於いて更に顧られずとあつて見れば、自殺か謀反か、然らざれば、手を拱ぬいて彼等の復讎をまつより外はないのである。廣嗣は絶體絶命の窮地に陷つて竟に筑紫に兵を擧げた。

朝廷兵を發す

朝廷は從四位上、大野東人を將軍とし從五位上、紀飯麿を副將軍として一萬七千の兵を附し、別に援軍として從五位上佐伯常人、從五位下阿倍豐麿等に隼人二十四人、軍士四千人を附して進發せしめられた。

廣嗣戰はずして誅せらる

藤原廣嗣は弟綱手と共に、九州の兵一萬五千を以て板櫃河に拒ぎ戰つたけれども勅使來ると聽いて戰意なく、肥前の値嘉島に走つて進士、阿部黑麻呂の爲に捕へられ、千四百年の十一月といふに松浦郡に於いて誅せられた。廣嗣の無念察すべきである。

其後玄昉はいよ〳〵皇后の寵を得て專横を極めた。天平十七年、勅命を被つて筑紫觀世音寺を建てる爲に下向したが其翌年頓死して果てた。世に傳へて廣嗣の祟りといふ。時人も廣嗣の精忠は認めて居たものと見える。又、眞備は勝寶の初め、貶せられて筑前守となり。更に肥前守となつたが、厚く廣嗣の墓を祭つて其祟りを恐れたといふ。

廣嗣の怨靈

孝謙天皇

かくて光明皇后は寶字四年六月、御年六十にして崩御となつた。皇后の御腹には孝謙天皇と、外に一人の皇太子がゐましたが、皇太子は神龜五年九月、御年二歲にして薨御となつたので、殘るは孝謙天皇御一人であつた。

孝謙天皇は御名を阿倍皇女と申し、皇子薨御の後立てられて皇太子となつた。皇女を皇太子に立て給ふことが此時に始まつた。また從來皇室の典範として、皇位は天皇

日本最初の皇太女

の崩御を以て終ること〻なつて居た。皇太子の幼くゐませるが爲皇母皇姑などが立つて其成長を待ち給ふ場合に於いてのみ、生前の讓位といふことはあつたが、男子の御身にして生前の讓位といふことは絶えてなかつた。然るに聖武天皇は、紀元千四百九年御年四十九歳の時、御位を阿倍皇女に讓つて親ら太上皇の御位に退かれた。皇女を皇太子に立て給ひしこと〻いひ生前の御讓位といひ、何れも光明皇后の隱れたる御勢力を示して餘りあるものがある。即ち聖武天皇は、臣下の女を皇后に立て給ふことと共に併せて三つの新しい範例を日本の皇室にのこされた譯である。

三つの新範例

僧道鏡といへば日本で圖太い坊主の開祖のやうにいはれて居るけれども、それより以前既に玄昉といふ破戒無慚の坊主があつて加持祈禱といふ名の下に光明皇后に近づき奉つたといふ事もある。孝謙天皇は其光明皇后の御女である。宗教政治は此時に至つて竟に神聖なる朝綱を紊るに至つたのである。

宗教政治の弊

尤も、孝謙天皇の嬖幸を受けたものは道鏡一人ではなかつた。道鏡より前に藤原仲麻呂といふ才子があつて頗る御意を得た。孝謙天皇は、名にしおふ光明皇后の御女であるから、もとより月花の御姿であつた。に相違ない。即位の時が御年三十三といふ婦人の盛りであつた。藤原仲麻呂は不比等の孫であつて武智麿の二子とあるから天皇とは從兄弟の御仲であつた。人となり聰慧にして才學あり、書史算術に通じ能く政治に勉むといふので當節ならば一代の新知識、先づ以てハイカラといふ方であつたらう。

藤原仲麻呂寵せらる

仲麻呂は紫微中臺(皇后宮職)の司令であつて中衛大將を兼ね、心を用ひて天皇の崇佛を贊翼し奉つた。されば天皇の寵幸は非常なもので、仲麻呂は常に御側を離れず、朝廷の樞機に與つたとある。

(五九) 仲麻呂の嫉妬

田村邸御幸

天平勝寶四年には、孝謙天皇東大寺に御幸ありて、歸途、藤原仲麿呂の田村の邸に御立寄あり。其時の御もてなしが餘程御意に召したものと見えて、其後度々仲麿呂の邸に御幸し給ひ、遂に呼んで田村宮と稱せらるゝに至つた。

硬骨の朝臣續々致任

斯くの如く仲麿呂が異常の寵を受くると同時に硬骨の聞え高かりし朝臣は續々任を辭して野に下つた。式部大輔眞楯は病と稱して出仕しなかつた。左大臣橘諸兄（葛城王）も致任した。

皇太子再選の議

七年五月天武天皇の皇子、新田部親王の子、道祖王を立て、皇太子と定られた。處が此道祖王が先帝（聖武）の御喪中をも憚らず、淫縱の行ひが多かつたので、天平寶字元年三月に廢せられて皇太子再選の議となつた。

仲麻呂專橫

此時右大臣藤原豐成の一派は道祖王の兄、鹽燒王を立つ可しと主張し、攝津太夫文屋珍奴の一派は天武天皇の御孫、池田王を立つ可しと主張した。處が胸に一物ある藤原仲麻呂は進み出でて、

『臣を知る君に若くはなし。子を知る親に若くはなし。唯天意の擇ぶ所に任せん』

といふた。其處で孝謙天皇は仲麿の言についでのたまふやう。

『宗室の內舍人、新田部の兩親王は最も長せり。故に前に道祖王を立しに勅敕に順はずして淫縱なりき。然らば卽ち舍人親王の子の中を選ぶ可し。然れども船王は闇房修まらず、池田王は孝行闕くる事あり。鹽燒王は太上天皇責むるに無禮を以てし給へり。唯大炊王は未だ長壯ならざれども過惡を聞かず。此王を立てんと欲す』

と、竟に皇太子の位は大炊王に落ちたけれどもこれは初めから天皇と仲麿呂との間に打ち合せのあつた事である。大炊王と申すのは、仲麻呂が翼戴した皇子であつて、自分の子眞從といふ者の寡婦を妃として田村宮に奉置したものである。

大炊王と仲麻呂

斯くて皇太子が定まつてからの仲麿呂の勢ひは實に恐ろしいもので紫微內相の官に就き、內外の諸兵事を掌り、位祿はすべて大臣に准じ、天皇の嬖幸は益々以つて盛んなものであつた。

奈良麻呂の反抗

玆に於いてか橘諸兄の子、參議奈良麻呂が仲麻呂を除いて廢太子を立てんと謀るに至つた。而も其陰謀は山背王の密告によつて露はれ、仲麻呂は一打網盡して其有力なる反對黨を除去する事を得たのである。

淳仁天皇卽位

天平寶字二年の八月に天皇は位を皇太子に傳へ給ふ。之を淳仁天皇と申し奉る。天皇が御位に卽かせ給ひしは一に仲麻呂の力であつたことは前に述べた通りである。さ

惠美押勝

れば天皇は仲麻呂を惠美押勝と呼んで、孝謙天皇にも劣らざる程の御寵愛であつた。六年の二月までに累進して正一位に敍せられ、近江の淺井高島二郡の鐵穴を賜り、一門皆顯官に列し富盛にして驕奢日に甚しく、楊梅宮の南に私邸を起し、樓を構へて禁中を瞰下したとあるから、其僭上を極めた態を察すべきである。

藤原良繼殺さる

處が盈つればかくる世のならひである。仲麻呂は淳仁天皇に仕へてかく厚き寵遇を被つて居たが思はぬ處に思はぬ强敵が現はれた。それは彼の專横を惡むで密に彼を除かんと謀つた藤原良繼か、否、否、良繼は一擊の下に倒されて到底仲麻呂の敵でない事を示した。仲麻呂の强敵は、容顏豐麗なる僧道鏡其人であつた。

道鏡更に寵を得

これより先、孝謙天皇は出家して尼となられ給ひ、河内の僧、道鏡を召して内道場に入れ仲麻呂にかへて厚き嬖幸を給ふに至つた。仲麻呂の寵は衰へざるを得なかつた。仲麻呂は燃ゆるが如き嫉妬の情を以て道鏡を見た。淳仁天皇は屢々太上皇を諫めて道鏡を排斥しようとされたけれども、其熱心なる御寵愛は之を如何ともする事が出來なかつた。

仲麻呂叛く

孝謙天皇重祚

仲麻呂は不平と嫉妬とに燃えて不軌を圖るに至つた。八年九月仲麻呂は戰敗れて近江の高島郡に誅せられ妻子從兵三十四人と共に首を京都に傳へられた。此役に鹽燒王も連累として斬に處せられた。船王、池田王もそれ〴〵流罪に處せられた。而して淳仁天皇は初めから道鏡を惡むで太上皇と不和に在したので十月に至り廢せられて淡路に配流せられた。これが日本に於ける天皇配流の始めである。

これから孝謙天皇の重祚となり、道鏡跳梁の時代となる。

（六〇）色魔行者

紀元千四百二十五年に孝謙天皇が重祚となつて年號を神護景雲と改め給ふ。御年正に四十九歲とある。されば道鏡を召されたのは四十二三の御時からと見てよろしい。後に之を稱德天皇と申し奉つたが茲には其煩を避けてヤハリ孝謙天皇と申し奉る事とする。

犬養姉女、忍坂女王石田女王

元年八月に舍人親王の孫、和氣王が不軌を圖つて山背の山中に誅せられ、其愛人、益女もまた連累として絞殺せられた。次いで三年、從五位上、縣犬養姉女といふ官女が、忍坂女王、石田女王等と天皇を厭魅したといふ嫌疑を以て、遠流に處せられた。處が光仁天皇の御時に至つて和氣王の男女が復籍を許され、姉女も本位に復せられ、

丹比乙女

三女を密告した丹比乙女が反つて位記を奪はれて居る處を見ると、之等の事件は全く誣告に出でたものと見える。當時は例の道鏡が太政大臣として嬖幸を專らにして居た最中とて、其誣告もヤハリ道鏡の手の者から出たのであらうといふのが、後世史家の齊しく想像する處である。

道鏡の修行

道鏡は弓削氏であつて、河内の人である、年少にして僧となり、玄昉と同じく義淵僧正を師とし、葛城山に入つて、如意輪法、宿曜法を修行して、功驗著しと稱せられた。次手に話して置く、此頃は佛法興隆の結果として怪しい行者が盛んに地方を横行した。役行者であるとか久米仙人であるとかいふのが皆此頃の修行者で、大に世の中を騒がしたものらしい。天平以後は朝廷も其害毒を見るに忍びなかつたものと見えて、屢勅令を以て、異端幻術を禁制せられた。道鏡も此種の妖術を以て盛んに愚民を惑はしたものと見える。

道鏡保良宮に參る

孝謙天皇は道鏡を召して內道場の禪師とせられたが、天平寶字五年に、近江の保良宮に御幸して御不豫の事ありし時、道鏡が祈禱を承つて、御病床近く看侍したのがもとで、大そう御意にかなつてしまつた。

神佛の行者と婦人

私は曾て或る雜誌に『色魔』の事を論じ神佛の行者は、女性を魅して其心と其肉とを奪ふ一種不可思議な力を持つて居ると說いた事がある。東京にも今青山隱田の某を筆頭として大小無數の行者が跳梁して居るが、一度彼等に近接したが最後、如何に貞操正しき婦人と雖、必ず征服されて仕舞ふといふ事である。玄昉も、道鏡も此種の妖僧であつたに相違ない。

太政大臣禪師

仲麻呂の亂が平定して後、出家の天子には出家の大臣あるべしといふ理由の下に道鏡が大臣禪師となつた。天平神護元年には太政大臣禪師となり、文武百官をして拜賀せしめ、僧尼の度緣には必ず道鏡の印を用ふる事とした。十月には天皇河內國弓削寺

に御幸し、佛を禮し、樂を奏し、道鏡に綿一千屯を賜うた。弓削寺は若江郡に屬し道鏡出生の地である。

基眞衆民を誑かす

二年の九月に至つて、山階寺の僧基眞なるものが佛舍利出現せりと稱して衆民を誑かした。道鏡は之を利用して、天皇に奏し、大赦令を發し、十月、舍利を迎へて法華寺に安置した。道鏡はよく僧徒を敎導して舍利を感得せしめたといふ功によつて法王の位を授けられ、基眞は法參議に叙し、其師圓興は法臣の位を授けられた。同時に詔勅があつて、法王の月料は供御に准じ、法臣は大納言、法參議は參議に准せしめられた。實に畏れ多い事の限りである。これからといふものは、道鏡鸞輿に乘り、服食一に天皇を擬し、大政巨細となく其決を執つたといふ。

道鏡驕僭の極

神護景雲三年の正月には、道鏡西宮の前殿に居り、大臣以下皆拜賀の禮を行つた道鏡の弟の淨人といふ者が卑賤から身を起して八年の間に從二位大納言となり、一門の中、五位に叙せらるゝものが十人の多きに達したといふ。

戰慄すべき宗敎政治

戰慄すべきは宗敎政治の弊である。日本の朝廷が早くも此宗敎政治の弊を脫する事を得たのは何よりの幸福といはなければならぬ。『未來』といひ『絕對』といふやうな思想が政治の根抵に浸潤しては堪つたものでない。何というても政治と宗敎の接近ほど危險なことはないのである。

道鏡宇佐八幡の神託を詐る

道鏡は驕僭の極に達した。濫りに人民を役し、伽藍を營み、しきりに奢靡をすゝめ奉つた。怨嗟の聲は野に起らざるを得なかつた。

（六一）　嬖幸朝綱を紊る

神護景雲三年、太宰の神主、習宜阿蘇麻呂といふものが道鏡に媚び、孝謙天皇の常に宇佐八幡を崇敬し給ふに乘じ、畏れ多くも其の神敎なりと詐つて奏上に及んだ。

『道鏡をして皇位に卽かしめ給はゝ、天下自ら太平なるべし』

と。茲に於いてか道鏡は得意の鼻をうごめかして心私に期する所があるものゝ如くであつた。前項に述べたやうな事情から、孝謙天皇の道鏡を寵し給ふことは非常な

ものであつたが、さて皇位をといふ事になつては流石に躊躇されたものと見える。事體は甚だ重大である。聖武天皇が臣下の女を皇后に立て給ふといふにつけても、辯解の詔勅は大そうなものであつた、まして皇位を臣下に讓るといふやうな事は日本として容易な問題でない。其處で、朝議は更めて宇佐八幡の神敎を仰ぐことゝなつた。天皇は和氣清麻呂を床下に召して宣給ふやう、

天皇軫念

和氣清麻呂勅命を奉ず

『朕、昨夜夢に八幡の神使來り、大神汝の姉の尼、法均に憑りていふ所あらんとすと告げ給へり。朕之に答へて法均は弱軟にして跋渉に勝へざれば清麻呂を以て之に代へんといふと見たり。汝宜しく往きて神託を受くべし』

清麻呂の祖先

と、清麻呂は床下に伏して聖意のある所を察し奉り、かしこみ、かしこむで勅命を承つた。

清麻呂は備前國藤野郡の人であつた。垂仁天皇の皇子鐸石別命の後である。命の曾孫に弟彦王といふ人があつて應神天皇の時、戰功によつて吉備磐梨縣を賜はつて子孫代々こゝに家居して、清麻呂に至り召されて近衞將監となつて居たが計らずも此たび

の大命を蒙つたのであつた。

道鏡清麻呂を威壓す

清麻呂が將に奈良を發せんとするに際し道鏡は目を瞋らし劍を按じていふやう、

『大神我をして位に卽しめんと欲す。其天皇の夢に憑りて使を請ふ所以は蓋し之が爲なるべし。汝宇佐に至りて神敎を奉じ、我をして欲する所を得せしめば則ち汝に大政大臣を授け、委ぬるに國政を以てせむ。若し我が言に違はゞ則ち重刑に處せむ』

路眞人清麻呂を激勵す

と。斯の如くにして清麻呂は一方から激しい不義の威壓を受けると同時に一方からは亦、強い強い正義の激勵に遭ふた。道鏡の師なる人に路眞人豐永といふ人があつた此人が清麻呂を勵まして語るやう。

『道鏡若し天位に登らばわれ何の面目を以て其臣たるべけんや。二三子と共に今日の伯夷たらんのみ』

清麻呂發す

と。清麻呂も深く此言に動かされた。彼の決心は此時に於いて成つた。

既にして清麻呂は宇佐の八幡宮に着いた。大神、清麻呂にかゝりてのたまはく、

『わが國家開闢以來君臣の分定まれり。臣を以て君とすること未だこれ有らざる所なり。天津日嗣は必ず皇緒を立てよ、無道の人は宜しく早く掃除すべし』と。清麻呂は歸つて神敎の儘奏上に及んだ。道鏡は烈火の如くに憤つたけれども仕方がない。神敎を矯めて朝廷を欺罔するといふ名の下に、清麻呂を貶して因幡員外介と爲し、姓名を別部の穢麻呂と改めて大隅に流した。

道鏡赫怒

清麻呂の配流

姉の法均も同罪に座して備後に配せられた。

道鏡はなほ人を遣はして途に清麻呂を殺させようとしたが、雷雨に妨げられて果さなかつた。孝謙天皇も、清麻呂の精忠はよく認めて居られたもの見えて、俄に勅使を以て大赦の命令を下された。參議藤原の百川が其忠烈を憐み封戸二十を割いて清麻呂に給した。

此事件の顚末によつても明かなるが如く孝謙天皇は一方に道鏡の專横はよく認めて居られたが、嬖幸はまた格別の事であつたものと見えて、道鏡の寵は其後も更に衰へなかつた。神護景雲四年の二月には河内の由義宮に幸せられた。由義は弓削であつて、

寵幸依然

道鏡の故郷である。孝謙天皇は此處で病を得て奈良の宮に還御となつたが、道鏡は日日左右に侍して潛に簒奪を謀つたとある。同年の八月に至り、天皇は五十三歳にして遂に崩御となつた。

孝謙天皇崩御

道鏡も先帝の御厚恩に思ひ至つては流石に悲哀の情に堪なかつたものと見えてその陵下に廬して御冥福を祈り奉つたとある。而も帝の崩御によつて道鏡の地位は俄然顚覆した。

藤原百川起つ

（六二）法均尼

孝謙天皇、崩御と共に久しく蟄伏して時機の到るを俟つて居た參議藤原百川は勃然として其頭を擡げて來た。彼は疾風迅雷耳を蔽ふに遑なきが如き勢ひを以て、天智天皇の御孫、施基皇子の子、白壁王を立て皇太子とした。

年號は寶龜と改められた。

道鏡訴へらる

坂上苅田麻呂は道鏡の奸計を知つて之を朝廷に訴へ奉つた。皇太子も道鏡の横暴はかねて認めらるゝ所であつた。乃ち令してのたまはく、

『聞くならく道鏡法師竊に棘を秖めんの心を挾むこと日久しと。陵土未だ乾かずして奸謀發覺す。是則ち神祇の護る所、社稷の佑くる所なり。今先聖の厚恩を顧みて法によりて刑に入るゝを得ず。故に造下野國藥師寺別當に任じて發遣す。宜しく之を知る可し』

道鏡貶せらる

と。又宇佐八幡の神官習宜阿蘇麻呂を多褒島守として配し、弓削淨人及び其三子を土佐に流した。同時に和氣清麻呂及び法均尼は召還されて舊位に復し、清純潔白なる日本歴史に危ふく一の汚點を印せんとした道鏡簒奪の一件も茲に全くめでたき結末を見るに至つたのである。

法均尼

最後に清麻呂の姉、法均尼の事に就いて述べて置く。

清麻呂の忠節は兒童走卒も之を知つて居るが、姉、法均尼の功績に至つては未だ多く人に知られて居ない。

廣蟲落飾

法均は名を廣蟲というて初め從五位下葛井戸主に嫁し溫良貞順の噂が高かつた。孝謙天皇に信愛せられて正六位下を授けられた。天平寶字六年に孝謙天皇が落飾せられた時、廣蟲も薙髮して名を法均と改め、尼位進守太夫を授けられた。

法均天皇を諫め奉る

天平寶字八年に藤原仲麻呂、(惠美押勝)が反して誅に伏した時、連及して斬に當るものが數百人の多きに上つた。其時、法均尼は天皇を諫めて、死一等を減じ、悉く流刑に處せしめた。之によつて見ても。天皇が如何に此尼を信じて居られたかゝ分る。

姓葛木首を賜ふ

亂後、天下大に飢疫して、餓莩道に横たはるの慘狀を呈した時、法均は人を派して野に捨子を求め、盡く收容して自分の養子としたが、其數八十三人の多きに及んだ。因つて姓、葛木首を賜はつたといふ。當時の政治といふものは實に斯くの如く危險極まるものであつた。佛敎の名によつて大慈大悲を行ふものはドシドシ叙勳せられたが大寺造營の爲に人民の饑餓に瀕することは少しも顧られなかつたのである。それは兎に角として法均尼は益々天皇の信任を固くし、神護、景雲二年には、從四位の封戸、

法均同罪の理由

竝に位祿位由を賜はつた。

清麻呂が道鏡の怒りを貸つて竄に遇うた時には法均も同罪に座して備後に流された宇佐八幡から歸つて神託を奏上したのは弟の清麻呂であるから、法均が同罪に處せられる譯はない筈である。けれども當時の事情をよく考へて見ると、道鏡の奸計を先づ第一に妨害しようとしたのは法均らしい。何となれば孝謙天皇が清麻呂に下された詔勅の中に、大神、尼、法均にかゝりて云々といふ語がある。皇位を臣下が嗣ぐといふことは斷じてあり得べからざることであるといふ事を先づ天皇に吹き込むだものは、此法均尼ではあるまいか。さてこそ天皇の詔勅といひ、清麻呂が其選に當つたことい

法均の誠忠

ひ、思ひ合はされる節々である。

清麻呂と法均

果して然りとすれば、清麻呂と此尼との間には如何なる打合せがあつたかも知れない。清麻呂が死を決して宇佐八幡の神託を奏上したのも、實は、姉の力が與づて大なるものがあつたのかも知れない。私は如く信ずる。

又、孝謙天皇とても皇位を道鏡に讓る覺召は全く無かつたのである。其處へもつて

黒幕の大忠臣

來て、かね〴〵深く信じて居る法均が強く其非を主張するので、遂に法均の弟、清麻呂を召して、大命を下されたのではあるまいか。道鏡が怒つて法均を還俗せしめ之を備後に流したのも、此邊の意趣があつたものであらう。

法均復位

して見れば、私達は將に汚瀆せられんとした日本歴史を危機一髪の間に救ひ出した黒幕の大忠臣として先づ此尼を推さなければならぬ。

其後、光仁天皇（白壁王）の時に至り法均尼は弟の清麻呂と共に配所から召還せられて從四位下を授けられ、典藏（吐納係）となり、正四位上に累進し、典侍となり延曆十八年年七十歳にして卒した。

遊行女婦の事

（六三）地方に於ける娼婦

采女が墮落して殆ど娼婦と撰ぶ所なきに至つたことは既に『賣淫史の一節』と題する項下に於いて之を述べた。奈良朝の末から平安朝のはじめにかけて、地方にも立派な

賣笑婦人が現はれた。『萬葉集』の第八卷に『遊行女婦』の歌として

君が家の花橘はなりにけり
花なる時にあはましものを

遊行女婦の歌

同じく『萬葉集』に遊行女婦、蒲生娘子の歌として

雪島の巖に立てるなでしこは
千代にさかぬか君がかざしに

蒲生娘子

といふ歌が載つて居る。何れも地方に於ける娼婦の歌である。遊行女婦は卽ちうかれめである。あそびめである。

檜垣の嫗

『大和物語』に檜桓の嫗とあるが之も遊行女婦のことであらう。筑紫白河の生れで歌をよくした。太宰少貳の藤原興範といふ人が道に迷つて、とある賤が家に水を所望すると、一人の白髮の嫗が出て來てうやうやしく水をすゝめながら、

年經れば我が黑髮も白河の
みづはぐまでに老いにけるかな

と詠じた。興範も嫗の心を不憫に思うて衣服を贈つて慰めたといふ。

遊行婦佐夫流

又、『萬葉集』には、遊行婦佐夫流に惑溺した、尾張少咋の歌が載つて居る。佐夫流は天平、寶龜年間の遊女で、之も歌が上手であつた。大伴家持が越中守として赴任した時に、此少咋が佐夫流と好い仲になつて、ふざけ散らしたのを家持が見るに見かねて『紅はうつろふものぞつるばみの慣れにし衣になほしかめやも』元木にまさるうら木なしといふので、大に忠告した。支那の刑法で妻がある上に妻を重ねると、一年の徒刑に當るぞとまで喝したけれども少咋は更に聽き入れる樣子もなかつた。かくするうちに少咋の妻が突然都から下つて來て少咋の胸倉を取つて『貴郎はな、貴郎はな』といふやうな騷ぎになつた。『左夫流子がいつきしとのにすゝかけぬ、驛馬下れり里もとどろに』といふのがそれである。さてこの遊行婦女といふものゝ風俗はといふと、全く零碎の記事で詳しくは知る由もない。

少咋の放蕩

少咋の妻來る

就中、宇多天皇の時に現はれた白といふ遊女は最も有名である、此女は名門の出で品位も高く舞曲にも長じ、殊に和歌は其最も特意とする所であつた。最も當時の所謂

遊女白

、、、うかれ女と稱するものは多く權門勢家の出で、上は一天萬乘の君にも近き奉り下は大臣大將から國司、郡司の寵愛を受けたものであつた。

白女は父を大江玉淵といひ、丹後守にして朝散太夫、祖父の音人といふは參議まで經上つた人であつた。却々當節で申さうならば立派な縉紳の令嬢である。玉肌氷膚、花をあざむく姿と來ては、上達部、殿上人などがうつゝをぬかしたのも無理はない。

攝津の江口

さて此白といふ遊女は攝津の江口といふ處に住むで居た。宇多天皇が鳥飼の院に御幸して遊宴を設け給ひし時、數多のうかれめが參り侍つた中に、白といふものゝ容貌が倫を絶して居た。白が其處でスツカリ天皇の御意にかなつてしまつた。天皇は白を御座近く召して『汝は何ものゝ子ぞ』と問ひ給へば白、『大江玉淵の女にて侍る』と答へ奉る。天皇更に信じ給はず、『玉淵は歌人なり。汝まことに玉淵の子とあらば和歌を善くすべきなり。試みに鳥飼といふ文字を詠み入れたる歌を上れ。然らば朕まことに汝を信せん』とのたまふた。白は御聲の下に、

大江玉淵の女

淺みどり甲斐ある春にあひぬれば
霞ならねど立ちのぼりけり

と詠じた。

天皇はいたく白の歌才をめで給ひ、御袿一重と袴とを賜はつた。さて又、座に有とある上部達、四位、五位、に向ひ此女に物ぬぎて施さゝらむ者は座より立ちぬべしと宣給ふに、諸臣みな我れ先にと物を與へたので、纒頭は積むで山の如く、二間にあまつたとある。諸臣にはまことに以ておきもじさまの次第であつた。

纒頭山の如し

かくて帝は南院の七郎君といふに此女を預け給ひ、彼が申さんこと院に奏せよ院より賜はせん物も、かの七郎君より遣さん。すべて彼に佗しき目を見せぞ』と仰せられたといふ。餘程御意に召したものと見える。

白女宇多天皇に寵せらる

『大和物語』にある河尻遊宴のことは其後であらうと思はれる。白女が、

河尻遊宴

濱千鳥とびゆく限りありければ
雲立つ山をあはとこそ見れ

と詠で、帝から被物を賜はつたといふ。『古今集』に其歌が乘つて居る。

命だに心に叶ふものならば
何か別れのかなしからまし

と、恁んな調子で、盛んに大宮人を手玉に取つたものと見える。

小觀音

關白、道長が出家の後七大寺に參詣して歸途、河尻にさしかゝると昔馴染の小觀音といふ遊女が出て來て袖を引いたといふこともある。ヤハリ白のやうな女であつたらうと思はれる。

上總の珠名乙女

（六四）婦人蟄居の風起る

當時上總の珠名乙女といふのは非常に名高い美人であつたものと見える。旅人は道を忘れて招かざるに其門をおとづれ、近隣の浮氣男は自分の女房を逐ひ出し、財產をあげて此女の一笑を買はんとしてやつて來る。されば女の方でも、身を忘れて迎へ、しなだれかゝつて戯れたとあるのは、純然たる娼婦であつたに相違ない。

傀儡子

また平安朝に入つては、地方に傀儡子といふものがあつて、酒席に歌をうたひ人形を廻しかねて淫を鬻いだ。別に定まつた家を持たず旅から旅へと渡り歩いて『眉を愁ひ粧に啼き、腰を折り、齒笑をなし』たものである。途に行人旅客に逢うて、一宵の佳會を約するといふやうなこともあつた。上は王公の貴きを知らず。宰相の權威に怕れずとあるが、これは今日の藝妓も同じことである。東は美濃、三河、遠江等の黨を以て豪貴となし山陽、播州、山陰、馬州の士黨を中となし、西海黨を下とした。其名稱は千載、萬歲、小君、孫君等すべて百三あつたといふ。要するにこれは後世の旅藝妓の類であつたものと見える。

旅から旅へ

讀者諸君は既に宮內省の女官として徵收せられた采女の墮落を見た。又、勿體なくも至尊の玉體に近き奉り、月卿雲客に接して纏頭を得るうかれ女の嬌態を見た。更に或る地方に土着し、若しくは旅から旅へと渡り歩いて、國司、郡司をはじめ百姓、町人を選ばず、其要求に應じて生活の資を得んとする私娼の存在を見た。奈良朝の終から平安朝にかけて、賣淫制度の發達したことゝいふものは實に驚嘆に價するものが

賣淫の風大に起る

唐風模倣と賣淫制度

ある。賣淫制度は、私有財産制度の發達に伴ふものである。神武天皇以來、私有財産の發達に隨つて婦人が漸次男子の私有物と化しつゝありしことは既に項を追つて述べた通りである。唯、上古の婦人が比較的自由にして社會的にも、政治的にも男子と等しく其力を伸べることを得たのは、未だ此新制度を擁護せんとする新道德が生れなかつた爲である。處が、大化の新制により、大寶令の發布により、約百二十年間の唐制模倣により、支那文明の影響が漸く一般的となつて來た。賣淫制度は支那文明の影響によつて更に急激なる發達を遂ぐるに至つたのである。

婦人交際社會より遠ざけらる

平安朝に入ると婦女子の地位が、大化の新政以前と著しく異つて來た。それは良家の子女が公の交際社會から全く遠ざけられて仕舞つたことである。女子塾居の奇習は今でも支那、朝鮮に行はれて居るが、日本では此頃から其風習が上流社會に傳はつた。良家の子女は決して男に顏を見せるものでない。男に顏を見せるのは男に操を許す時であるといふ風が、漸く一般的になつて來た。平安朝の文學に於いて、『見る』といふ文字が、眼で見るといふより以上の意味に用ひられて居るのは全く支那文明の影

『見る』即ち『通ず』

貴婦人の外出

響である。

上流の婦女子が室内に塾居して御簾を隔て、几帳を垂れて顏を隱したのも之が爲である。外出する時も牛車の下簾に意を用ひて透見をされる事をさへひどく耻かしがつた。それでもなほ萬一の場合を憚つて檜扇といふものを用意して居た。思はぬ處で、急に男に出遇つたりなどすると此檜扇といふものをかざして其顏をかくした。當節でもモウ一歩といふ處でチヨイとパラソルを傾けられる事がある。恁んな調子で、平安朝の女は全く公の活動を止められてしまつた。

パラソルで顏を

之を大化の新制以前に比べて見ると實に驚く可き變化である。悍馬に御し女軍を率ゐて戰陣に立つた勇士の妻を思ひ、歌垣に立ち男と手をとり交して戀を語つた乙女を思ふと實に驚くべき相違である。交際社會の花であつた女といふものが、全く『貞操』といふ一室の中に閉ぢ籠められてしまつたのである。茲に於いてか交際社會は酒席の間に斡旋する或る特種の專門的婦人を要求するに至つた。此要求に應じてうかれめといふものが生れて來たのである。

時代は藝妓を要求す

神崎、蟹島、江口

當時攝津の神崎、蟹島、江口のあたりに群居して專ら酒席の間に斡旋したうかれめといふのは、全く、此社會的要求に應じて生れた專門的の賣笑婦人であつた。

（六五）檀林皇后

橘嘉智子

光明皇后、孝謙天皇に次いで、檀林皇后が、日本の朝廷に於ける女性の佛敎擁護者として現はれた。檀林皇后は橘清友の女であつて、御名を嘉智子と申された。

皇后は平安朝に於ける代表的の美人であつた。資性寛和、容貌絶妙、手を垂るれば膝を過ぎ、髮地に委すとあるから美しい處は通り越して、寧ろ神々しい御姿であつたに相違ない。

手膝を過ぎ髮地に垂る

手の長いといふ方は何んなものか知らないが、髮の長いといふ事は平安朝に於いて慥に美人の一資格として缺く可からざるものであつた。これは前項に述べた婦人が顏をかくすといふ風俗から生れたものである。室内に在る時でも御簾のかげにかくれたり、几帳を垂れたりして顏を見られる事を避ける。外出の時は勿論、不意の場合には檜扇をかざすといふので、自然容貌以外のものが尙ばれるやうになつて來た。綠なす黑髮が丈にあまつて地を曳くといふのでなければ話せないことになつて居た。

檜扇

髮美人の末摘花

『源氏物語』の末摘花といふのは、青白い顏の思ひ切つて長い、象鼻の先が赤くたいれた令嬢であつたが、髮が美しいので美人といふ評判が專らであつたのである。其處で、光源氏が、中將を出し抜いて手に入れたまではよかつたが、きぬぎぬの薄あかりにすかして見てビックリしたといふのもそれである。

嘉智子は嵯峨天皇が未だ親王にていました時、妃として御寵愛を蒙つた。卽位の後夫人となり封一萬戶を賜ひ弘仁の初年從三位に進み、同五年といふに尾張丹羽郡の田廿四町を賜はつたといふに徵して其勢力を察し奉るべきである。

壯嚴佛の如し

さて、この皇后の御姿の氣高くうるはしかつたといふ事は前にも述べたが、尙ほくはしくいへば、餘程輪廓の正しい、端正な御かたちであつたものと見えて、弘仁六年七月七日の夜に嵯峨天皇が、夢に夫人嘉智子瓔珞を著けて、壯嚴佛の如しと見られた

天子皇后の母

といふので、改めて皇后に立てられた。最も此皇后が未だ橘家の姫にてゐませし頃、法華寺の尼、禪雲といふものが、后の姿をつく〴〵と見參らせて、其臂を把り、『娘子後まさに天子皇后の母となるべし』といふたとある。皇后の御氣品は正に天成であつたものと見える。

皇后御落飾

仁明天皇、淳和天皇は此后の御腹である。淳和天皇が立つに及んで、尊んで皇太后と申し、封一千戸を奉じた。承和三年には奈良、京都の空地二百三十町を奉じて朱雀院に充て、明年更に近江の荒田六十四町を奉じて、後院に充てた。承和九年には遷つて冷泉院に御し、嘉祥三年仁明天皇、御不豫の事あるに際し、憂念のあまり剃髪して尼となられた。然るに其年の三月仁明帝崩じ、后もまた仁壽二年の五月を以て其後を追はれた。御年六十五、深谷山に葬り奉つた。

檀林寺建立

后はもとより熱心なる佛教の信者であつた。檀林寺を建立して比丘尼のよく律を持するものを養はれた。仁明天皇が五百戸を喜捨して供養に充てられた。之が檀林皇后と申す御名の起りである。后はまた其御弟右大臣氏公と相はかつて學館院を設け、諸

義空長老の來朝

子弟に經書を誦習せしめられた。世の人が漢の鄧后に比して其德を稱へ奉つたといふ。

慧蓼法師が海を渡つて法を唐土に覓むるに際し、太后は金幣を附して有道の僧を聘した。慧蓼は齊安國師の上首、義空長老を得て歸朝した。太后は長老を檀林寺に迎へて參究大に努められたが、或る時、

もろこしの山の彼方に立つ雲は
　こゝに焚く火の煙なりけり

丈夫の氣息あり

といふ歌を詠むで其悟りを述べられた。義空長老は其歌の意味を聞いて『東域深悟の人、丈夫の氣息あり』と感嘆したといふ。

中將姫

當時佛教が如何に婦人社會の信仰を博して居たかは有名な中將姫の傳說に就いても知られる。中將姫は聖武天皇の權臣横佩豐成の女である。母は藤原氏、姫は長谷觀世音の申子とある。天平十九年八月十八日を以て生れ、翌る年の誕生の宴には自ら筆を執つて、

初瀨寺救世の誓を現はして

女も法の國にむかへん

といふ一首の歌を詠むだといふが之はあまり當てにならない。三歳にして母を亡ひ、九歳にして禁中に召され笋を奏して大に帝の御感にあづかつた。繼母の照日といふものが常に之を妬み、屢々姫に危害を加へようとするけれども果さない。十五歳にして再び召されて御前に笋を奏したが其技絶妙とあつて三位に叙し中將の名を賜はつた。

笋を奏して御感に入る

繼母はいよ〳〵姫の才色を妬み、終に人をして姫を雲雀山に誘殺せしめようと計つたけれども其人、殺すに忍びず、姫と山中に潛むで歸らない。姫は實母を追慕して、

雲雀山の悲劇

まれに來て訪ふも寂しき松風を
常にや苦のしたに聞くらむ

現世音出

といふ一首の歌を詠むだ。繼母この由を聞き良心の苛責に堪へず、病と稱して家に歸り遂に悶死して果てた。姫いよ〳〵世の無常を感じ、寶龜元年遂に當麻寺に入り、剃髪して善心尼と號し後妙法と改めた。翌年七月十日、觀世音、彌陀佛と共り來り姫の爲に蓮の曼荼羅を作る。天應元年三月十四日、二十九歳にして逝つた。話の大部分は後世佛家の作爲になるもので之を以て其時代の婦人を律することの無理はいふ迄もないが、當時上流の家庭を支配した佛教の勢力は是に依つて朧ろげながら之を窺ふことが出來る。

佛教と上流の家庭

仁明天皇に次いで文德天皇が立ち、嵯峨上皇が崩ずるに及んで、橘逸勢の一件が起つた。

（六六）橘逸勢の女

親政の厄運

光明皇后、孝謙天皇が引續き嬖幸の爲、朝憲を紊つた結果は、玆に親政の厄運となり、藤原氏攝政の基を開くに至つたのである。

承和元年、嵯峨天皇の第二皇子正良親王が、淳和天皇の御讓りを受けて御位に卽かせられた。御年二十四、之を仁明天皇と申し奉る。仁明天皇は其御子を措きて淳和天皇の皇子恒貞親王を皇太子に立てられた。英主を擇むで位を讓ることは殆ど桓武天皇

以來の常例となつて居た。恒貞親王は當時世に聞えたる英明の君であつた。

藤原順子

處が、仁明天皇には前の左大臣、藤原冬嗣の女、順子の生み奉つた皇子道康親王といふのがあつた。冬嗣は、藤原氏の一族中、屈指の人材であつて、嵯峨天皇在位十四年間の赫々たる文政は重に此人の功に因るものと稱せられて居る。其處で恒貞親王は藤原氏の權勢を憚るのあまり、再三位を道康親王に讓らうとされたけれども、許されなかつた。

形勢不穩

恒貞親王御擧兵の噂

斯くて嵯峨、淳和の二上皇が御在世の間は何事もなくして經過したが、二上皇とも相ついで崩御となつた後は形勢頓に一變して、天下は何となく不穩の狀況を呈して來た。

承和七年、橘逸勢、東宮帶刀、伴健岑等が皇太子恒貞親王を奉じて東國に入り兵を擧げんとすと傳ふるものがあつた。冬嗣の子大納言藤原良房は命を奉じて其檢擧に着手した。六衞府は嚴重に宮門を守備した。右兵衞少將藤原富士麿は兵を率ゐて首魁の家を圍み、盡く之を捕縛した。

橘逸勢の配流

連累を以て縛に就くものが頗る多かつた。

左大辨、正躬王等が首魁を糺問したけれども橘逸勢は頑として其罪に服さなかつたよつて姓を非人と改め死一等を減じて伊豆國に配流する事となつた。

此時に逸勢の女が父を慕うて泣く泣く其後に從うた。護衞の使者が度々叱つて去らしめようとするけれども女は何うしても歸らうとしない。晝は止まり、夜のみ歩いて見えがくれに父の後を追うた。

逸勢の女

濱名湖岸の露

處が逸勢は遠江國、板築驛に至つて病みついた。板築驛は今の西濱名の本坂といふ處で、濱名湖の支湖、猪鼻湖の岸にある。此頃の東海道は濱名湖の北岸に沿うて氣賀三方原を濱松に出たものと見える。其處で女は警護の士の前に出で泣いて父の看病を許して呉れと賴んだ。鬼のやうな獄卒どもゝ女の孝心に感じてそれを許した。女が命にかへての看病も其甲斐なく、逸勢は空しく逆旅の露と消え失せた。女は泣く〳〵其屍を收めて厚く之を葬り、其傍に廬を結むで誓念苦至すること十年の久しきに及んだ。

曾ては錦閨にひまもる風をいたむだ都乙女である。其緣なす黑髮を切つて、名を妙仲と稱し、わびしき湖畔の廬に行ひすました十年の春秋の、如何に寂寥を極めたであらうか、十年の後、赦免に遇ふて妙仲は都にかへつた。其喪を負ふたいたましい姿を見て心ある人は皆袖を絞つたといふ。

妙仲都に上る

橘逸勢は隷書の名人として有名である。清友の子、奈良麻呂の孫である。當時宮門の榜題は多く此人の手になつたといふ。延曆の末、遣唐使に隨つて唐に入り、唐人から橘秀才と呼ばれた。歸朝して從五位下に叙せられ、承和七年但馬權守に叙せられ、嵯峨上皇崩御の事ありて後、謀叛のかどを以て捕へられたのである。

隷書の名人

承和の疑獄が落着して後は天皇更に道康親王を立てゝ皇太子となし給ふ。親王は冬嗣の外孫であつて良房の甥である。冬嗣薨じて後は良房直に右大臣に拜せられ、藤原氏專權の時代が茲に始まつた。

藤原氏の跳梁始まる

仁明天皇は在位十七年にして崩御し給ひ仁壽元年皇太子、道康親王御位に卽き給ふ。之が文德天皇である。右大臣藤原良房外叔の威を振つて、萬機を處斷し、太政大臣に任せられた。文德天皇の皇后には良房の女、明子が入つて立つた。ツマリ從兄弟同志の御仲である。後に染殿后と申すのが此皇后である。

染殿后

太政大臣良房の專橫

（六七）在原業平

嘉祥三年の三月といふに染殿后は惟仁親王を生み奉つた。之が文德天皇の第四の皇子に當る。良房は直に親王を私邸に於いて鞠養し奉ることゝした。藤原氏の專橫察すべきである。

紀靜子

處が此時既に文德天皇には惟喬親王と申す立派な御嫡子がゐました。御母は紀名虎の女にして靜子といふた。惟仁親皇の生れた時には既に四歲であつた。天皇の御寵愛殊の外深く、立てゝ皇太子となさんとの御志もあつたが、何しろ良房の權威が強いので果し給はざりし間に、良房の方では少しも早くといふので惟仁親王を皇太子に立てゝ仕舞つた。時に生後正に九ケ月、之が後の清和天皇である。

惟喬親王小野に隠れ給ふ

惟喬親王は藤原氏を憚つて山崎、水無瀬宮に閉居し給ひ、吟詩詠歌に滿腔の不平を忘れようとせられた。後、叡山の麓なる小野の宮に退隠されたのも、藤原氏の眼がうるさかつたからであらう。在原業平、紀有常なんどいふ人が屢々其御閑居を訪ふて、和歌唱和に御心を慰め奉つたのも、唯事とは思はれない。

在原業平

在原業平といふ人は、日本の代表的美男子として『昔男』といへば、女たらしの名人のやうに思はれて居るが、實は大の熱情家で却々覇氣のあつた人らしい。天智天皇の皇子、阿保親王の子であつて紀有常の女を妻とし、貞觀年中右馬頭に任せられ、勅を奉じて、鴻臚館に勃海の使人を饗應したこともあるが、要するに時代の大不平兒であつた。舅の有常も寧ろ失意の人で、兩人大に馬が合つたものと見えて、屢々小野宮に惟喬親王を訪れ奉つた。

水無瀬の櫻

一年、水無瀬の櫻の木の下に酒宴を設けさせ給ひし時、業平は、

世の中に絶えて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

と詠むで御感にあづかつた。かりくらして黄昏となつた。興はなほ盡きなかつたものと見えて、それから、交野を過ぎ筵を天の川といふ所にうつして又酒を始めた。業平親王に盃を進め奉れば親王『交野をかりて天の川のほとりに至るといふ題にて一首參れ』と宣給ふ。業平直に、

交野の春

狩り暮らしたなばたづめに宿からん
天の河原にわれは來にけり

と詠み奉つた。皇子は幾度となく其歌を口ずさむで居られたが、一寸返しが出來ない。

紀有常皇子に代り奉りて

紀有常が代り奉つて、

一年に一度來ます君までは
やどかす人もあらじとぞ思ふ

と。それから皆打つれて宮にかへつたがさて夜更けるまで飲みつゞけて何時果つべしとも見えなかつた。斯くて主の皇子がいたく醉ひて入り給ひなんとする時はちやうど十一日の月が山の端にかくれむとする時であつた。業平、

あかなくにまだきも月の隱るゝか
やまのはにげて入らずもあらなむ

夜闌にして興盡きず

紀有常が又皇子に代り奉りて、

をしなべて峰もたひらになりなゝむ
山のはなくばつきもいらじを

幼帝卽位の始め

惟喬親王が業平等と恁んな會合を續けて居られる間に、太政大臣良房の專横は益々募つて來た。文德天皇は在位九年にして新成殿に崩御となつた。御年三十二歲、良房は直に其孫に當れる九歲の惟仁親王を立て、翌年を以て貞觀と改元した。之が日本に於ける幼帝卽位のはじめである。

藤原高子

此時良房は又々自分の娘を淸和天皇に納れて外戚の威を固めようとしたけれども生憎女の子が無かつた。其處で兄長良の女、高子を養つて之を五條后（仁明天皇の后）の宮に置き、機を見て入內させようとした。

然るに、在原業平が入內に先だつて此高子と通じてしまつた。之に就いて說をなすものがある。業平はもと勤王の志篤き男であるから、之が他の場合であつたならば決して斯かる不都合なことはしない。之は唯良房の專横を惡むの餘り敢てしたのである。卽ち、高子の操を破つて入內を阻害しようとしたのであると。思ふに此說は『伊勢物語』に、

業平、高子と通ず

『昔東の五條の太后の宮おはしましける、西の對に住む人ありけり。それを本意にはあらで、志深かりける人行きとふらひけるを五月の十日ばかりの程に隱れけりある所はきけど人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほうしと思ひつゝなんありける』

本意にはあらで

散文的な戀

云々とあるのに出でたものであらう。『本意にはあらで』といふ意味を爾ういふ風に解釋して見れば成る程爾うかとも思はれる。が、業平は由來、不羈放縱な感情家である。或る策略の爲に美しい乙女の情を弄び、自分の情を賣るといふやうな散文的なことが果して出來たであらうか。甚だ疑はしい。

（六八）業平の妻

閑麗玉の如き美男

在原業平が藤原高子と情を通じたのは高子がちやうど十八九の花ならば雷の漸くほころびかけた時、業平が三十二三の男ざかり、閑麗玉の如き顔に青髯のあざやかなる頃であつた。業平が忠義の爲に高子の操を破つたなどいふのはあまりに忠義を馬鹿にしすぎた話である。そんな忠義なら誰でもする。

高子を染殿に遷す

之はやはり不羈奔放な詩人業平と、艶麗花の如き良房の養女とが互に身も世も忘れての戀と見た方が隱當である。二人の關係はやがてパッと人の口の端に上つた。良房も今更のやうに驚いたけれども既に出來てしまつた者は仕方がない。早速二人の仲を割いて、高子を染殿にうつし、專ら天皇の寵幸を迎へようとして苦心した。

帝に長ずること正に八歳

貞觀五年帝が良房の染殿に御幸された時がちやうど御年十四歳、高子が廿二歳、かくて貞觀八年には良房の望み通り高子が入つて女御となつた。帝に長ずること正に八歳である。此年の八月、天皇良房に命じて政事を攝せしめ給ふ。藤原氏攝政の基が茲に開かれた。

業平の妻紀氏

斯くて業平が花から花にとぶ胡蝶のやうに、戀の蜜を追うて走りつゝありし間も、彼の妻紀氏は冷めたい空閨を守つて少しも恨むの色がなかつた。西洋の諺に『戀の神は地球より古く、嫉妬は利益の觀念より前に生ず』といふことがある。私が既に說いた須世理姫（神話時代）に於いて、磐之姫に於いて、大中姫に於いて、讀者諸君は上古の婦人が如何に猛烈に夫の浮氣を嫉妬したかといふことを見られたであらう。彼等は嫉妬を以て女の權利と見るかの如く猛烈に其夫に肉薄した。而も讀者が今此紀氏の傳說を聞くに及んでは殆ど、同じ國に於ける同じ人種の出來事とは思はれない程であらう。然り、如く時代は距つたのである。如く社會は變化したのである。

嫉妬の變遷

業平妻を疑ふ

業平が河内の或る美人の處へ通つて居る時であつた。一日、後庭からひそかに妻の部屋を覗いて見た。業平は妻を疑つたのである。妻があまりに溫順であるのに疑を抱いたのである。人は自分にうしろめたい事がある時に限つてよく人を疑ふものである。自分の亂行を何故妻が嫉妬しないのか、かくし夫でもあるのではあるまいかと疑つて

紀氏の貞淑

見たのである。

紀氏はいま更け行く月に對し、蘭燈の下にひとりさびしく琴をしらべて居た。やゝありて彼女は其纖細い手を胸にあててヂット幽かなる灯を見つめた。感慨に堪へないもの丶如くである。やがて其美しい瞳には涙の露が宿つた。

紀氏燃ゆるが如き嫉妬を忍ぶ

風ふけばおきつしら浪たつた山
夜半にやきみのひとり行くらむ

晩年の高子

業平は妻のやさしい心根に動かされざるを得なかつた。紀氏にも嫉妬の情はあつたのである。彼は唯、女なるが故に其燃え立つやうな思ひを忍んで居たのである。女たるもの忘れても持つまじきは美男の夫である。此說が全然信ずべきか、否かは別とするも私達は此物語によつて女が嫉妬をつゝしまなければならぬ、男の道樂は男の働きであるといふ支那思想が當時既に斯くの如き『貞女』を生んだといふ事を知らなければならぬ。

さて業平の戀人であつた藤原高子は淸和天皇の皇后となつて正五位下に叙し、陽成天皇、貞保親王、敦子內親王を生み、十一年從四位下に進み、十三年從三位に進むだ。

御年十歳の天皇

貞觀十八年天皇御年二十七歳にして位を陽成天皇に讓り給ふ。陽成天皇は御年十歳にして卽位し給ひ、御母高子を尊むで皇太夫人となし、中宮と申し奉た。元慶六年には更めて皇太后と崇め奉たが。寬平八年に至つた、東光寺の僧善祐を寵幸せられた爲に廢せられた。此時の御年が正に五十五歳とあるから、隨分晩年の御關係であつた。延喜十年三月御年六十九歳にして薨去となつた。

歡樂の都に落莫の心

（六九）業平の東下り

胸中悶々の情を酒と女と歌とにやつて、纔に其不平を忘れようとした。一代の風流兒、在原業平は、歡樂の都にも落莫の心をおきかねたものと見えて、『東のかたに行くべき所やある』と、『得意とありける人、一兩人を伴ひて』住みなれた京をあとに、行方定めぬ東の旅に迷ひ出た。

三河の國八ッ橋

三河國、八ッ橋といふ所は、河が氾濫して、水が蛛手となつて居る。其處へ橋が八つ渡してあつたので八ッ橋といつたとある。朔來の十二橋といつたやうなものであつたらうと思はれる。時は暮れ行く春、青葉若葉に日の光うらゝかな頃であつた。業平は從者と共に、とある木蔭に憩うて晝餉をしたゝめた。

かきつばたの花

ふと見ると、近い水のほとりにかきつばたが滋く生ひ出でゝゆかりの色を水に浸した風情、何ともいはれぬ趣であつた。從者がかきつばたといふ五つの文字を句の頭にするて旅の心を詠じ給へといふので、業平は直に、

かきつばたの歌

からごろも
きつゝなれにし
つましあれば
はるばる來ぬる
たびをしぞおもふ

とよんだ。何れもこれを聞いて涙を流さぬはなかつたといふ。

宇都谷峠

駿河國うつの山といふは名にしおふ險阻であつた。絡石、鶏冠木、生ひ茂りて道は暗く、物さびしき事いふばかりなかつた。何れも心細きことに思ひながらたどり行くに一人の修行者に行き會うた。見ると、京でしたしく見知つた人であつた。僧は業平を見て且驚き、且あやしみ『かゝる道をば、如何で御座すぞ』と問ふに、業平もなつかしきことに思つて、京なる人のもとへ一首の歌をことづてた。

山中人に遇ふ

駿河なるうつの山べの現にも
ゆめにも人にあはぬなりけり

苦さ寂寥

と、行くへ定めぬ漂浪の人、黄蘗の嘗めるとも其寂寥の苦きには及ばなかつたであらう。かゝる山路に行き惱むで都の人に邂逅うた業平の心は何んなであつたらうか。

五月の晦日といふに富士の麓にたどりついた。業平は高根の雪を見て、

時しらぬ山は富士の根いつとてか
かのこまだらにゆきのふるらむ

行く〳〵業平は關東の野に分け入つた。茫々漠々たる榛莽は空から、空に連つて、

みすゞ、たか萱は、道行く馬の背を蔽ふばかりである。

　それはさみしい夕暮であつた。

　一行は渺漫たる大河のほとりにたどり着いた。武藏國と下總國との境とある。淡く濁つた水は、華やかな夕雲の色を湛へて、聲もなしに流れて居る。業平は惆悵として都の空を顧みした。眼もはるかなる尾花の原の末は夕照の空に連つて居る雄渾なけしきを見ては『限りなくも遠く來にけるかな』と思はざるを得なかつた。

赭顏銅の如き渡守は『早く船に乘れ、日暮れぬ』と促した。

　此大河を渡つて、又何時の日に再びなつかしい都にかへる事ぞと思へば、供の者もそゞろに佗び思ひであつた、旅のあはれは泌々と身にこたへた。

　船は岸を離れた。河波はヒタ〳〵と寄せた。水の上には大さ鴨ばかりなる白い鳥が悠々と浮いて居た。嘴と足とが赤かつた。

　京には見なれぬ鳥であつた。業平は渡守にあの鳥を何と呼ぶぞと問うた。渡守は都鳥といふと、事もなげに答へた。

さみしい夕暮

限りなくも遠く來にけるかな

都鳥

都鳥！

『都』といふ其一語がまたしても一行の心をそゝつた。

　名にしおはゞいざ言問はん都鳥

　わがおもふ人はありやなしやと

業平は靜かに詠みいでた。船の人はいづれも涙に袖をぬらさぬはなかつた。

業平の東下りは、惟喬親王の內命を受けて勤王の士を募るためであつたといふ學者もある。宇都谷峠の歌といひ、隅田川の歌といひ、皆人を尋ねるの歌であるといへば尠うかとも思はれる。

業平は元慶五年五月二十八日、年五十六にして憂悶のうちに其生を辛へた。

いざ言問はん

勤王の士奈邊にありや

（七〇）小野小町

花の色はうつりにけりな徒に

美人といふ普通名詞

わが身世にふる眺めせしまに

と、『百人一首』の歌をよめば、さゐだ下髪のいたいけなお嬢さんでも直ぐ『小野小町』といふ名を口にする。此固有名詞は、日本の辭書が之を『美人』といふ普通名詞として採錄しなければならぬ程、如く一般的であるけれども、さて、小町の素性、小町の生涯はといふ事になると、如何な歴史家も、如何な國文學者も一寸首を傾ける。爾うして答は何れも一樣である。

素性の知れぬ女

小野小町ほど素性の知れぬ女はない。

出羽の產に非ず

小町は采女であつて出羽の郡司小町良實の女、數十年京に住み、老後、本國に歸つて死し、八十島に葬られたといふ説もある。前項に述べた日本一の美男、在原業平が東北に下つた時、小町の墓に髑髏の歌を詠むだといふ話もある。して見れば代表的美人たる、小野小町は生れつきのズウズウ辯で、甚だ御座のさめた譯であるが、之は時代を無視した妄説で殆どとるに足らぬ。

或は參議、小野篁の孫であるともいふが、之とても當にはならぬ。

承和頃の美人

時代はといふに、僧正遍照、小野眞樹、文屋康秀などに歌を贈答した事があるといへば、先づ承和（仁明天皇）貞觀（清和）頃の美人であつたに相違ない。衣通姫や光明皇后や、檀林皇后のやうに容貌を形容したものが傳つて居ないから、何んな型の美人であつたか、一寸想像に苦しむ譯である。が、前にもいうた通り、髮の長いといふこと、丈の高いといふこと、聲の美しいといふことは當時の美人の缺くべからざる資格であつたといへば小町ともいはれる女に、それが缺けて居たらうとは思はれぬ。平安朝にあつては女の目尻の下つたのを大さう美しく愛らしいものゝやうに書き立てゝ居る本もあるから、容貌の方は今日と大分標準が違つて居たかも知れない。何れにしても承和の頃が花の盛りで頻りに朝廷の紳縉を飜弄したものと見える。

目尻の下つた美人

良峰宗貞

先づ僧正遍照の傳記に就いて見ると遍照は俗名を良峰宗貞といひ、仁明天皇に仕へて頗る眷寵を得、承和十二年從五位下に叙し、左兵衞佐となり、ついで備前介となり、近衞少將を兼ね、藏人頭に補せられ、從五位上にまで經上つたが、仁明天皇の崩御を悼むのあまり出家して僧となつた。

石上寺にて

小町とは藏人時代から歌を詠みかはしたといふ事がある。小町が石上寺に參籠した時其側にあつて一心に經を讀む人があるので誰ならんと供なる人をして見せしむると簑を着た立派な法師であつた。小町さてこそ少將(貞宗)ならんと、

苔の衣

岩の上に旅寢をすればいと寒し
苔の衣をわれにかさなむ

といふ一首の歌を贈れば、僧正立どころに『世を脊く苔の衣は唯一重貸さねば疎しいざ二人ねむ』といふ返歌を詠むだといふ有名な話。これは稍々信ずべきものかと思ふ。

文屋康秀に跳く

小町が三河の椽、文屋康秀に秋波を寄せたのは其後のことである。康秀は字を文琳といふて其頃有名な歌人であつた。貞觀二年三月廿日と云に中判事に任せられ、元慶元年正月十五日に山城の大椽となつた。其三河の椽に任せられたのは此間の事である。康秀が小町に寄せて『あがたみ(田舍見物)にはえ出たゝじや』と云ひかけたのに對し、小町が、

詫びぬれば身を浮草の根を絶えて
誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

敗入の多い地方官

といふ色氣タップリの返歌をして、浮名を流したのは稍衰へての後であつたらうと思はれる。お平の長芋然たる殿上人を散々な目にあはせた揚句、少し骨の硬い地方官に好奇心を起したといふ譯でもあらうか、最も當時の女は一般に收入りの多い地方官を喜んだといふ形跡もあるから、小町も年をとつて稍世帶じみて居たのかも知れない。

深草少將の事は訛傳

深草少將のことは眞實であらうか。逼照、康秀などの事蹟を考へて見ると何うしても受け取れない。深草少將は大納言良平の長子であつて名を義宣といひ深草の里に住むで居た。小町に戀慕して心のたけをかき口說いたけれども、小町が何うしても許さない。美貌を誇つて大に高く止まつて居たのであらう。百夜通ひつめて眞の情を見せたならば貴郎の戀を容れませうといふので、少將大に喜び九十九夜まで通ひつめたが、百夜といふ晩に雪に凍えて死んでしまつた。時に元弘三年とある。小町が元弘三年頃盛りの人であつたとすると、康秀との贈答が五十前後の事となつてしまう。深草

謡曲に現はれたる小町

紀貫之の評

少將のことは何うしても信じられない。

卒塔婆小町といふて、小町が年老て後零落して乞食となつたといふ説もある。之は『玉造小町壯衰書』によつたものであらうが、玉造と小町とは全く別人と見る可きであらう。其他謡曲には小町を題としたものがいろ〳〵ある。何れも實説として取るに足らぬ。紀貫之は『古今集』の序に小町の歌を評して、

『小野小町は古の衣通姫の流れなり。愁なるやうにて強からず。云ゞよき女の憐めるところあるに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし』

といふて居る。

女流文學者

（七一）才媛輩出

圓融、華山、一條の御代にかけて女流文學者の輩出したことは歴史上重要な事實となつて居る。一條天皇が『朕は人を得たること延喜、天暦の世にも勝れり』と宣給うたせめての心遣り

女權旺盛の時代か

歴史を知らぬ妄論

御言の末には、關白道長の專横を憤らせ給ふ御意も含まれて居る。政道は藤原氏の爲に妨げられて、思ふやうに行かなかつたけれども、一時に多くの人才を得たのがせめてもの心遣りであるといふ意味をほのめかされたものであらうと察する。

就中、紫式部、清少納言、和泉式部、小式部、赤染衛門、伊勢大輔、出羽辨、少辨馬内侍、高内侍、江侍從、新宰相などが、和歌に文章に最も世にもてはやされた。

然しながら、この一時に多くの才女が現はれたといふことも一方から考へて見るとヤハリ藤原氏が私權を擅にした結果である。或る『婦人問題』の研究者は當時を以て女權の最も伸張せられた時代であるといひ、紫式部や、清少納言の文才を例として、婦人の能力といふものは先天的に男子に劣るものではない。婦人が解放されさへすれば、何時でも紫式部や清少納言のやうな才人が輩出するといふた。之は西洋の本ばかり讀んで日本の歴史を知らないから起る妄論である。成程婦人の能力が先天的に男子と異つたものでないといふ事は、今日、人類學者、考古學者の説の一致する所であるが、藤原氏專權の時代を以て婦人の權力の最も伸張された時代であるなどといふのは、滑

純然たる玩弄物

稽極まる說である。若し婦人の能力といふ問題を論せんとならば、學者は少くとも大化の新制以前の社會、殊に日本の神話時代に着眼しなければならぬ。唐制の模倣以來、日に日に其地位を失墜して來た日本婦人は、藤原氏の全盛時代に至つて、全く男子の玩弄物として取扱はるゝに至つたのである。

藤原氏の後宮政略

二百年の間に十六帝を動かし奉る

讀者は既に在原業平と戀に陷つた藤原高子を、養父の良房が無理に引き割いて清和天皇の皇后にすゝめ奉つた事を見た。此高子は天皇よりも八歳の姉であつた。良房以來、藤原氏は歷代に跋扈して太政大臣となり關白となり、幼冲の主上を擁立し、何れも己が女を後宮に入れて家門の榮華を誇り、政權を專らにしたのである。文德天皇(良房より、後冷泉天皇(賴通)に至る二百年の間に藤原氏は合せて十六帝を動かし奉つた。而も其中光孝天皇を除く十五帝は盡く藤原氏の出であるといふに至つては彼等の橫暴もまた驚くべきではないか。

既に天子が九歲、十一歲といふ御年であつて見れば、太政大臣なり關白なりの職に在るものが、私權を恣にするに都合のいゝのは知れたことである。けれども、又一方から考へて見れば、其御幼冲といふ點につけ込むで事をはかるものがあつたら、それこそ大變である。如何にそれが自分の孫であつても、既に九五の位に卽かせられた以上、君臣の分は自ら明かでなくてはならぬ。綸言汗の如しで、一度、御命令のあつたことは何としても執行しなければならぬ。危險といへばこれ位危險なことはない。それには御側に侍し奉る後宮がシッカリして居なければならぬ。其處で藤原氏がすゝめ奉つた後宮は多く天皇よりも少し年上である。一條天皇の後宮、定子宮は關白道隆の女であつたが、天皇が十一歲にてましませし時、十四歲にして入內した。道隆が薨じて道兼が關白の職に就いたが七日にして薨じ、弟の道長が關白となるに及び、更に己の女彰子を納れて中宮となし、皇后定子宮と並び居らしめた。彰子は上東門院といふて寵貴、後宮を傾け、其勢は飛ぶ鳥も墜すばかりであつた。流石の關白道長も、この上東門院には頭が上らなかつたといふ。

年上の後宮をすゝめ奉つた理由

定子宮と彰子宮との對立

女房の選擇

斯くの如くにして藤原氏は後宮に其基礎を固めると同時に、其侍女、所謂女房に才物を選ぶの必要を感じた。彰子は長保元年從三位に敍し、入內して藤壺に居つたが『侍

女數十人一時の才色を選拔』したとある。

畸形的發展

一條天皇の時に才媛の輩出したのは藤原氏が後宮政略として女を利用した結果である。されば、女性としての彼等の發展もまた頗る畸形的であつた。

獵官運動

女權の天國か

（七二）中宮の勢力

才色絕妙といふ女房が數十人局を連ねて中宮に仕へた。其中宮が朝廷の勢力の中心といふのであるから、地方官にでも取立てられようといふ野心のある男はセッセと局に通つて、女房連の御機嫌をとつたに違ひない。

獵官運動をするものゝ呼吸は今も昔も變りはない。

が、此現象を以て平安朝は女權の天國であつたなど思ふのは、飛んでもない考へちがひである。成る程、彰子宮のやうに帝の寵幸を一身にあつめ、道長の威光を背に負ふて時めいた人は不幸ではなかつたらう。けれども、其勢力はもともと暗黑の勢力である。光明の勢力ではない。父權の爲、絕對的に意志の自由を束縛された結婚である。

不幸極まる結婚

女の生涯は正に男の野心の犧牲に供せられたのであつた。

幼い帝、幼い后、惟る雛のやうな御契り、繪に見るやうな御語らひにも人知れぬ涙が籠つて居たのではあるまいか。

定子宮の御失意

中宮彰子宮の時めき給ふにつれて、皇后定子宮は夕日の影うすれ行く御姿であつた。美子內親王を御懷胎の頃は憂鬱疾をなしたとあるから、先づ今日のヒステリーであつたに相違ない。伊周（后の御兄）が大層心配して加持祈禱をしようとしたけれども一時の高僧が皆道長の思はくを憚つて參らなかつたとある。長保二年十二月美子內親王を生むを崩御となつた。御年二十五。盛りの花の嵐に吹き散らされた御慘しさであつた

不幸な婦人の地位

が、之は、皇后の御後だてたる關白道隆が早く世を去つた結果である。女の地位は決して大化の新制以前より幸福でなかつた。

されば、それに仕へ奉る女房とても同じことである。男を馬鹿にしたといへば隨分馬鹿にしたやうなものであるが、これは今日の藝妓が、堂々たる男子を馬鹿にするとい

男子を馬鹿にした後宮の才女

人間としての力は覺束ないもの

ふ意味に於いて男を馬鹿にしたのである。如何に男を戯弄したからといふて、結局自分が男のなぐさみものになつて居たのでは駄目である。

彼等は中宮職の次官位はテンデ相手にしなかつた。御簾の外を通る上達部、殿上人は屢彼等の口にかゝつて赤い顔をしなければならなかつた。廊下や庭先を通行する小舍人や、下司の氣の利いた小綺麗なのを呼びとめて、散々に思はせぶりをする。男の方がのぼせ上つて袖でも引く日になると、『某の下司はあられもない妾に無體の戀慕』など、其筋へ屆け出る。これをしも女が男を馬鹿にすると云ひ得べくんば、當時の女房達は皆男を馬鹿にして居たのである。

既に當時の女房達が男を馬鹿にして居たといふことを知つて、紫式部の『源氏物語』や、清少納言の『枕草紙』を讀む人は動ともすると平安朝は男がカラ駄目で女の能力が非常に發達して居たなどゝいふ妄斷に陷るのである。處がそれは大なる誤りで、其能力といふものは極めて畸形的に發達して居たのである。文章や歌は上手であつたが人間としては頗る覺束ないものであつたに相違ない。ヤハリ、男子の玩弄物に過ぎなかつたのである。紫式部は貞操も正しかつたなどいふが、それは淫奔な女房達と比較していふたことで、實際何んなものであつたか。

腕を揮ふには絶妙の時代

其證據には當時の所謂才媛といふものゝ中に一人として政治の舞臺に其辣腕を揮つたものがないではないか。一方には皇后定子宮がある。又一方には中宮彰子宮がある。彰子宮の後には關白道長があつて指もさゝせなかつた樣であるが、同じ藤原氏の中に非道長黨がないのでもなかつた。當時の所謂才媛といふものが實際人間として偉かつたならば、詩歌文章以外、此方面にも少しは發展しそうなものである。當時の朝廷は婦人の暗中飛躍に最も適當な情勢であつた。

到底下田歌子に及ばず

私は思ふ、紫式部は偉いの、清少納言は偉いのといふけれども、其才能の極めて部分的な處から推して考へると、人間として到底今の下田歌子程に行かなかつたのではあるまいかと。

（七三）清少納言

文章から想像した清少納言の人柄

清少納言は、肥後守、清原元輔の女である。皇后定子宮に仕へて眷寵をうけたといふから、彰子宮に仕へた紫式部とは勢ひ競爭の地位にあつたに違ひない。

其著『枕草紙』は文辭遒健、筆鋒鋭利にして隨筆文の上乘と稱せられて居る。其思想、其才氣によつて其人となりを察すると、隨分お轉婆の方であつたらうとは何人も想像する所であるが、前項にもいうた通り、人としては大して飛び放れた處があつたとも思はれぬ。

柄にない嬌羞

清少納言の出仕は三十近い年頃と思はれるが、それでもひどく羞含むだもので、日中には殿中を歩くことも出來なかつたといひ、雪もよひのドンヨリとした薄暗い日を選むで、はじめて中宮（其頃は未だ皇后に立たず）の御前にまかり出たとある。

宮の御兄、大納言藤原伊周卿は却々人の惡い性であつたものと見えて、時々宮へ參つて清少納言をからかつた。思ふに此新參者が、妙に固くなつて、御簾の蔭にかくれて居るのがをかしかつたのであらう。散々ひやかした揚句、命のやうにして居る檜扇まで取り上げて、この繪は誰が書いたなどといふので流石の清少納言も縮み上つてしまつたとある。前にもいうた通り、扇は此頃の女の生命であつた。それをとり上げてしまつたといふのであるから、先づ以て惡戯けといふ方である。

伊周の惡戯

之によつて見ても清少納言は美人でなかつたといふことが分る。如何に人の惡い伊周卿でも、花ならば蕾といふ年配のウツトリするやうな美人が、處女らしい嬌羞をおびて小さくなつて居るのを側へよつて散々からかつた揚句、檜扇まで取り上げてしまうといふやうな亂暴な事は出來なかつたであらうと思はれる。思ふに三十近い、分別顏の女が、白粉などをくつゝけて柄にない嬌羞を作つて居る。それがひどくをかしかつたのではあるまいか。

三十近い女房

そゝけ髮の清少納言

普通ならば、恁んな場合、女は其丈にもあまる黑髮を顏へふりかけるのであるが、清少納言の髮は生憎にそゝけ髮であつたので、袖屏風を作つたとある。髮もよくはなかつたものと見える。

けれども恁んなことから清少納言も漸々お轉婆化して行つたものと見える。

香爐峰の雪

或る日、雪の降つた後で、皇后が、

『香爐峰の雪は如何があるべき』

と宣給うた。すると多くの侍女のうちから清少納言がひとり進み出でて無言のまゝ簾を擧げた。これは清少納言が『白氏文集』の中にある『香爐峰雪撥簾看』といふ句を思ひ出したのである。此ことがパッと噂に立て、才女の名がいよ〳〵高くなつた。

伊周失意

皇后はいたく其才華を愛で給ひ、奏して內侍となさうとせられたが、伊周卿等の一件に妨げられて沙汰止みとなつてしまつた。

前にも述べた通り定子宮は關白藤原の道隆の女であつて、伊周の妹である。正暦四年、道隆病篤きに際し、政權を其子伊周に委ねて、省中のことを攝行せしめた。伊周は父薨去の後、關白の職を繼ぐものは無論自分であると信じて居た。處が道隆薨去の後は意外にも其弟の道兼が關白となつた。伊周は大に憤つたが止むを得ない。人をして關白を呪詛せしめたといふが、兎に角、道兼は關白の職を繼いで七日目に死んでしまつた。伊周はこんどこそと思つて居たが、それも無駄であつた。道兼の弟の道長が立つて關白となつた。

伊周流謫せらる

茲に於いてか、道長と伊周とは勢ひ衝突せざるを得なかつた。

伊周は源頼信と結托し、弟隆家と共に道長に反抗した。其結果として長徳二年罪を得て貶謫せられたのである。伊周が貶謫せられて後は道長の女にして妖艶花の如き彰子宮が中宮となり、定子宮と寵を爭ふに至り定子宮を中心として形成せられた伊周黨の勢ひは頽然として傾いたのである。

定子宮に仕へた清少納言は斯くの如くにして朝廷に其勢力を失墜したのである。

（七四）紫式部

男を醜弄した清少納言

清少納言は美人でこそなかつたが、伊周に勢力のあつた間は可なりに男を喰ひ散らして居る。これは、才氣一つで男を醜弄したといふよりも、寧ろ清少納言の勢力を利

用しようとして寄つて來る男が多かつたのではあるまいか。男にとつては才氣よりも美貌の方がよい。それも一生連れ添ふ女房にといふことにでもなれば考へもするが、

慰み半分の戀

此頃の戀は極めて浮氣なものであつた。後宮に局を並べた女房達は、云はゞ上品な娼妓傾城でそれをからかひに來る公卿さん達も、もとより慰み半分の筋である。して見れば才氣よりも顏の美しいのがよかつたに相違ない。而も清少納言のやうな女が何うして男にもてはやされたかといふにそれはかゝる女房の勢力を利用しようといふ男の多かつたことを意味する。

飛んだ處で惚氣

頭辨行成、頭中將齊信、遠江介則光などは皆清少納言の情夫であつた。『辨などをかしく良き司と思ひたれども、下襲の尻短くて隨身なきぞいとわろき』などはイヤハヤ飛んでもない處で惚氣られたものである。軍人を情人にもつたお孃さんが人の前で『文官こそ立派と思ひましたのに、劍もさげず、從卒もなしでをかしいぢやありませんか』といふのを、諸君默つて聞いて居ますか。

さればこそ、伊周が其勢力を失ひ、定子宮が崩後となつて後の清少納言は實に慘澹たるものであつた。年老ひては見かへる人もなかつたものと見へて、陋宇に寡居して其終る所をさへ知られなかつたのである。實にひどい零落のしかたであつた。

慘澹たる晩年

或る若者が其貧窮のさまを見て、お轉婆の末路を憫笑した。すると清少納言がそれに答へて、

駿馬の骨

『昔より駿馬の骨を買ふものあるを聞かず』

といふて其男に一矢酬いたといふが、兎に角、あさましい晩年を送つて、行衞さへも知れずになつてしまつた。四國に下つたといふことが世に傳へられて居る。

紫式部の幼時

紫式部は、式部丞藤原爲時の女である。幼少の頃、兄が史記を習ふのを側に聽いて居て、兄よりも先にそれを諳誦して仕舞つたといふ。

爲時が大に其慧敏を愛し、常に頭を撫して、

『女子なりしことの悔しさよ』

というたとある。稍々長ずるに從つて和歌をよくし、博く和漢の舊記を渉り、かねて朝廷の故典に通じた。

妙齡にして右衛門權佐、藤原宣孝の後妻となり專ら令聞があつた。宣孝が歿して後節を守つて寡居したが、寛弘のはじめ、上東門院（彰子宮）に召されて、宮中に出仕した。式部がちやうど三十歳の時であつた。

上東門院に召さる

上東門深く文學を好み、白氏文集を讀まんとし給ふや、式部は其侍講に選ばれて、樂府三卷を授け奉つた。宮の御父、道長が、式部の才色を悅んで、私に挑むだけれども式部はしりぞけてそれに應じなかつた。

婉順淑良

紫式部は清少納言と違つて婉順淑良にして、自ら共所長に矜らず、謹厚よく其身を持つたといふので大そう評判がよろしい。關白道長の戀をしりぞけたといふので烈女などゝいふ人もあるが、一體此頃の女官のだらしのなさ加減といふものは實にお話にも何にもならないのである。君、傾城といふが、それよりもひどいのが平安朝の女房達であつた。其中で一寸目立つて品行がよかつたからといふて何も烈女といふ程でもあるまい。式部の歌にも却々お安くないのがある。大びらにはやらなかつたとしてもチヨイ、チヨイお樂みの筋はあつたらしい。

貞女もあやしいもの

其著『源氏物語』は中宮の命を奉じて筆を執つた者とある。醍醐、朱雀、村上三朝の事蹟に假託して、空に架し虛に凭り、結構精妙にして小說辭章の宗筆と稱せられて居る。一條天皇が之を讀むで、

『源氏物語』の著

『式部はよく日本紀を讀み得たるものなり。さなくば此物語いかで、かばかりにはあらんや』

と評せられた。時人が呼んで日本紀局といふた。其著す所の日記は當時に於ける禁中の模樣を知るべくまた其平生を窺ふに足る。女は太宰少貳高階成章に嫁いで、『狹衣物語』を著はした。世に大貳三位局といふのがそれである。

日本紀局

長和年間出家し、長元四年を以て卒去した。年五十七。

（七五）赤染衛門

赤染衛門も、一條天皇の時に現はれた才媛の一人である。其母は初め兼盛といふ人

懐妊中離縁

の妻であつたが、懐妊中離縁となつて、赤染衛門を生むだ。其後、母が檢非違使、右衛門尉、赤染時用に嫁するに及び、衛門も亦養はれて時用の女となつた、赤染右衛門と呼ばれたのは其後のことである。

藤原倫子

赤染衛門の地位

頴悟にして才思あり。最も和歌に秀でて居た。和泉式部と並び稱せられて五賢女の一人に數へられて居る。初め關白道長の妻倫子に仕へ、後大江匡衡に嫁いだ。次手ながらいうて置く、此頃は貴顯紳縉の令夫人、令嬢とも皆宮中同樣に女房を置いたものである。倫子の女房などは中宮の女房と同等、若しくはそれ以上の勢力があつたものに相違ない。其處で其令夫人なり。令嬢なりの處へ、忍んで通ふ男があつたとすれば其男の供なる男は型のやうに、其女房を手に入れたものである。之は德川時代の繪草紙にもあるイキサツで、主人が面白い思ひをして居るのを明方までボンヤリ待ちあかして居るお供は此頃からなかつたものと見える。

赤染衛門が道長の妻倫子の女房であつたからといふて、決して式部や納言より格が惡かつたといふ譯ではない。

住吉神社に祈誓

これは大江匡衡に嫁いでからの話である。其子の擧周が重病に罹つて久しく癒えなかつた時、赤染衛門はいたく之を憂ひて、住吉神社に祈誓を凝らした。若し我子の命が助かりますものならば、此身の命は召されてなりともいふので三本の白幣にそれぞれ和歌をしたゝめて神前に奉納した。其一首に

歌才神に通ず

かはらんと祈る命は惜しからで
　さてもわかれんことぞかなしき

とある。すると其夜、白髮の老翁が現はれて白幣を社内に納むと夢みてさめた。處が、不思議にも其日から子の重病が日に〳〵輕快に赴いて、間もなく癒えたといふ。衛門の歌才が神の心に通じたといふのであらうか。

藤原公任の辭表

中納言、藤原公任が不平で其職を退かうとした時、一代の名儒と呼ばれた紀齋名、大江以言に囑して其辭表を作らせたけれども、何うしたものか其文章が公任の氣に入らない。其處で赤染衛門の夫、大江匡衡は更めて其起稿を依囑せられた。大江匡衡は再三辭退したけれども公任がたつてといふのをいなみ兼ねて何うしたものかと、深き

思案に暮れながら家へかへつて來た。

衛門の助言

すると妻の赤染衛門が夫の顏色を見て、何か御心配なことでも起りましたかと慰める。匡衡は徐ろに中納言に賴まれたことをうちあけて、

『今世に名高き齋名、以言の才學を以てしてなほ中納言の意を滿すに足らずとせば吾文如何で其望みにそふことを得んや』

と。果ては深い吐息にくるゝばかりであつた。之を聞いた赤染衛門は、少頃していふやう、

觀察の鋭利

『妾熟々思ふに彼の人の性極めて矜飾なり。宜しく盛に其門閥を述べて、纔に官位迚滯の意を露はさんはいかに』

と。匡衡は妻の助言のまゝに辭表を草して公任の手に差出した。公任は果して大に悅んだ。其觀察の鋭いことは概ね此の如くであつた。

或人が東へ下るに、扇を遣すとて詠むだ歌、

惜むともなきもの故にしかすがの

わたりときけば唯ならぬかな

『榮花物語』の作者か

『榮花物語』は赤染衛門の作であると傳へられて居る。宇多天皇の寛平年中から筆を起して、堀河天皇の寛治六年に至る凡そ二百年間の事を記し、就中、御堂關白道長の榮華の有樣を記すことを主眼としたものである。但し之は實錄であつて假作ではない。江侍從は赤染衛門の女である。亦和歌を以て世に其名を謳はれた。

（七六）和泉式部

性來多情な和泉式部

和泉式部は越前守大江雅致の女である。妙齡にして和泉守橘道貞に嫁し。小式部を生むだ。

道長が其歌才をめでゝ上東門院の侍女にすゝめた。性來多情な女が、風儀の亂れきつた局の中へ入つたのであるから堪らない。橘道貞といふ歷乎とした夫のある事も忘れて、爲尊親王の誘ふがままに打ち靡いた。

和泉式部の姦通

いふまでもない之は姦通である。けれども『源氏物語』などによつて見ても分る通り、此頃の女は男に對して殆ど何等の抵抗力をも持つて居なかつたのである。女といふものは男の戀を強くしりぞけるものでない。武家時代の女のやうに、死んでも厭で御座いますとか、何とかいふて手嚴しくはねつける。それでも間に合はぬ時は懷劍を拔いて抵抗する。それも叩き落された時には舌を嚙み切つて死んでしまふなどといふことは寧ろ女らしくない、はしたない擧動としてあつた。もとより大化以前と違つて姦通しても制裁がないといふ譯ではなかつたが、其姦通といふことが後世のやうに大した問題でなかつたことは事實である。源氏に操を破られた空蟬には、其夫たる伊豫介に對して申譯がないといふことよりも、女としてあれだけの男に挑まれながら、むげにしりぞけては世間の人から身の程知らぬ女のやうに思はれはすまいか、情知らずといはれはすまいか、その方が大問題であつたのである。

大した問題に非ず

空蟬の煩悶

それに、中宮の御氣に入りとなれば、下手な地方官などよりズツと羽振りがいゝ、性來多情の和泉式部が子までなしたる夫を捨てゝ親王に靡いたのも無理はない。が、

式部離緣

夫たる道貞は爾うかというて濟まして居る譯には行かない。型のやうなイサクサがあつて結局式部は離緣となつた。

かくて爲尊親王が薨去の後、式部は其御弟敦道親王と好い仲になつて相變らずふざけ散らして居たが其噂の絕えないうちに又々藤原保昌に嫁した。次手に再婚といふ事を話して置く、再婚を女の恥辱のやうに心得たのは德川時代に入つてからのことであつて、平安朝に在つて再婚は當然の權利として許されて居た、『貞女兩夫に見えず』などいふことは未だ此時代にはなかつたのである。

敦道親王と通ず

『疵もの』といふ觀念なし

又、『疵もの』などといふ考へもなかつたやうである。公然夫として披露するまでは何んな男と關係しても、また、何んな男に汚されても、大した問題にはならなかつたやうである。和泉式部の場合は二重結婚といへばいふものゝ敦道親王との關係はおもて向きではない。藤原保昌が、それを承知で貰ふといふ日になれば、さて何の事でもなかつたのである。が、唯、式部の淫奔といふことは何としても蔽ふべからざる事實である。

和泉式部

小式部内侍

小式部は、母、和泉式部と共に同じく召されて上東門院に仕へて居たが、年にも似ぬ和歌の達者といふので、誰いふとなくあれは母なる式部が代作をするのであるといふ評判が宮中に高かつた。それはちやうど母なる式部が、後の夫、藤原保昌と相伴うて丹波に旅した留守中の事であつた。宮中に歌合せがあつて、小式部も其詠人に選ばれた。

中納言定頼の諷言

中納言藤原定頼といふ人が、殿中で小式部にあつて、よせば好いのに此少女がと思ふ處から一寸からかつて見る氣になつた。

『丹波よりの御たよりは如何、内侍の心勞察するに餘りあり』

小式部定頼を辱しむ

というた。之は丹波からもう歌の草稿を送つて來ましたか、それが屆くまでは嘸かし御心配のことでせうといふのを妙にからんでいうたのである。すると小式部内侍は少女ながら中納言の袖をひかへて

大江山生野の道の遠ければ
まだふみも見ず天のはし立

僧性空に賜りし歌

とやつたので、中納言も飛んだ處で赤耻をかいてしまつたといふ。爾來小式部の才名は大に揚つたが、惜しい哉、壯年にして死んでしまつた。

此頃、播磨の書寫山に僧性空といふものがあつて大に世人の崇信を受けて居たが、和泉式部が其僧に贈つた歌といふのが、世に精妙を以て稱せられて居る。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき
遙かにてらせ山の端のつき

（七七）美人政略の大頓挫

伊勢大輔

伊勢大輔は、紫式部、清少納言、和泉式部、赤染衞門と合せて當時の五賢女と稱せられて居る。伊勢祭主、大中臣輔親の女である。上東門院に仕へて、其歌才は紫式部と伯仲の間に在りと評せられた。

出仕のはじめ御前に櫻の花を獻じたものがあつた、其時關白道長が側に在つて伊勢

大輔櫻花を詠ず

大輔を願み、筆硯を授けて一首參れとあつた。大輔立處に、

いにしへの奈良の都の八重櫻
　けふ九重に匂ひぬるかな

と詠じて御感にあづかつたといふ。

大輔の情夫

情夫には藤原朝忠、小野道風などいふ人があつた。後、越前守高階成順の妻となつて生を終へたといふ。

第二流の作家

出羽辨、少辨、馬内侍、高内侍、新宰相などは此五賢女に比べると、所謂マイノアーであつた。が、其何れも支那の學問を鼻にかけて大に新しがつた當節の所謂ハイカラたる點に變りはない。唯、私達は之等の女によつて此時代には未だ『女の學問』を生意氣として排斥するやうな習慣がなかつたといふ事を記憶して置けばそれでよい。支那の學問が入つて來たといへば女子も男子と同じく爭うて之を學んだものである。女が學問をするのは生意氣だなといふに至つたのはホンの茲三百年ばかりの事である。紫式部が兄の誤謬を指摘したなどいふ話は此考を以て聽かねばならぬ。

上東門院崩御

かくて上東門院は父道長と共に人生の榮華を極めて、承保元年十月二日といふに、病を以て、法成寺の阿彌陀堂に崩御となつた。御年八十七、日本の歴史に於いて淑房の貴盛をいふもの必ず此宮を以て稱首とする。

後三條天皇即位

之より先、藤原氏の勢力は道長に於いて正に其極に達した。道長は萬壽四年十二月四日、年六十二歳にして薨じ、其子賴通が繼いで關白となつたが、治暦四年藤原氏の出にあらざる後三條天皇が御位に卽かせ給ふに及び藤原氏は頓に其勢力を失墜した。

外戚の權威

藤原氏の勢力は唯朝廷と『姻戚』であるといふことの外に何ものもなかつたのである。彼等は己れの女の產み奉つた幼帝を立てゝ外祖の威を恣にし、己れの女を中宮に納れて私權を專らにするといふ事の外、少しも政治上の『實力』といふものに眼をつけなかつた。彼等の觀念には唯『女』『姻戚』といふやうなものの外何ものもなかつたのである。

然しながら、そんなものは一度政治上の『實力』に遭遇したが最後、暴風の前の灯のやうに又、烈日の前の薄氷のやうに跡もなく消えて無くなるものである。『實力』とは

何ぞや、いふまでもなく『兵力』である。それを動かす『財力』である。

腐り切つた足場

藤原氏は腐り切つた足場の上で舞踏をして居たのである。其處へ『親政』といふ暴風が吹いて來た。若し藤原氏に『實力』があつたならば、此暴風を持ちこたへることは何でもなかつたのである。處が藤原氏には『兵力』も『財力』もなかつた。あるものは唯美しい『女』ばかりであつた。

後三條天皇の改革

後三條天皇は英明果斷の君主にして即位以來、着々朝紀の振肅を圖り、先づ藤原氏を抑壓して其專横を制し、國司の再任を嚴禁し、莊園の新置を停め、記錄所を設けて、權門私有の土地を檢査し併せて土地に關する一切の紛爭を裁判するなど改革の見るべきものが頗る多かつたが如何せん、

地方行政の紊亂

地方行政の紊亂は奈良朝以來の積弊をうけた上に、藤原氏の驕奢によつて、到底救濟の望なき狀態に在つたのである。

後三條天皇は延久五年五月七日、御年四十にして崩御し給ひ、皇太子貞仁親王立つ、之を白河天皇と申し奉る。

白河天皇は在位十四年にして、位を皇太子善仁親王に讓り給ふ。之を堀河天皇と申し奉る。即位の時御年甫めて八歲であつた。然るに白河天皇の讓位は、中宮賢子宮を喪ひ給ひし一時の悲哀に出たもので、實際乾綱を解き給はんとの御意ではなかつたのである。

中宮賢子

其處で白河天皇は讓位の後も出家して法皇と稱し、鳥羽の離宮に坐して政事を聽き給うた。

院政の始め

之が日本に於ける『院政』の初めである。即ち天下の大事は皆院宣を以て決し堀河天皇は唯改元、節會、叙任等の儀式を擧行し給ふのみであつた。されば院宣の効力は往往にして詔勅を踰ゆることがあつた。

鳥羽天皇即位

堀河天皇は嘉永二年、御年二十九歲にして崩御となり。皇太子宗仁親王が繼いで御位に即かせられた。之を鳥羽天皇と申し奉る。而して白河法皇の院宣は依然としてもとの通りであつた。

（七八）待賢門院

璋子法皇に養はる

白河法皇は大納言閑院公實の女璋子を、鳥羽の離宮に入れて養はれた。

璋子が鳥羽の離宮に召上げられた時は未だいたいけな少女であつたが、天性の麗質はすでに備はつて、そゞろに人の心を動かすものがあつた。初老を過ぎた法皇は璋子を見ることさながら掌中の玉にもひとしく、『之を懷抱に置いた』とあるから、孫女を可愛がるやうにして寵愛されたのであらう。

法王と璋子宮

璋子入内

春もやゝ景色整ふ頃となつては其一顰一笑よく、公卿百官を惱殺するに足るものがあつた。璋子は初め藤原忠通に嫁せんとしたが、故あつて止むだ。此頃から、法皇と璋子とのいまはしい關係がともすると世上の噂に上つた。

其結果でもあらうか、法皇は急に璋子を以て鳥羽天皇の中宮と定め給うた。永久五年、璋子從三位に叙し、女御となつて入内した。越えて元永元年中宮となつた。此時帝が十四歲、璋子宮が十七歲、法皇が六十五歲といふ御年であつた。

流言畫語紛々たり

翌元永二年には璋子宮が早くも御懷胎となつた。之に就いて又ぞろ世上にいまはしい風說が起つた。璋子宮の御腹は天皇の御胤でない。法皇の御子であるといふ噂が誰いふとなく世間の口から口に傳へられた。之は思ふに天皇が十四といふ御年である上に宮の御懷胎があまりに早かつたから起つた憶說であらう。

大亂の遠因

兎角する中に元永二年の五月となつて璋子宮は顯仁親王を生み奉つた。之が後の崇德天皇である。處がかのいまはしい噂は天皇の御耳にも達したものと見えて、其後鳥羽上皇と崇德天皇との御中は親子ながら兎角圓滑を缺いて、遂に大亂の遠因をなすに至つたのは、淺猿しとも淺猿しき次第であつた。

璋子宮御寵愛

斯くの如く鳥羽天皇は顯仁親王（崇德）をわが胤に非ずとして疎むぜられたけれども、璋子宮の美貌には流石に心を奪はれ給ひしものと見えて、其御寵愛はいよ〳〵深くなりまさつた。後白河天皇をはじめとして、數人の親王、皇女が崇德天皇に次いで其御腹にやどつた。

鳥羽天皇は在位十六年の後、保安四年顯仁親王を立てゝ皇太子となし、卽日御位を

院政四十三年

藤原泰子

美福門院

譲られた。之を崇德天皇と申し奉る。大治四年には白河法皇、御年七十七歳にして崩御あり、鳥羽天皇が上皇の位を襲うて院中に政を聞き給ふことは從前の通りであつた。白河法王の院政は實に前後四十三年の久しきに亘つた。

鳥羽上皇は長承二年、關白忠實の女、藤原泰子を納れ、翌年尊んで皇后といひ賀陽院と申し奉つた。譲位の後頻りに美人を後宮に徵されたのはをかしいやうでもあるが、考へて見ると帝は二十三歳の時御位を崇德天皇に譲られたのである。血氣盛りの御年を以て、責任の地を避けられたのであるから其御遊蕩は寧ろ自然の事とも云ひ得る。

上皇はまた中納言、藤原長實の女、得子の容姿絶妙なるを愛で給ひ、寵幸日に厚く、保延二年從三位に叙し五年、女御として近衛天皇を生ましめ給ふ。久安五年に至つて美福門院と申し奉つたのが、此宮のことである。

之より先、崇德天皇は御母、璋子宮を尊んで待賢門院と申し奉た。然るに美福門院が新に鳥羽上皇の寵を得るに及んで、待賢門院は勢ひ忘れられざるを得なかつた。そ

待賢門院御失意

津守島子院を呪ふ

れも其筈、美福門院の召されたのが二十歳前後、待賢門院は此時既に二十五六であつた。

若く水々しき美福門院の爲に寵を奪はれた姥櫻の待賢門院は嫉妬の焔に御身を焦し、遂に美福門院を呪詛し給ふに至つた。

源盛行の妻、津守島子といふものは待賢門院の侍女であつたが、盛行は其縁故から、宮の旨をうけ、西宮神社の巫女朱雀をして美福門院を呪詛せしめた。然るに此事が發覺して盛行は檢非違使の手に逮捕せられ、搜索の結果、西宮の神殿からは證據の銀筥が現れたので、盛行は流刑に處せられた。

第四章　過渡時代

（七九）美福門院

僧信朝院を呪ふ

源盛行の一件が落着して間もなく、待賢門院（璋子）の乳母の子、僧信朝といふものが又、同じ嫌疑を以て檢非違使の手に逮捕せられた。日吉神社に美福門院（得子）を呪詛したといふのである。

待賢門院崩御

美福門院全盛

茲に於いてか待賢門院も其責を免るゝことが出來なかつた。卽ち薙髮して御子崇德天皇に依り、三條の高倉殿に謹愼の意を表せられたが、久安元年四月病を得、同年八月を以て崩御となつた。御年四十五歳とある。

斯くの如くにして世は美福門院のものとなつた。之より先、鳥羽上皇は美福門院の生み給ひし體仁親王を寵し給ふこと甚しく、崇德天皇に强ひて保延五年五月立てゝ皇太弟となし、幾もなくして讓位をも迫られたけれども、前項に述べたやうな、いまはしい事情から、親子とはいゝながら兎角仲の惡い御間柄である。天皇は頑としてう

近衛天皇卽位

後白河天皇卽位

なひ給はざりしを、二年の後上皇は更に迫つて遂に體仁親王を立てた。之が近衛天皇である。時に御年三歳。

茲に於いてか日本は同時に一人の天皇と、二人の上皇とを有するに至つた。時人、鳥羽上皇を呼んで本院、崇德上皇を呼んで新院と申し奉つた。而して鳥羽上皇は近衛天皇の卽位と同時に落飾して法皇と申されたが、其院政を聽き給ふことは依然として變らなかつた。

既に述べた通りの事情から推して考へても、崇德天皇を無理にしりぞけて、近衛天皇を立てることに就ては、美福門院が背後にあつて如何に鳥羽法皇を動かし奉つたかを知る事が出來る。處が近衛天皇は御年十七歳にして崩御ましまし後白河天皇が繼いで御位に卽かせられた。之は待賢門院の御腹である。美福門院が特に法皇にすゝめて待賢門院の御腹なる後白河天皇を立てたのは、近衛天皇の早生を以て、崇德上皇の呪詛に出でたるものとなし崇德上皇の御子、重仁親王を立てることを欲しなかつたからである。更にいへば、崇德上皇を恨むのあまり、なき待賢門院に對する舊怨を忘れた

のである。

美福門院御薙髪

かくて世は保安元年となつた。崇德上皇が恨みに恨み奉つた、鳥羽法皇は病氣に罹つて重態に陷られた。美福門院は事態の甚だ重大なるを看て取り、薙髪して眞性と稱し、法皇にせまつて後事の處分を請うた。

法皇北面の武士を召す

法皇も院のすゝめを尤もとなし北面の武士十人を召して誓書を美福門院に上らしめた。下野守源義朝が其首に居つた。斯の如くにして美しき美福門院は政府の實力を掌握した。次いで七月二日といふに鳥羽法皇は天下の大亂を前に見て崩御となつた。

崇德上皇激怒

此時、崇德上皇の御胸には、如何なる祕密が藏まれて居たであらうか。法皇の崩御をきこしめして急に入臨しようとされたのを右衞門權佐、藤原惟方が遺詔と稱して拒み奉つた。上皇の憤恚はまさに其極點に達した。還御匆々藤原賴長を召して宣給はく、

『天智は舒明の御子なり。孝德其子を舍きて之を立て給へり。仁明は嵯峨の皇子なり。淳和其子を舍きて之を立て給へり。華山、一條に先ち、三條、後朱雀に先ち給ふ。

白河殿の戰備

禁裡の警戒

朕不肖なれども先帝の首子にして、躬に大位を踐めり。皇統の係る所實に重仁（崇德の御子）に在り。而るを先帝、之を舍きて、匪文匪武の四の宮（後白河）を立て給へり。朕憂憤なきを得ず。今先帝既に崩ぜり何を憚りて大事を擧げざらんや』と。賴長も直に贊成し奉り、戰鬪の準備は着々として歩をすゝめた。

流言は紛々として、道路は急に騷擾の甚しきを加へた。

源義朝、檢非違使源義康は、禁裡を警衞した。平基盛は宇治に、源季實は淀に、平雄繁は粟田口に、平實俊は苦集滅道に、藤原資經は大江山に夫々兵を率ゐて要所を固め、上皇の召に應じて京に入らんとする諸國の兵を支へ止めた。

美福門院は賴長間道より白河に入れりとの報に接し、遺詔を矯めて安藝守平清盛を召した。清盛は直に馳せ參じて禁闕の守護に任じた。

（八〇）　常磐御前の素性

爲義白河殿に參る

源義朝の父、前檢非違使爲義は、崇德上皇の召に接し再三辭み奉つたけれども聽されない。禮を厚くし、辭を重くしての御招きに、武士の意氣地として參らざるを得なかつた。

爲義に隨つて白河殿を守るもの、曰く賴賢、曰く賴仲、曰く爲宗、曰く爲成、曰く爲朝、曰く爲仲。

戰鬪始まる

戰鬪は保元元年七月十一日の味爽を以て開始せられた。

清盛、義朝の軍は狂瀾の巖に激するが如き勢ひを以て、白河殿に押し寄せた。鎭西八郎爲朝の弓勢は、都門の華奢になれた敵兵の膽を奪つて、大に其鋭鋒を挫いたけれども、既に機先を制せられた戰はまた勝つ可くもなかつた。

白河殿陷落

白河殿は遂に陷つた。上皇は其日の黃昏、走つて仁和寺に入り給ひしが、二十三日を以て讃岐に流され、爲義は糺の森に降參して、子、義朝の手に殺され、賴賢、賴仲、爲宗、爲成、爲仲も次いで捕へられて船岡に斬られ、罪は其幼弟乙若、龜若、鶴若、天王にまでも及んだ。

爲朝捕へらる

ひとり爲朝は其蹤跡をくらまして九州に落ち延びんとしたが、途に捕へられて伊豆の大島に流された。

美福門院と武門政治

白河法皇以來鬱結し、鬱結して未だ爆發するに至らなかつた朝廷の妖雲は、茲に保元の亂となつて戰慄すべき慘劇を惹き起したのである。而して此大亂の背後にあつてあらゆる廷議を操つたものは美福門院、藤原得子其人であつた。

得子が院宣を矯めて平清盛を召したことを思ひ、亂後清盛が源氏の一族を殲滅せんとして嚴峻苛酷を極めたことに思ひ至れば、私達は平家が源氏の勢力を凌いで勃興した、其裏面の消息を察するに難からぬものである。然り而して、保元の亂以後、朝廷の實力が頓に衰へて遂に武門政治の世を現ずるに至つたといふにつけても、私達の忘る可からざるは美福門院の名である。此時院の御年四十。

美福門院崩御

かくて美福門院は平治の亂を見て、永曆元年十一月といふに御年四十四歲にして押小路殿に崩御となつた。

平治の亂の顚末は正史に讓る。唯、此戰爭に就いて思ひ出づるのは常磐御前の名で

日本の代表的貞女

ある。

常磐といへば、小町が美人として知らるゝ如く、貞操といふ問題に就いて何時でもおもひ起さるゝ名前である。然しながら私は此時代一般の風俗から推して、常磐御前を日本の代表的貞女のやうに云ひなすのは、滑稽極まる俗説であらうと信ずる。

常磐御前

先づ常磐御前の素性を尋ねると、近衛藤原皇后に奉仕した女房である。初め皇后が入内する時に、御父、藤原伊通が侍御を妙選した。其時に常磐は第一の美人として選ばれたのである。

後宮の女房と田舎武士

それが、左馬頭源義朝の妾となつて、三人の子をまうけた。前にもいうた通り、後宮の女房といふものは後世の歌妓傾城に似たもので、朝紳の玩弄物であつた。されば、それが武人の手に下げられるまでには幾人の慰みものになつた末か分らないのである。（第七十二――七十七項參照）

藤原氏の末から、武人が頭を擡げて來たので、曾ては高くとまつて、容易に許さなかつた。後宮の女房達が武骨な田舎武士にまでも喜んで、身をまかせるやうになつた

菖蒲の前

又朝廷に於いても、屢々武人の功を賞する爲に美人の名ある女房を下し置かれるといふ風も起つて來た。

祇園の女御

近衛天皇の仁平三年に源三位頼政が勅命を蒙つて、殿上の鵺を射た。其時主上が御感のあまり獅子王といふ銘劍に菖蒲の前といふ女房を副へて給はつたといふことがある。恁うなると美人も一種の經濟的貨物として取扱はれた譯である。

又、『平家物語』にもある通り清盛の父の忠盛は眇で、頗る醜い方であつたが白川院の召し給ふ、祇園の女御を賜つた。清盛は卽ち其女御の腹である。

義朝が常磐を妾にしたのも無論こんな關係からであつたに相違ない。義朝は唯勇者として常磐といふ美人を贏ち得たのである。一種の物品として、義朝といふ强者の有となつた常磐に、果して、後世の人のいふやうな貞操があつたであらうか。

（八一）常磐と袈裟

常磐御前の素性は分つた。次は常磐御前が何故に日本の代表的貞女として、稱へられるに至つたかといふことである。

結果から推した架空の説

私は思ふ。理由は極めて簡單である。常磐が清盛に乞うて、命を助けて貰つた三人の子、今若、乙若、牛若の内、牛若が長じて源義經と名乘り、兄、頼朝を扶けて平家を西海に殲滅した。之を小説として考へる時は、常磐が非常な貞女であつて、血を吐くやうな無念を忍び、現在敵の清盛に肌身をゆるして、源氏の爲に三人の子の命を助けたといふ方が面白い。其處で、例の『歴史小説家』が常磐を大そうな貞女に祭り上げてしまつたのである。之を要するに若し義經があれだけの人物にならなかつたならば、常磐は義朝の妾として、名もなく、朽ちてしまつたのである。常磐の貞節といふことは結果から推した架空の説である。

此時代の真操問題

既に度々いうた通り、此時代には女の貞節というても德川時代のやうに嚴格なものではなかつた。夫に捨てられ、夫に別れた女が再婚をするのは、寧ろ當然の事として認められて居た。又、後世の武家の女房のやうに貞操を守る爲に男子に抵抗するなど

といふことは先づ以て無かつた。隨つて姦通といふ事すら、大した問題にはならなかつたのである。

袈裟御前

例の袈裟御前の話なども頗る怪しいものである。

袈裟は人も知る源渡の妻で、小字を阿部麿といひ、母を衣川の老嫗といつた。上西門院の雜仕として美人の評判が高かつた。渡とは幼い時からの許嫁で、其仲のむつましい事は外の見る目も羨しいばかりであつたとある。

遠藤盛遠の横戀慕

處が同じく上西門院北面の武士に遠藤盛遠といふ荒武者があつて、袈裟の美貌にゾッコン參つてしまつた。其處で袈裟の母、衣川の老嫗を捉へて是が非でも吾輩の思ひを遂げさせよ。若し否といはば刺し殺すぞと迫る。老母も一時のがれにそれでは今宵首尾を致しませうと答へる。

衣川の當惑

母の當惑を見るに見かねて袈裟が遠藤盛遠の御機嫌を取る。盛遠は馬鹿に嬉しがつてしまつた。けれども渡があつては枕を高く寢る譯にも行くまいといふので、袈裟が盛遠にすゝめて渡を殺させる。もとより亂暴な盛遠の事であるからよろしいと早速承

知をしてしまつた。

其晩、盛遠は渡の寢室に忍び込んだ。袈裟が髪を洗はせて置くといふのをたよりに探り寄つて一刀のもとに盛遠の首を斬つて落した。處がよく見ると、それは袈裟の首であつた。袈裟は死を以て貞操を守つたのである。盛遠は非常に感激して直に髪を剃つて坊主となる。之が難行苦行を積んで文覺上人となつたといふのが、世間一般に知られて居る袈裟御前の物語である。

袈裟盛遠を欺く

『盛衰記』の異說

處が『源平盛衰記』にある條理は少し之と違つて居る。

袈裟は盛遠に殺される以前、盛遠に其貞操をゆるしたとある。勿論、これは盛遠が強ひてせまつたのであらう。が、兎に角、盛遠と關係をつけてしまつた。一度は二度と情交の重なるにつれて渡の方でも氣がついて嚴しく袈裟をせめる。袈裟は盛遠と渡との中に立つて身の置き處もないやうな羽目に陷つてしまつた。其處で死を決して盛遠の手にかゝり、渡に申譯をしたといふのである。

袈裟盛遠に許す

これは何うも後者の說が正しいやうである。袈裟を手に入れ度い爲に其母を脅迫するといふのもをかしいが、其母が渡といふ歷乎とした武士があるのに一應事の始末を打ちあけないといふのもをかしい。之は何うも『源平盛衰記』にある條理の方が自然である。當時の官女上りといへば先づ恁んなものであつた。盛遠のやうな亂暴者にあつたのが最後で何等の抵抗力もなかつたのである。それを大そうな烈婦のやうに云ひなしたのは、後世の人が其時代の道德から推して、此時代の女を考へたからである。

女に抵抗力なし

常磐は常磐とても其通りで、決して世間の人の考へるやうな複雜な考へから清盛にゆるしたのではなかつたのである。何といつても根が後宮の女房であつた。

常磐の自訴

（八二）仇敵に操を賣る

義朝が縛に就いて後、常磐御前は三人の子をかゝへて大和國、龍門の里に身を潛めて居たが、自分の爲に母が捕へられたと聞いて、居たゝまれず、六波羅へ自訴して出たのである。

常磐の貞操も怪しいもの

若し常磐が眞に源氏の將來を思ふならば母を見殺しにしても三人の子を庇はなければならないのである。然るに常磐の陳情は子等と共に刑に就くから、母の命を助けて呉れといふのであつた。これによつて見ても、常磐の貞操は頗る怪しいのである。

清盛常磐を納ろ

處が、清盛は常磐の容色にムラ〳〵と野心を起した。斯んな美人をムザムザ獄卒の手にかけるでもないと思つたのか三人の子と共に其罪を許さうといふことになつた。一門は事の甚だ非なるを說いて清盛を諫めたけれども、清盛は頑として應じなかつた。

異常の事に非ず

已に兄の賴朝を赦した。今其長を助けて幼を殺すは甚だ謂はれなきことである。と、如何にも尤もらしい理屈を揑ねてトウトウ三人の子を許し、常磐を引き入れて慰みものにしてしまつた。

後世常磐の貞操を說くものは、常磐が現在一門一族の仇敵たる清盛に肌身を許して清盛との間に一人の女までなした其事の甚だ異常なるを思ふのである。然しながらこれが抑も間違のもとで、德川時代の武家の女房が敵の辱めをうけない前に自殺して果

男の腕力に對する女の防衛

てるとか、又懷劍といふものを用意して居て男に抵抗するとか、手込めにあへば舌をかみ切つて死んで仕舞ふとかいふのを標準として常磐時代の女を想像するからいけないのである。當時にあつては女が、現在骨肉の仇たる男に貞操を委すといふ事も決して異常な例ではなかつたのである。

平時忠の事

平時忠は平清盛の妻の兄であつて高倉、安德の二朝に仕へ、若りに顯要に昇つた。清盛を助けて勢焰一代を傾け、叙位除目多くは此人の意に出でたといふ。時人は當來の大臣を以て目し、平關白を以て呼んだといふのであるから、其平家にあつて重きをなして居たことは推して知るべきである。

時忠の女

壇の浦の戰ひには、內侍所を護衛し、平家滅亡の後は、神鏡を護衛して京都に還つた。

此人が義經の歡心を買つて、其罪を赦されようといふので、子の時實と相談の上で、一人の祕藏女を義經に納れた。之は時實の策略で、時忠は流石に親として掌中の玉と愛でいつくしむだ、最愛の女を一門一族の仇敵たる義經の玩弄物として、提供するに忍

仇敵に操を賣る